

535
249



始



9.9.4

内外
理想

想
郷
物語

大正
14. 9. 14
内交

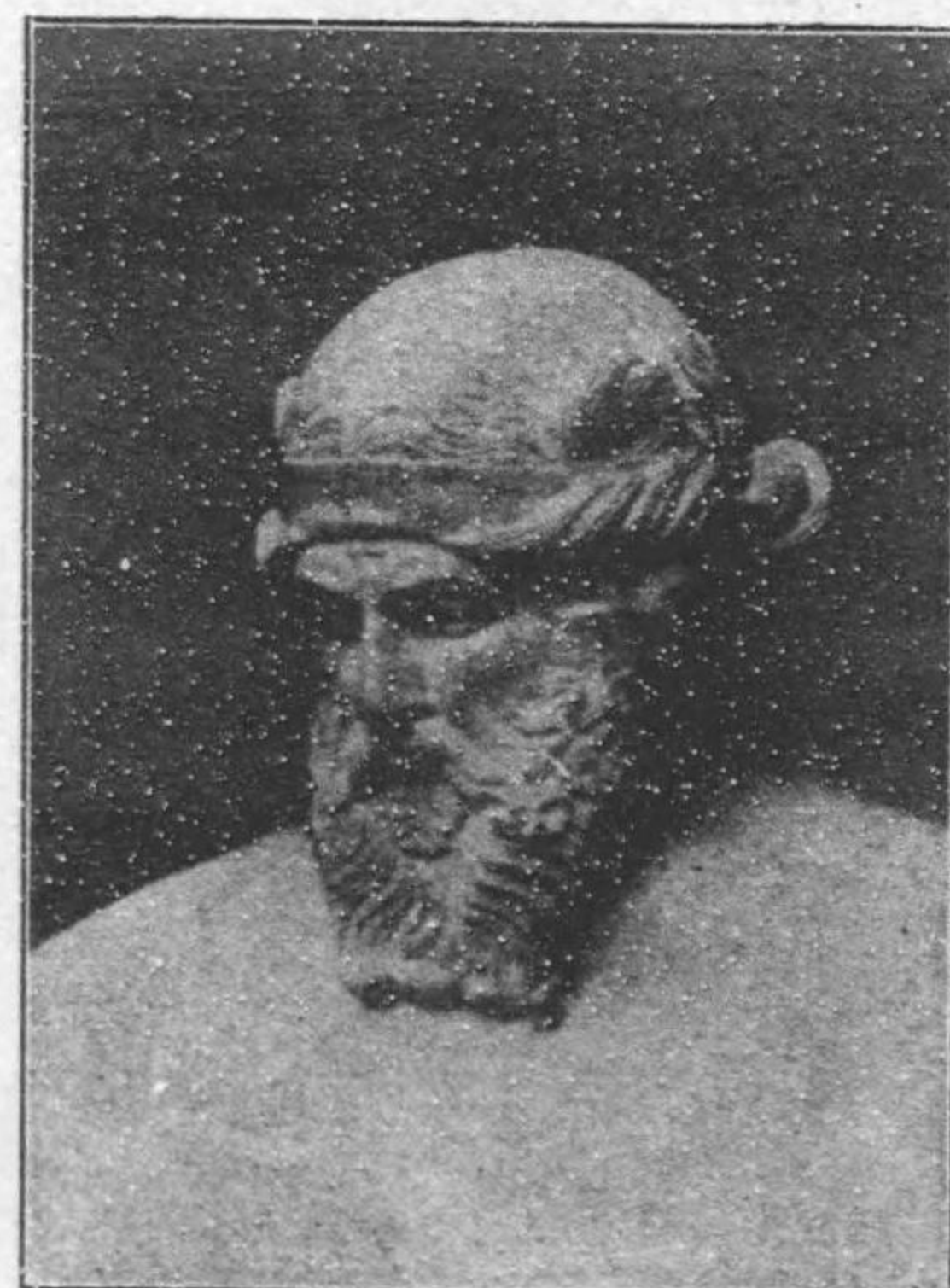
ユウピトアヲ描キタイ人



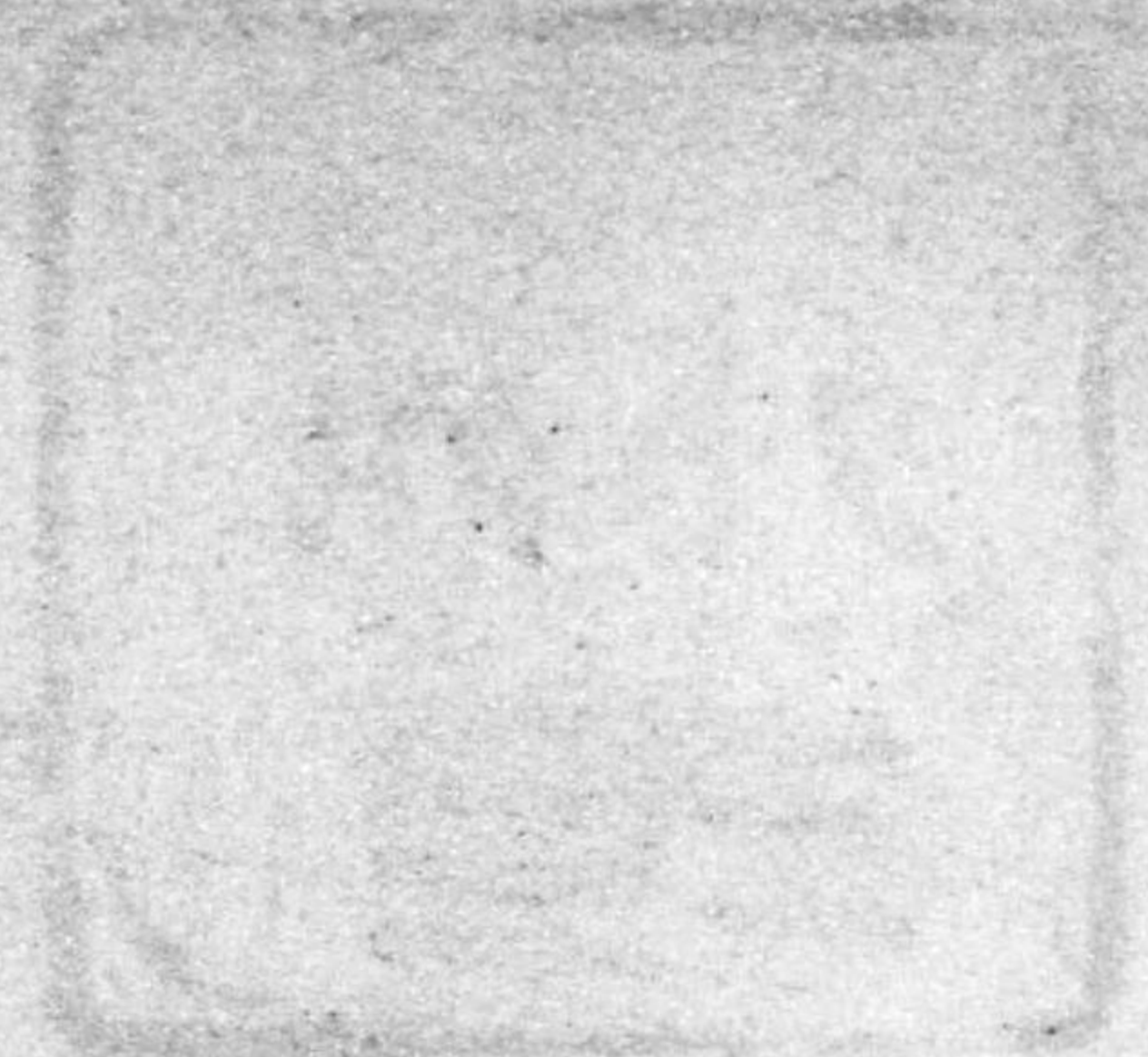
佐藤信淵先生



トマス・アダムス氏



プラトーン氏



新らしき村の機關

<p>村</p> <p>設=生積ニヲ町 備必産立足獨村 要及及ル立ノ財 ナ生共財ス財 ル計同産ル政</p> <p>實解村くなくのせ 顯決農てけく機し する家のこれ充關め るの行そば實のよ て間詰なした組そ 理題つぬもはして 想はつぬもはして 郷忽た。の。下て がち農斯でのそ</p> <p>關機濟經</p> <p>販信用利購 賣用用買 組組組組 合合合合</p> <p>掌置ノニ外事各事組 ラキ事付二事部部合 シム事務キ五ヲ長ノ長 ム事務員一十置(外(理 ヲヲ人戸キ理ニ</p>	<p>村是</p> <p>關機育教</p> <p>主處戶青老 婦女主年人 會會會會會</p> <p>シム會會事社會 ヲ務ノ指ヲ置教長 ヲ掌導導キ育下 シムヲ及及各主ニ</p>	<p>家</p> <p>具(資ルト一 設(本)ベ生活家ノ 備(及)キ家産ニ足 家産)</p> <p>と濟校のたべ左家 共機及教るく右と に關町化役町の村 聯た村機場村理の 絡の村關をの想の して産産なして政を 活業業なるて治成た 躍組及小町機就以 合經學村關す上</p> <p>關機治政</p> <p>固(家(國)委 有事(スノス)任 務(ル爲)務</p> <p>ヲ置人十入村 掌其ノ戸役助 シム務記付外收 ヲシム務一五收</p>
---	---	---

自治自主ノ精神的確立

法律第一號を以て發布せられたる市制及町村制の運用を完からしめたる村民の幸福を圖り又併せて國家の基礎たる村の發達を期するには今この町村の仕組では本當のことは出來ませぬ

理想郷の實顯

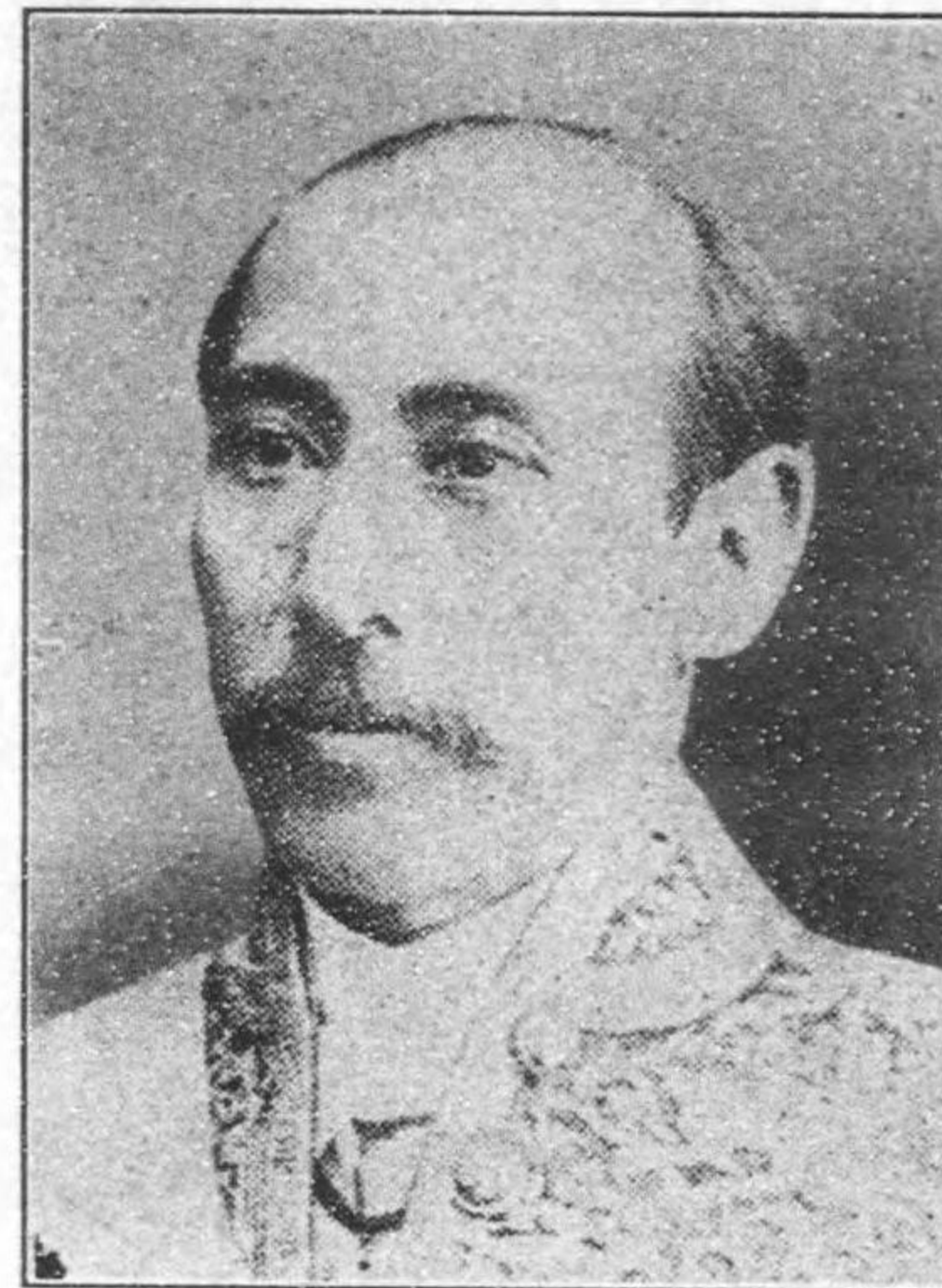
自治の精華

眞善美の極致

個人及團體ノ經濟的獨立

尙此組織に據ると町村費や組合の經費等で二戸の負擔約二十圓の増加は免れますまい、然し收入に於て二戸平均百圓内外を増加する見込があるから經費の増加は却つて村家富強の基となる

ユウピトアを描たい人



矢野龍溪先生

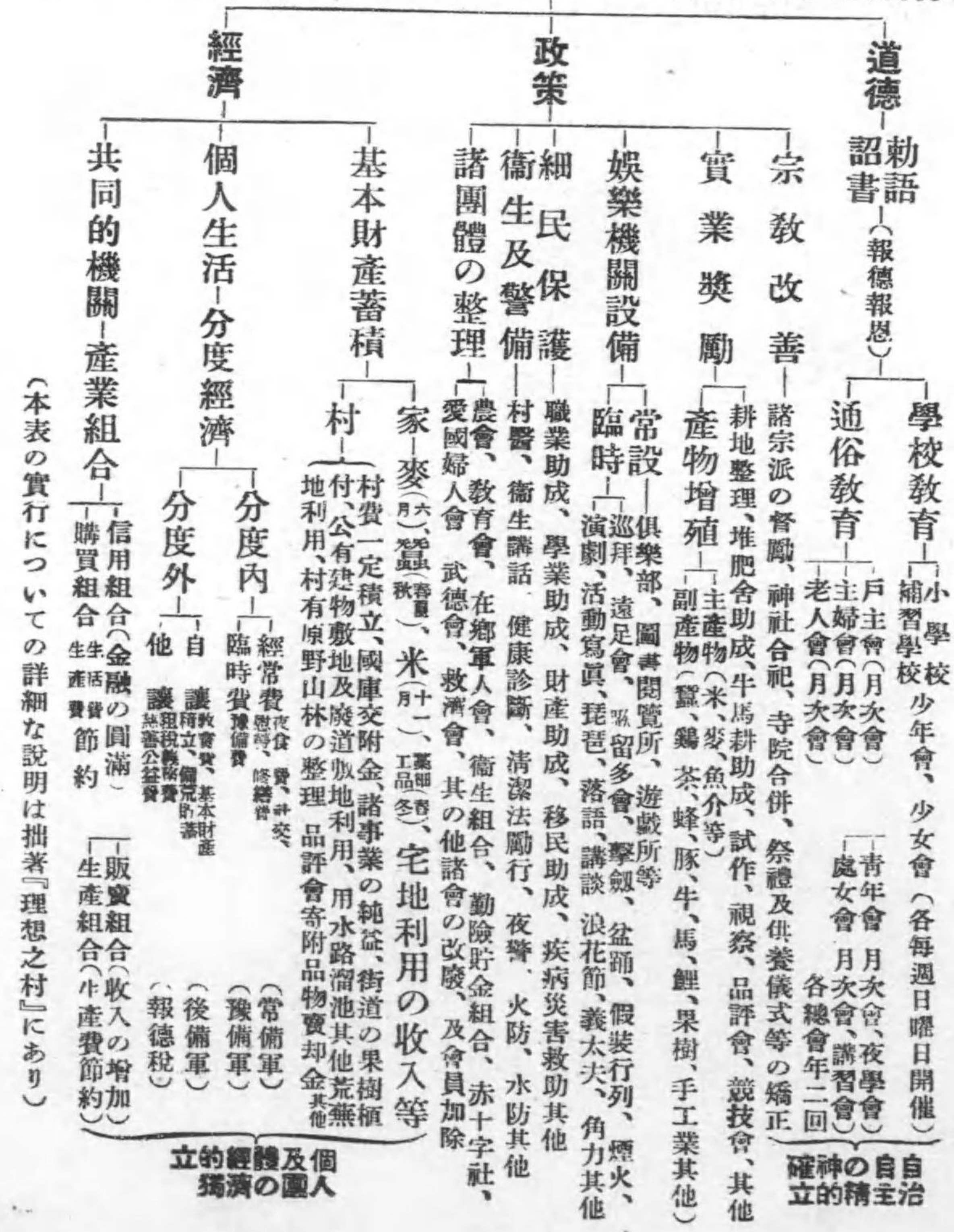
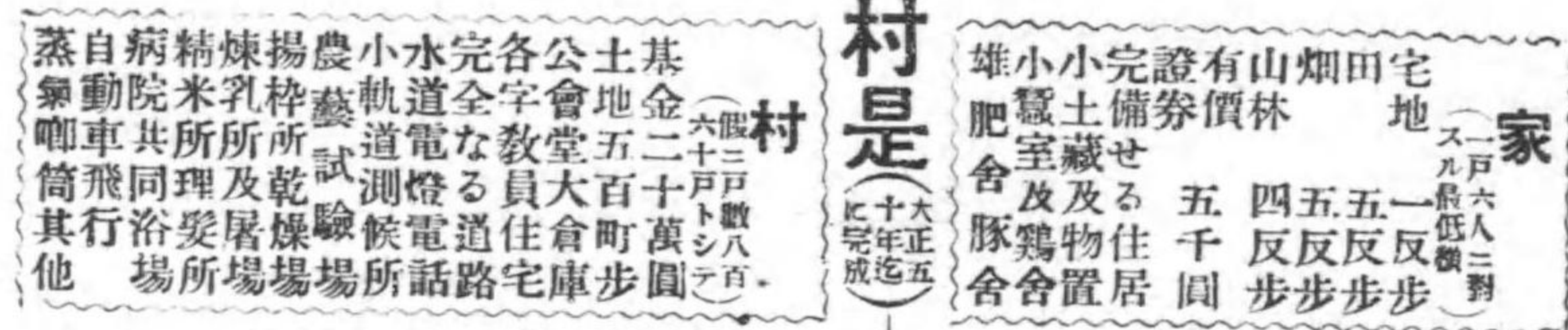


ウヰアリ・ム・モリス氏



ハバウト・エウリス氏

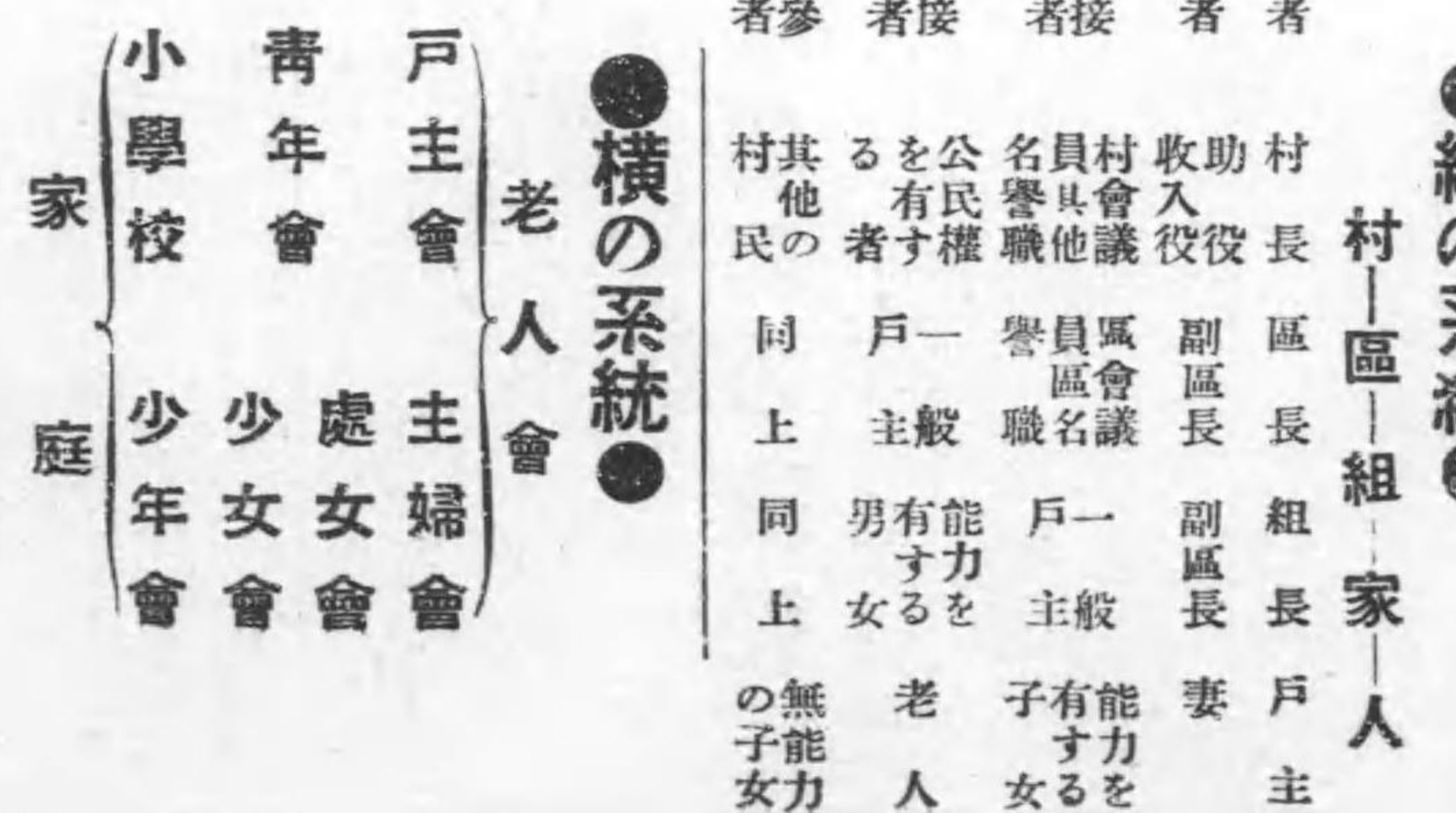
新らしき村の理想



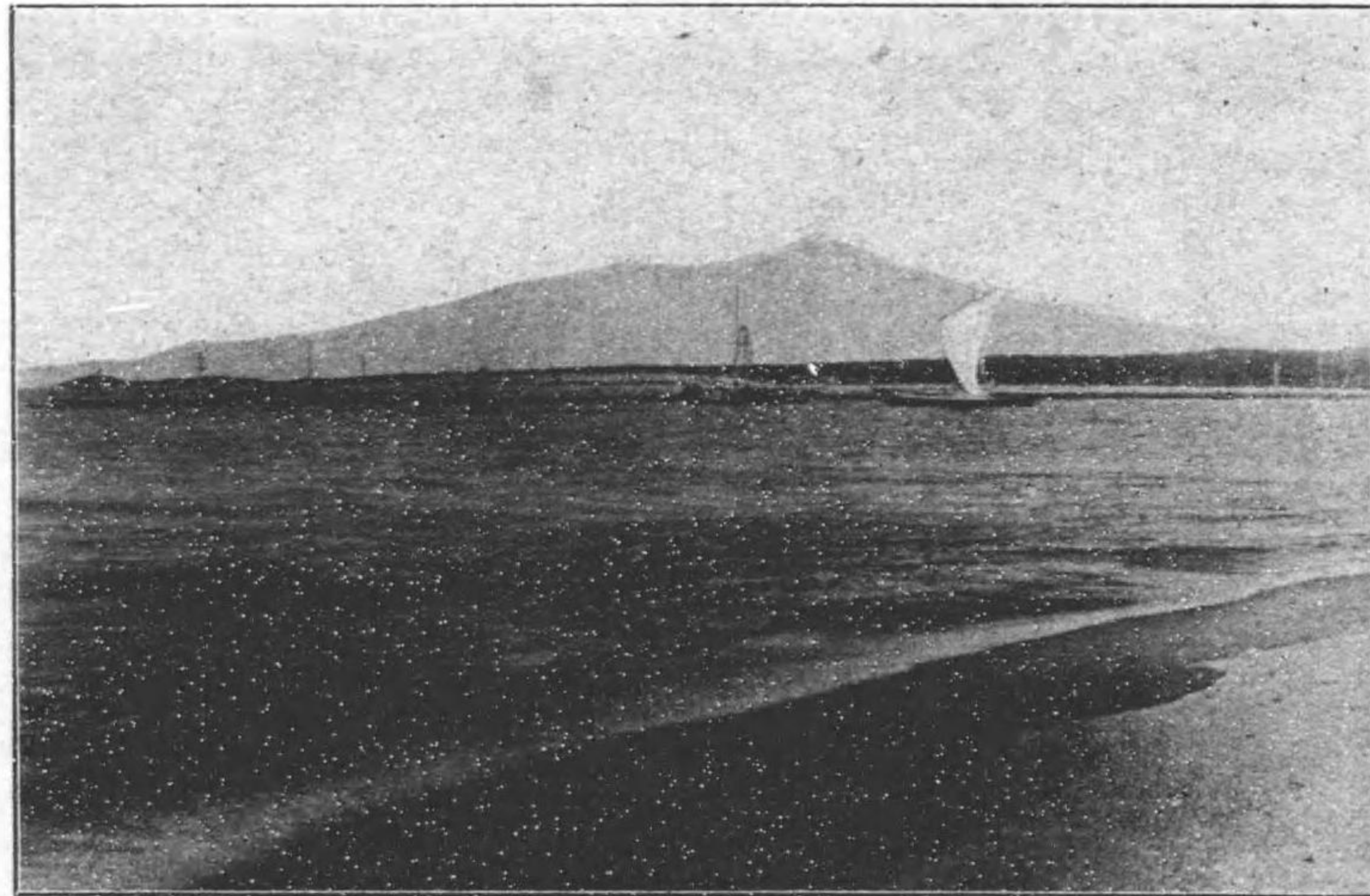
新らしき村の組織

自治の精華

(この組織や實行についての詳細は拙著『理想村』にある)



(本表の實行についての詳細な説明は拙著『理想村』にあり)



山海鳥む臨りよ港田酒



(てに麓山海鳥月八年三十正大)者著るす查踏な地設建郷想理

明星自治團の歌

石田徳吉作歌
中山善平作曲

莊重に ♩=80

1. ヒイキノ ヒーカリ チカウナク
 2. こんどん とーして ひねむり
 3. コノメウ ゼーウソ シメイコソ

ニシキマ ノーハユ ウスヅキテ
 あさひの さーすに またどほき
 ワカダン キーシガ イツチシテ

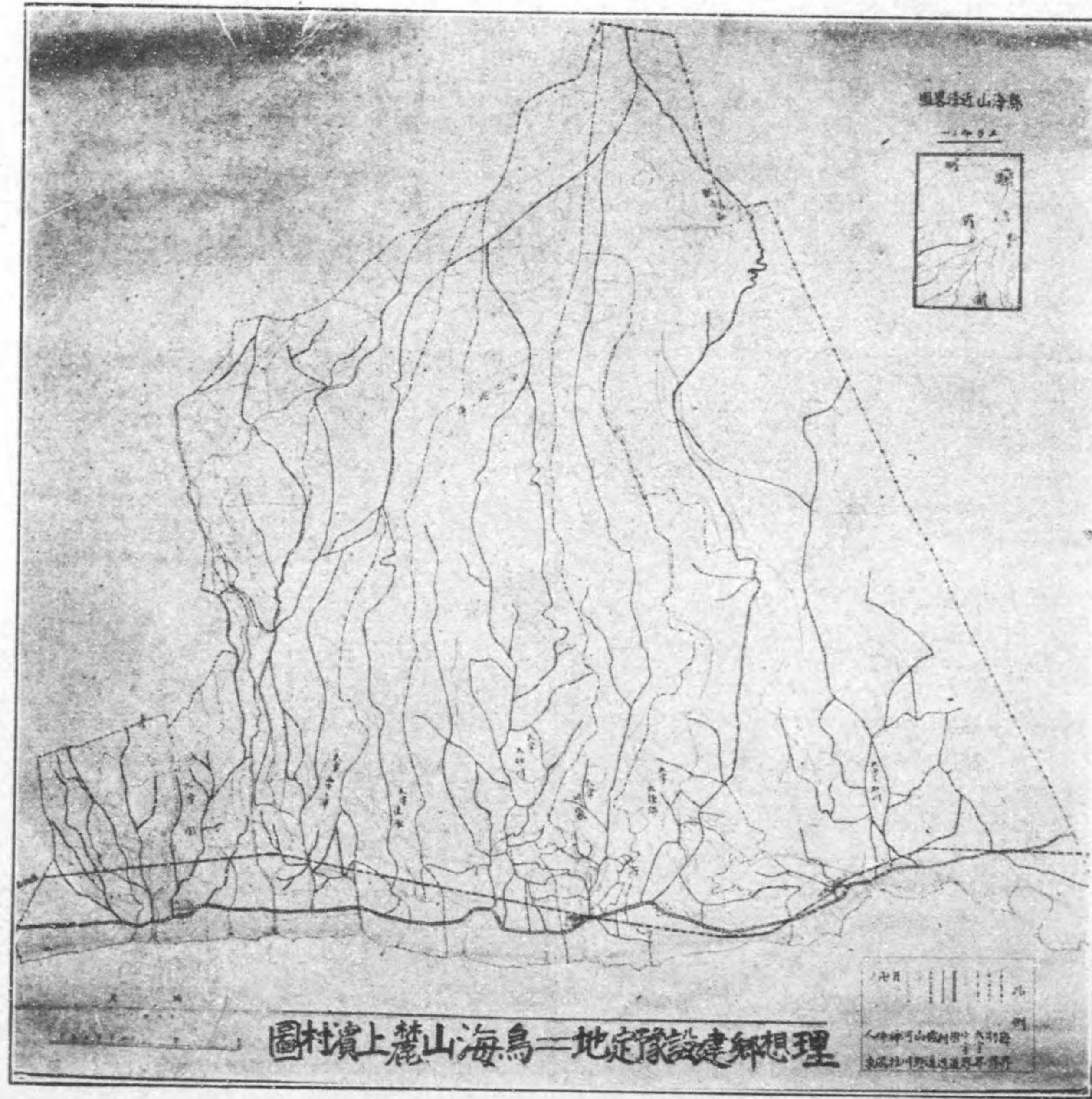
ヤミビト ノーヨニ セマルトキ
 きばうの そーらに けいけいど
 フムベキ ミーチゾ ツトメヨヤ

ニセイノ ヒーカリ ランラント
 われまつ ひーどり さめたちて
 リタクノ ホーシハ ヤミニタリ

ラーンチ テラスハ ナニモノゾ
 じんどう しめすは なにものぞ
 デーチノ ヒヤククニ チニニホフ

リーヒノ ヲウゼウ ナラザルカ
 あーけの めうぜう ならざるか
 めいりや キヤウザ ウチクヲ

るあに頁五九四は文全の歌



吾か徒の理想郷建設豫定地と面積最も廣く
開墾有望なる秋田縣由利郡上濱村地勢圖



吹浦村陳屋の澤に於ける水貯池豫定地の測量の光景



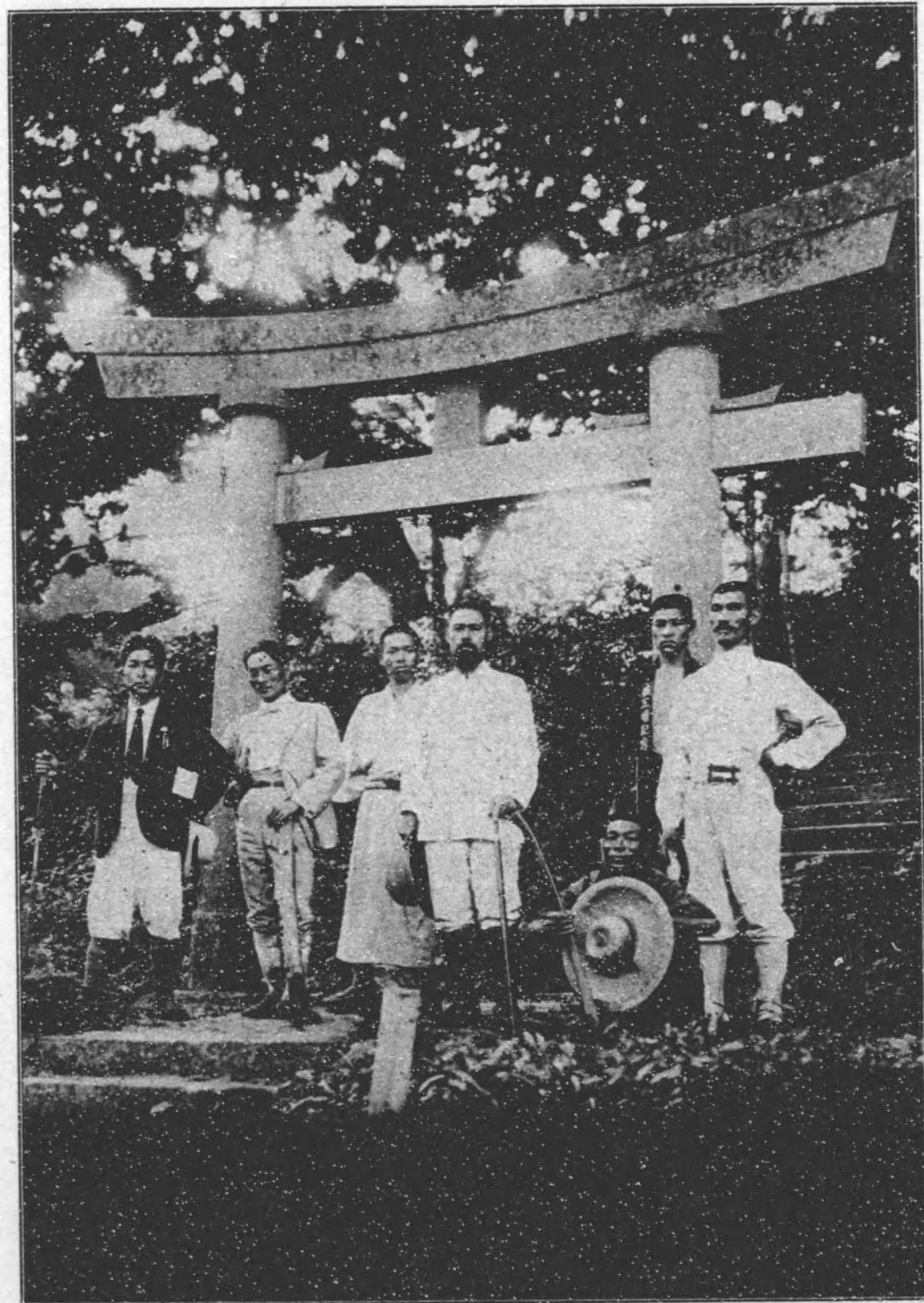
理想郷建設地探検隊一行・山形縣吹浦村役場前にて撮影
(大正十二年八月)



豫定地探檢第二日目観音森の下にて貯水池の位置を撰定する



豫定地探檢第一日目鳥海山中山腹陳茶の場前より開墾地定見
下してある光景



豫定地探檢第三日目上濱大砂川區八幡神社前にて撮影



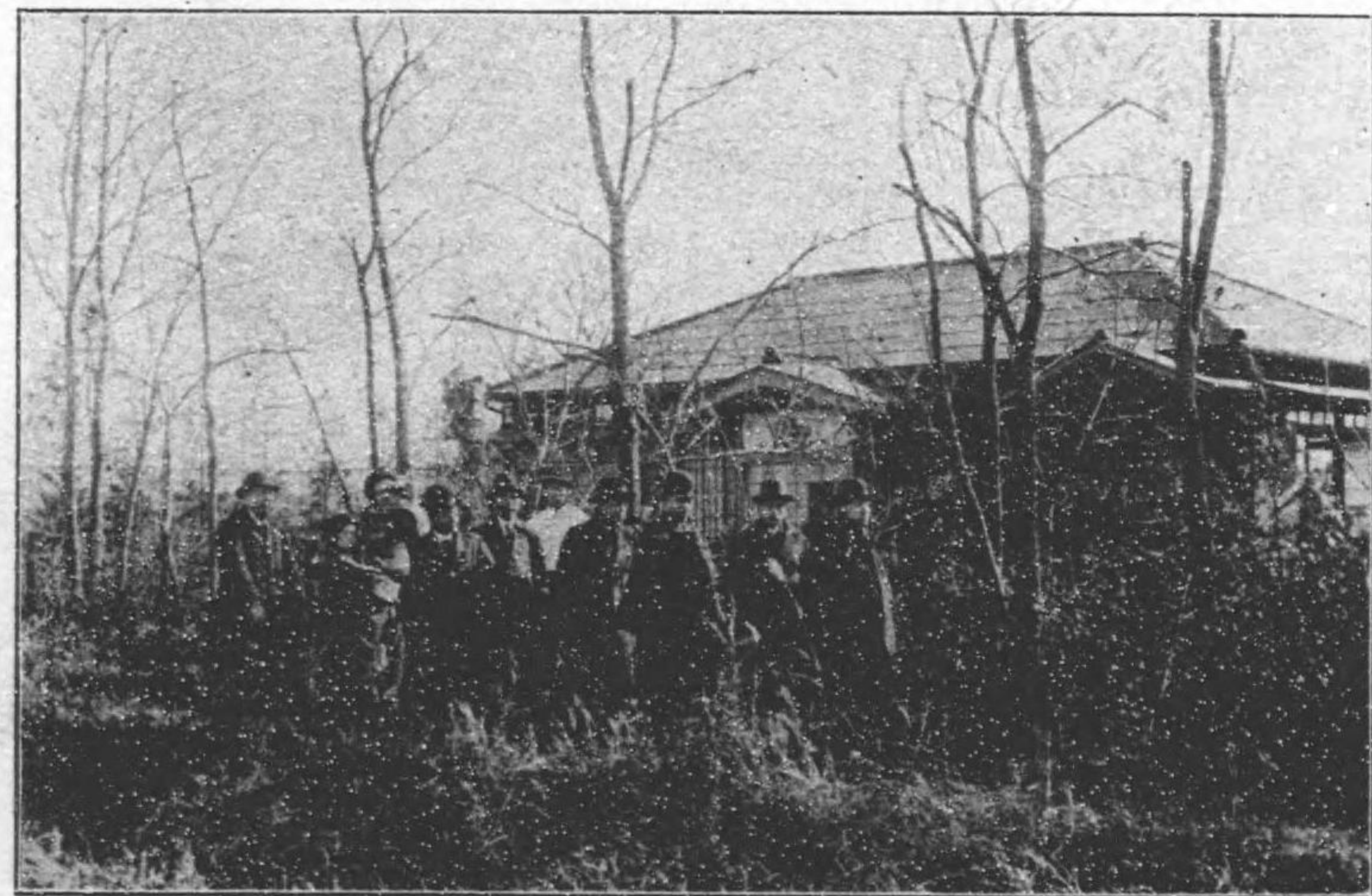
鳥海山麓上村小砂川區にあつた所謂道祖神(陰陽)に似た自然石を
祀る



鳥海山麓理想郷建設豫定地に於ける刈草の風俗



理想郷附屬臨海俱樂部建築豫定地した明星岬の風光



東京市外山に新築したる我が眞樂荘

自序

私は眞樂主義の主唱者であり又宣傳者であります、斯の主義は天保の昔二宮尊徳先生に依つて唱導され、又實行されたる報徳教を現代的に稱名してゐるもので、個人の努力と相互推讓の徳行を基本として麗はしき生活―社會を實現せんことを理想とするものであります。これが實踐についての詳しく説明は小著『理想の村』『理想の家庭』『眞樂主義』その他の小著及本書の後文に載する理想郷建設―明星自治團の趣旨書―その團則などについて知つて頂きたいと存じます。

本書は他山の石として我が玉を磨くと云ふやうな意味で抄譯編述したものであることを強く一言しておきます。

大正十四年春

東京郊外千歳村烏山 眞樂莊にて

著者識す

眞樂主義經典

(一)

人間、生じて自然に男女を生ず。男女あれば必らず和合を發す。是陰陽異にして一なるが如く、男女も合して一なり和合あれば子孫あり子孫ありて人倫發す(二宮尊徳)

内外理想郷物語 總目次

口 緒 卷 頭 寫 眞

- 一、古今内外ユウトピヤ著者小照六面……………
- 二、眞樂主義者 明星自治團同人に據つて計畫されたる理想郷建設地探險隊一行の壯況と其豫定地たる烏海山麓に於ける實寫及附近に於ける奇習風俗その他十二種十二面……………

緒 論

△眞樂主義經典(二)

第一編

佐藤信淵の理想國

- 一、機關……………七
- 二、生業の制度……………一二
- 三、軍備……………一七

四、宗教……………二四

△眞樂主義經典(三)……………二八

第二編……………三〇

矢野龍溪の理想社會……………三〇

一、資本主義の未來……………三〇

二、事業の公營(一)……………三五

三、事業の公營(二)……………四二

四、生業の組織(一)……………四九

五、生業の組織(二)……………五四

六、住民の生活(一)……………六一

七、住民の生活(二)……………六八

八、政治組織……………七二

九、社會組織……………七八

一〇、社會改造の方法……………八七

△眞樂主義經典(四)……………九〇

第三編……………九二

トマス、モアアの理想郷……………九二

一、奇遇……………九二

二、意外の社會……………九五

三、自由人……………九七

四、罪惡の絶滅法(一)……………一〇一

五、罪惡の絶滅法(二)……………一〇五

六、財産の公有(一)……………一〇九

七、財産の公有(二)……………一一三

八、田園都市……………一五六

九、壯麗な首都……………一一八

一〇、行政組織……………一二二

一一、職業法……………一二四

一二、大家族的生活……………一二八

一三、金力軍備—奴隷に金銀の綱……………一三二

一四、文學藝術の發達……………一三六

一五、結婚法及法律……………一三九

一六、戦争……………一四三

一七、宗教……………一四七

△眞業主義經典(五)……………一五二

第四編……………一五三

ウヰリムア、モリスの理想社會

一、驚異……………一五三

二、四十二才の娘……………一五八

三、馬車の二人……………一六四

四、森行く馬車……………一六七

五、煙草店の娘……………一七二

六、老ひた壯者……………一七六

七、ハモンド翁(一)……………一七九

八、ハモンド翁(二)……………一八五

九、ハモンド翁(三)……………一九一

一〇、ハモンド翁(四)……………一九八

一一、ある老人……………二〇三

一二、ある會話……………二〇九

一三、舟遊び……………二二二

△眞樂主義經典(六)……………二一八

第五編……………二一九

エドワード、ベラミーの新社會……………二一九

一、強者と弱者……………二一九

二、催眠術……………二二二

三、囁き……………二二四

四、労働問題の解決……………二二九

五、労働軍隊……………二三五

六、公平な分配……………二四〇

七、陳列場……………二四七

八、相互扶助……………二五〇

九、労働組織……………二五五

一〇、貿易……………二五九

一一、公食堂……………二六一

一二、生産機關……………二六八

一三、遺傳病……………二七二

一四、教育機關……………二七七

一五、婦人の地位と結婚……………二八二

一六、舊時代人の哀愁……………二八八

△眞樂主義經典(七)……………二九五

第六編……………二九六

プラトーンの理想國……………二九六

一、興味ある青年達の談話會……………二九六

二、正義の定義で議論に花が咲く……………三〇一

三、正義は強者の利益か？……………三〇九

四、善悪の種類……………三一四

五、神は誰が造り出したか……………三一八

六、新らしき國家の構成……………三二〇

七、新らしき國家の創建者……………三二五

八、優美と調和とは善と徳の双見……………三二八

九、新らしき國家の體育……………三三一

一〇、新らしき國家の目的……………三三六

一一、新らしき國家の四徳……………三四〇

一二、新らしき國家の求むる個人……………三四二

一三、新らしき國家の男女關係……………三四四

一四、新らしき國家の國防……………三五〇

一五、新らしき國家の教育(一)……………三五四

一六、新らしき國家の教育(二)……………三六一

一七、新らしき國家の教育(三)……………三六四

一八、新らしき國家の教育(四)……………三七一

一九、政體論及び政體が生む異つた國民性(一)……………三七四

二〇、政體論及び政體が生む異つた國民性(二)……………三八一

二一、政體論及び政體が生む異つた國民性(三)……………三八六

二二、永遠に生きざる可らず—靈魂は不滅……………三九一

△職業主義經典(八)……………四〇〇

第七編……………四〇一

トマス、ヒューズの理想國家……………四〇一

一、産業制度……………四〇一

- 二、行政組織……………四〇六
- 三、國民の生活状態(一)……………四一一
- 四、國民の生活状態(二)……………四一七
- 五、國民の生活状態(三)……………四二二
- 六、社會的施設……………四二六
- 七、強制就職法……………四三〇
- 八、監督事務(一)……………四三五
- 九、監督事務(二)……………四四二

△眞樂主義經典(九)……………四四八

第八編

四五〇

ヘルバーアト、ウエルズの新ユウトピア……………四五〇

一、所在……………四五〇

- 二、自由生活……………四五三
- 三、經濟生活……………四五九
- 四、社會政策……………四七三
- 五、結婚法……………四八〇
- 六、社會生活……………四八五

△眞樂主義經典(一〇)……………四九〇

第九編

四九二

吾が徒の理想郷建設計畫

四九二

一、吾が徒の鳥海山麓に建設せんとする理想郷建設趣旨書……………四九二

△明星自治團の歌……………四九五

△報知新聞拔萃記事……………四九六

二、理想郷建設||明星自治團々則……………四九七

△秋田新聞抜萃記事

三、理想郷の建設地を求めて

- 一、帝都を後に鹿島立ち
- 二、あはれ——白靴の行水
- 三、車中——女性の解放論
- 四、ソバの違ひで大失策
- 五、酒田名物——物言ふ桃の強賣り
- 六、總身の血は昏しく波うつ
- 七、懐かしき小砂川を宿に
- 八、昔を語る鯨の頭骨
- 九、途中のエピソード
- 一〇、第一の豫定地を探索すべく
- 一一、眞鴨に驚き——蝮にふるえて
- 一二、熊笹の小屋でビールを抜く

- 一三、大物忌神社に参行し主盟の憤慨に共鳴する
- 一四、第二の豫定地——観音の森下まで
- 一五、首くまりの足引くやうな植林奨励
- 一六、覺めたる者は寂しい——遺恨の貯水地
- 一七、大きな獲物をカメラにして
- 一八、豫定地探險の第三日目
- 一九、尊き義人の遺跡
- 二〇、愚昧な村長を頂く村民を憐む
- △吾が徒の計畫を賛美する酒田新聞の記事
- 四、吾が徒の遊説——宣傳の旅び(第一日)
- 一、戀愛葬と社會葬
- 五、吾が徒の遊説——宣傳の旅び(第二日)
- 一、理想郷建設者の烽火
- 六、噫！空前の悲惨事——天來の一大動亂起る

一、吾が明星自治園の大活躍……………五五五

二、流言蜚語Ⅱ自警團の暴行……………五五九

三、林檎を爆裂弾と見違えて戦慄する……………五六五

四、鋭い主盟の一言——秋田縣人某の一命を救ふ……………五六九

五、憎むべく又恥づべき——我が文化の影……………五七四

△吾が徒の無事を報ずる秋田新聞の記事……………五七八

△大阪朝日新聞Ⅱ湯淺倉平氏談……………五七八

△厭な印象が永久に焼付けられて消ないと思ふと情けない……………五七八

七、東京市郊外に吾が徒の樂園Ⅱ眞樂莊なる……………五八二

△眞樂主義經典(一一)……………五八四

△本書の讀者諸兄に謹告……………五八六

内理想郷物語

惠峰 石田傳吉著



緒言

あまり陳腐なことを云ふやうだが、假りに人間を萬物の靈長であるとするなら、何か他に卓越した處がなければならぬ、それは人間は他の生物とは違つて常にそれからそれへと想像をたくましくして止まない、そしてそれを理想として又實際化せんと努力する處にあるのでなければならぬ。そこに人類社會の進歩もあれば——生の向上もあるのである。人間が蒙昧野蠻でありし遠き幾億千萬年前のことはさておき、有史以來、その想像し理想し努力して來た跡はまことに鮮やかに窺うことが出来る。民族によつて有つ文化の特徴を異にするにもせよ、それは先人の想像し理想した處のものを實際化して來たのに過ぎないものである。その努力の結晶したものが、今、吾等の有つ處の文

二
化—生活—社會であるのである。が、誰しも現代の生活なり社會に満足してゐるものではない、それは人間が常に想像をたくましくして次から次へと理想を追ふて止まないからである。又その要求は、先人が拂つたほどの努力さへ惜まないならば、必度より良き文化—生活—社會の實現され得るものであることを確信する。

私は曩に、人生五十年の努力によつて何の位の理想の社會を實現し得るものであらうかと云ふことを想像してゐた、そしてそれを村と云ふ小さな團體にあてはめて、具體化してみたのである。私がおその方法を世に問ふたのは大正三年の二月であつた。幸ひにも全国各地から異常なる歡迎と溢美を給つたのみでない。今は各地に於ける共鳴者の手によつて山村水廓の間に實踐されつゝあるものが少なくない。小著『理想の村』の成案が即ちそれなのである。

私は、今又自から陣頭に立つて、地上の天國—理想の村を創造すべく多くの同志と共に、東北は島海山麓に地を下して實行に着手せんとしてゐるものである。

それについても調べてみたいのは古來多くの先覺者達によつて想像され理想されたユートピアの内容である。古人のそれを研究したならさぞ面白くもあり且又有益なこともあつて吾等の實行上についても随分参考にもなることがあるだらうと思ひ、先輩や知己に頼んで調べてもらつたり又は自

ら翻譯する中に出来上つたものが本書の原稿となつたのである。

私の知る限りに於ても、古人が想像し又は理想して編まれたるもので、プラトーンの理想國を始めとして我が中井履軒の華胥國物語り佐藤信淵の混同秘策、矢野龍溪の新社會等の政治的ユウトピアが約三十種近くある。又宗教的未來觀を序したる一種のユウトピアもある。即ち佛教の地獄極樂圓解からキリスト教の天國—黙示録或は天路歷程の如きがそれである。又支那の遊仙窟の如きもその一種と云へやう。何れにしても未來を想像し若くは理想して描かれたる著書がザツト三十餘種ある。正直な處、私は未だその半分も讀んでゐないが、その書名と著者は左の通りであることを記憶する。

書名	著者	年代
一、地獄極樂圖解	圖解者不明	紀元前
二、理想國	プラアトーン	紀元前三七五
三、共和國	キケロ	紀元前六〇
四、黙示録	ヨハネ子	紀元初年
五、リクルクス傳	ブルターク	同九八

六、神の國	アウズチヌス	同四二七
七、遊仙屈	張文成	同六七二
八、華胥國物語り	中井履軒	同一五一〇
九、ユウトピア	トマスモリア	同一五一六
一〇、クラビユウリヤ	ハウエル	同一六〇七
一一、日の國	カムパネラ	同一六二二
一二、新アトランムス	ペエ	同一六二九
一三、オオセアニヤ	ハリントン	同一六五六
一四、天路歷程	ジョン・パンヤン	同一六七八
一五、サレント航海記	フエネロン	同一六九九
一六、西洋大同共和國	コムト	同一八二二
一七、混同秘策	佐藤信淵	同一八四〇
一八、イカリア航海記	カペエ	同一八三五
一九、世界人種未來記	リツトン	同一八七一

二〇、イイルフオオン	バツトラア	同一八七二
二一、ポストン未來記	ベラミイ	同一八八八
二二、無可有郷便り	モリス	同一八九〇
二三、自由國	ヘルツフカ	同一八九〇
二四、自由國紀行	同人	同一八九三
二五、光ある中に歩め	トルストイ	同一八九八
二六、八十萬年後の社會	ハヴエロツク・ウエルズ	同
二七、新社會	矢野龍溪	同一九〇三
二八、白い石	アナトオルフランス	同一九〇三
二九、新ユウトピア	ウエルス	同一九〇五
三〇、神は見ざる王國	ウエルス	同一九一七
三一、戦後の國家	トマスヒュス	同一九一七
三二、塔	ラツチマン	同一九一八

ユウトピアは決して西人のみの専有物ではない、以上列記中にもあるやうに、我が徳川時代の學

者で、中井履軒や佐藤信淵もあれば、又、現存さるゝ矢野龍溪先生もある。その中佐藤信淵先生の理想國家を思想的に説明すれば帝國主義的とも云ふべきものと思ふ。先生の理想國家は、その著『混同秘策』(和本三冊もの)よりからの意譯であることを一寸断つておく。

尙、本書は前列三十餘種中の八種を抄譯したるものであることを再記する。

眞樂主義經典(二)

人間既に生ずと雖も、田畑未だ開けざるとき、春は草木の芽を食み、秋は果實鳥獸蟲魚を喰ひて萬歳を経たり、而して後五穀蔬菜を得、之を選んで作らんが爲めに、水邊を開き田と名づけて稻を植ゑ、乾地を鑿き島と名づけて諸草を植ゆ。是坂田のはじめ法界の根元なり、田畠開けて五穀熟し食物足つて人道定まつて父を知り、随つて父子兄弟夫婦朋友の道行はる。終に横道の者出で来て人倫を破る。是に依つて君臣の大道立つ。耕作して五穀を作り出す者を守護し横道の者を懲らす。是武内の根元なるべし。是より以來五倫の道益々明なり。其後終に流れて、天竺には佛出生して其法を定め、人民を導き、唐土には聖出生して其法を定め、人民を導き我朝には神出生して、其法を定め人民を導く。その法三國異風同道なり天地開闢發田より今に至るまで人國法界となりぬ。(二百尊徳)

第一編 佐藤信淵の理想國

時……天保のころ

所……武州足立郡鹿手袋の椿園村塾の一室

人……主人の佐藤信淵翁と若者三人、甲、乙、丙と呼ぶ。共に天下の志士である。

一 機關

嚴然そのものゝやうな老人は徐ろに口を開いて「ハ、ア、あなた方は私の理想國家を知らうとて來なされたのかナ、前以て言つて置くが、話が少し長くなるから、はじめからその心算であつて貰はんとナ」と言つて、その前に並んで熱心を面に漲らして坐つてゐる三人に「様は視線を投げた。と、その中で一番骨格の逞ましい三十四五歳位の甲が「素より私どもの方では何時間でも……。」

誠に恐縮の至りですが、これも國家のためと思召て何卒……」と言ふ。

老人は心もち顔の相好をくづしながら「それなら早速話に取りかゝるとして、サテと、先づ私の理想國家の最高機關から申しますかナ、それはすなはち大學校でしてナ、ツマリ國家至聖の哲人が天に代つて毎日道學を講ずることになつてゐるのです。そしてナ、そこは天皇躬らお出ましになつて時々それを開召さるゝ所で、非常に神聖であると同時に、國家の立法機關として、天下に下す總ゆる制令詔書などはみなそこから出るし、官吏の任免の詮衡もそこで司つてゐるのです。で、講堂の後ろに一つの會議堂があつて、天皇及び三臺大府の官吏が相會して政務を議するといふのでしてナ、それから……」

翁の言葉さをひつたくつてまた甲が「その三臺大府と言ひますのは？」と質問する。と、翁は苦笑を洩しながら「どうも若い人は氣が早くて困る。マア私の言ふことを聞きなさい。三臺とはナ、教化臺、神事臺、太政臺を指すので、それは國家の教化機關となつてゐるのです。そして、各臺に、大師、中師、小師、亞師とその次に上中下の官を置くのです。そしてその教化臺といふのはナ、ツマリ文部省と大學とを兼ねたもので、教育行政機關であると同時に最高教育機關でもあるといふ譯です。で、後で申上る全國の學校は悉く教化臺の支配する所です。ナ、學制の設定だとか教

師の任免だとかその他一般の政教に關しては決して他の機關の干渉を許さないのです。エ、と……」

「『大學としての教化臺はどんなになつてゐるのでございますか？』」

翁が一寸話に入れたる所に早速丙が質問した。彼は何處となくヒワズな、一見病身らしいが、それでゐてその意氣の旺なことが偲ばれる。年のころ三十を出るか出ない。翁は丙の然うした身體にニコヤカな眼を落しながら、

「『また新手の追窮ですかハ、ハ、ハ、大學としての教化臺はと言へば、誠明、神祇、儀禮、音樂、法律、武備、醫術、天數、地理、通譯の十専門學部に分れてゐて、學生はそれ／＼その欲する學部に入らせて、その卒業生中から選抜して三臺大府の官吏に補任するのでしてナ、教化臺の總裁は教化大師で、毎日、大學校で、造物主に代て産靈の大道を説き示し、國民に天地の眞理を悟らせるといふ至つて聖い任務を負ふのです。それから神事臺といふのはナ、勿論お察しだらうが、宗教を司る機關で、全國の大小總ての神社が悉くその支配を受け、それと同時に、神官の補任もその司る所なので、勿論他からの干渉は受けません。エ……』とその次は太政臺で、それは司法ならびに警察の機關なんでしてナ、ツマリ司法と警察との目的は、國民の道德的生活を規範するものだからで、そ

の組織は、都察院——政務監察所——と大理寺——警視廳——とを設けて、中央および地方の非理を監察して、罪人を逮捕する警察官と、囚人を收容する監獄と、訴訟を聽斷する裁判所とを置いて、充分是非善惡を明かにすることになつてゐるのでナ、それに至誠を以て事にあたるから、罪人といふ罪人が悉く必然的に法に服するやうになつてゐます」

「して、その地方機關としては如何です？」と、甲がまた質問を發した。

「三臺地方機關としては、二萬石の地域に一個の小學校を設ける、そこは中學教育を施す所としてナ、教育所の兒童中の優秀な男子が八歳に達すれば必ずこの小學校に入學させるので、ここでは、學問をはじめとして所謂文武諸藝を習はせ、その中から更に優秀な學生を選んで教化臺に入れて最高の専門教育を施すことになつてゐますが、その選抜に當つては、萬民平等で、ドンナ下賤な處に生れたものでも、優秀な頭腦の有ち主でさへあつたら、誰でも國家の經費によつて修業してドンナ地位にも昇進することも出来るといふ譯なんで、それから凡備な兒童は、十五才に達すればそれぞれその家に歸らしてその好む所の産業に従事させるのです。それからナ、小學校はまた社會教育の機關として、時折村民を集めて道學を講ずるので、兒童と民衆……廣く言へば地方民全般の教育を本務とはしますがナ、同時にそれは神事臺及び教化臺の地方廳としてそれらの官吏を駐在させ、

その配下は鄉村の諸神事を勤め、または勸善懲惡の政事を執行させるのです」

と言つて翁は茶を一口すゝつた。廿八歳だといふデツブリ肥つた小柄な乙が一膝乗だして「序に伺ひたいと思ひますが、鄉村に對する諸施設はないのでせうかと……國家として——」と言ふ。翁は軽く頷いて「ありますとも、ありますとも。こゝでは小學校の配下に屬するものだけを申しませうが、先づ二個の廣濟館を設立して、洪水や火災の難を蒙つてゐるものを救ひ飢饉や惡病流行の際に適宜の救濟法を講じ、なほ、道路や橋架の修理や、開墾や埋立や興業など國民全般の福祉を増進する各種の事業を行はせるのです。それから四個の療病館を設けて醫師や看護人等を置いて人民の疾病を診斷し治療させ、藥をはじめ病人の衣食や諸雜費は悉く國家の負擔で、難病者や廢疾者を家に置いては下々のものなんか職業を妨げられることが多いから、そんなのは皆この療病院に入れて看護人を附してその世話をするのです。そしてまた六個の慈善館を建て、貧民の子を養育するのですが、それには、附近の農村の、老年若しくは柔弱にして激務に従事し得ないものを以てその世話人として、教育所から送つて来る貧家の幼兒を收容して勿論官費を以てそれを育てるのですがナ、その子の親や親戚などは、毎日でもその部屋を訪ねて菓子や玩具などを自由に與へることも能きるし、生長後その子を家に呼戻さうとすればそれも自由に能きる譯なんです。それから四十ヶ所の遊

兒廠を建て、慈育館の小兒、及び各家庭の小兒も晝間はそこに遊ばせて父母の仕事の足手纏ひにならないやうにするのです。そしてこの遊兒廠に遊ばせる小兒は四五歳から八歳までを限りとして、八歳に及んだものは皆それを教育所に引渡すのです。エ、とそれから二十ヶ所の教育所を設けてナ、村内の八歳以上の男女兒を集めて讀書算術習字等を教へて、秀才の男兒はそれを小學校に進め、他の兒童はその好む業につかせることとし、また時々村内の老若男女を集めて人倫を教導することとしてナ、そのほか村民の冠婚葬祭を行つたり勸善懲惡につとめたりまた産業の奨励指導などをするといふ仕組なんです。マア私の理想國家の教化機關といふのはコンナものですよ」

翁は語り終ると、改めて三人にそのニコ／＼した視線を投げた。
三人の顔には、等しくこの組織の理想的なのに感ずる色が濃く彩られてゐた。「實に感嘆の至りです」と言つた彼等の言は強くつよく響いた。

二 生業の制度

「サテと、今度は産業制度に就て。お話しますがナ、何しろこれは人間社會が圓滿に發達するため

に最も必要なことでナ、國內の産業制度を充分よくしなければその國は衰滅しなければならないといふ重大な關係があるのだから、充分注意して聞いて貰はんといけませんぞナ」と言つて翁は三人に一瞥を與へたのそして「ハ！」と言つて三人が少しづつ頭を下げるのを親し氣に見やつてニコヤカな笑を洩らしながら語り出した。モウ白髪となり終つてはゐるが、それでゐてなか／＼話す言葉も若々しく、第一その元氣さつたらない。恰でそれは壯者を凌ぐ程である。

「凡そ國民たる者はナ、必ず一個の職業に従事しなければならないので、徒食は決して決して許すべきではないのです。それからナ、國家としては必ず人民の誰にも一つの職業を與へて、勞働するものには決して生活に苦ませないだけの保證をし、そして、國民全體の生産能率をヨリよく擧げやうために、誰でもその最も好みまたは適する或る一つのことを専門として、その職以外には決して手を出してはならないのです。それでナ、官吏以外の國民を分つて、草民、樹民、礦民、匠民、買民、傭民、舟民、漁民の八民に分類するのです。そこで――」

と言つて翁はバタツと右の掌で机の上を叩いた。翁はモウそれほど熱してゐた。

「そこで、私はそれを六つの産業行政機關に分屬させてゐるのです。その一は本事府または農事府で、草民すなはち農民を直轄して、人生必需の農産物の生産をよりよくして國本を固めることを司る

ので、奉行が一人、長吏が四人、參政が十六人、田畧官が六十四人、大、中、小の老農數百人を置いてナ、それに三台からそれ〴〵亞師が一人、七八名の部下を率ゐてこの府に駐在し、そして農政を行ふことになつてゐるのです。それからナ、田畧官と老農とは所謂農業技師で、農事に關する指導者となるのです。そして、農民は國民の生活を維持するものなんだから、その數は七民總體の三倍以上なければならぬことにするのです」

翁は一寸話をきつて茶をすゝつたが、直ぐにまた語り出した。

それは隨分微に入り細に亘つて穿つた説明であつたが、その要旨を擧ぐれば左の通りである。

——次に擧ぐべきものは開民府である。それは樹民、礦民……すなはち林業と礦業とに従事する國民を監督し指導してその生産の發達を圖る役所で、奉行一人、長吏二人、參政四人、小奉行八人、上中下の官吏數百人を置いて、三臺からの官吏を同直させることは農事府と同じである。

次は製造府である。四十七種の工業に従事する所謂匠民を管轄する所である。

而して如上の各生産に従事する國民は、その生産品を私に賣買することは許されない。國家は、國民の生産品を管理し、同時にまた分配を行ふのである。その機關がすなはち融通府といふ。

第四に擧ぐべきものはすなはちこの融通府なのである。ここはまづ商民を監督して、國家の管理の

下に商賣を營ませる交易の機關である。で、先づ商民に命じて各町村を巡回して諸種の生産品を買収させる。例へば農事府の場合に於ては、各村に産物の集收所を設けて管下の農産物を保管して置くのも、融通府が商民に命じて村々を巡回させてその品物を買収らせ、その代價は農事府の官吏に支拂ひ農産物は融通府の官吏に收めさすのである。而して、融通府から農産物の賣渡代金を受取つた官吏はそれを農民に分配するのである。また開物府、製造部の場合に於ても同方法を以てする。そして、諸國の要津および都會には、各地の品物並にその價格の平準を圖る平準館を置き、更に各地に國營市場を設置して、日用品その他一切の物貨を賣捌かせる。で、商人は國家の使用人として俸給を受けて物價の賣買に従事するだけのもので、勿論私に賣買することは嚴禁されてゐる。要するに商人は融通府の一使用人に過ぎない。しかしながら、その勉強次第によつてはその奉行まで進める途は開かれてゐる。

更に融通府に就て述ぶべきことは、諸民の金融機關としてあることである。即ち何かの事業等得起すなどのためにその必要を認むる時は、無利子を以て充分にそれを貸し、以て盛に生産し得らるゝやうにする。また、各地に典當館を設けて、所謂質業を國營とし、以て下民が高利の借財に苦むことを免れしめる。

更にまた擧ぐべきことは、國家の財政機關として、その収入を以て一切の國費に充當するのである。で、要するに、國內に於ける一切の生産品を統括し諸國の有無を相通じ、國民の生活を保證するといふ實に樞要の機關である。そのためには、奉行をはじめ、諸役人はみな鋭敏な頭腦と決斷力とをもつ者を選用するの要がある。

「餘り一時につめこむとどうも不消化になり易くて困るから、今度は本問題に觸れることを避けて一つうちつけて世間話でもするとしますかナ、あなた方はこれから天下を双肩にして立たうとされる天下の志士だから、既に諸國を巡歴して、よくその國の制度や風俗や民情……四民の生活状態などを視察されたことと思ふので、一つあなた方の見られた天下の形勢の裏面觀察談でも伺ふとしますかナ、定めし面白い話をお持ちだらうから……」

翁はかう言つて、例のニコヤカな視線を三人の上に投げた。

かうなればモウ若輩も後輩もない。互に天下の大勢を論じ、その指導方法乃至經國方法などに論及したが、遂には翁の理想國家の組織に感嘆の時を久しうした。

三軍 備

その後しばらく沈黙の時が流れた。と、それを破つて丙が「先生、どうも續けざまのお話をお強ひ申して恐縮ですけれども、さつきの續きをお聞かせ下さいませいか？」と言つた。と翁は「ヨシ〜」と言はぬばかりに頷く。

「エ、……と、今度は陸軍府のことに就てお話ししますかナ、それはナ、陸軍を支配して、精英な兵器と嚴重な武備とを以て不虞を警戒しました或は正義の銚をとつて起つことを司るばかりでなく、陸上に於ける交通労働者や牧畜業者および一般筋肉労働者等を監督してナ、陸上交通や土木建築等の労働供給に當らせ、また牛馬などの蕃殖にも従事させるのです。そしてナ、奉行一人、長吏四人、參政八人、大將軍六人、老將軍二十人、都尉以下の武官數百人と、三臺から各々一人の少帥が、亞師四人、清官數十人を率ゐて同直するのですが、常備兵員は、親衛が六營で一萬八千、内營が三十六營で一萬八千、外衛が百八十營で九萬と定めるのです。それからナ、陸軍府には辦事館といふのを置いて、陸兵の十五種の身體労働者を支配することになつてゐるのでナ、車馬や人夫など、陸

上に於ける貨物の運送をするため、その要のある者は土木建築等の多數の車馬人夫などの請求も出来るのです。それにナ、諸國に牧場を設けて牛馬豚羊などの蕃殖を圖つて、國用以外のそれらのものは融通府の手に納めて、その代金が牧畜業者の手に入ることは他の府と同様です」

「獵師なんかは何の府に屬するものでせう？」
と乙が質問した。

「獵師ですかナ、獵師もやはり陸軍府の管轄でナ、いろ／＼な野獸や野禽などを獵させて、その肉は勿論、皮革や羽毛や骨角などまで融通府に送つてその代價を取ることになります。それからナ、陸軍府では海軍の軍人を支配してその戦法を講じ、四邊の要港や諸島などに備へて海上を守り、そして不虞を警衛することを主としてナ、それにまた海外發展のことを司る所なので、大小數多の軍艦を製造してそれを各軍港に集めて置いて非常の用に備へるのです。そしてナ、水上で渡世する漁夫や舟夫なども矢張水軍府の管轄で、奉行一人、長吏二人、參政四人、老將軍三十六人、將軍七十一人、都尉以下の武官が數百人です。それから三臺から各々一人の少帥が亞師四人、清官數十人を率ゐて同直してその政治を助けます。そして常備兵の數は内衛が十六營で三千二百人、外衛が七十二營で三萬五千人と定まつてゐます。それからナ、水路辨事館を設けて國內の船舶を管理すると同時

に、水運に關する一切のことを取扱ふのです。で、そのために諸港に官署を建て、官吏を置き、貨物の運送上に丁寧敏捷を圖り、同時に配下の漁民達の收穫物の總ては、他府の生產品の場合と同様に處分するのです」

と言つて翁は一寸咳拂ひをして更に語り續けたが、その要點はかうである。

——上述の諸制度をヨリ有効づけ、國家の組織を整然たらしめて、日本全國を自分の手足を動かすそのやうに自由にするには、内治にしる外交にしる充分に考慮を廻らして先づ國內の行政區劃を定めなければならぬ。

その第一に定むべきものは皇都である。何故なら、皇都は天下の中樞であり根本であるから……。そしてそれは景勝の地を選ばなければならない。で、地理的、政治的、經濟的および國防的等の關係を考察するに、それは江戸の地に如くものはない。そして日本全國を二府十四省に區分することを最良の區劃とする。

◆青森省……津輕、北戸、秋田、仙北、西蝦夷(省廳所在地青森)

◆仙台省……盤城、相馬、仙道、大崎、南部、東蝦夷(同上仙台)

- ◇沼垂省……越後、會津、米澤、最上、庄内、佐渡（同上沼垂）
 - ◇金澤省……越前、加賀、能登、越中（同上金澤）
 - ◇東京府……上野、下野、常陸、上總、下總、安房、武藏、相模（同上東京）
 - ◇府中省……信濃、甲斐、伊豆、駿河、遠江（同上靜岡）
 - ◇名古屋省……美濃、飛驒、三河、尾張、伊勢、志摩（同上名古屋）
 - ◇膳所省……若狹、近江、山城、大和、伊賀、丹波、丹後（同上膳所）
 - ◇西京府……河内、和泉、攝津、播磨、淡路、紀伊（同人大阪）
 - ◇松江省……但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐（同上松江）
 - ◇萩省……美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、對馬、（同上萩）
 - ◇高知省……阿波、讃岐、伊豫、土佐、（同上高知）
 - ◇博多省……筑前、豊前、豊後（同上博多）
 - ◇熊本省……肥前、肥後、筑前、筑後、豊岐、天草、五島諸島（同上熊本）
 - ◇大泊省……日向、大隅、薩摩、琉球諸島（同人大泊）
- 各省の役人としては、節度使一名（教化中帥または少帥）副節度使二名（神事亞帥一名と太政亞帥一名）その他三百の官吏數十名、六府の長吏各々一名づゝ、小奉行各々二名宛、書記各四名宛、上官各々八名宛、中官各々十六名宛、下官各々三十二名宛を置き、以て省内の政に當らせる。そして各省の首府には皇官を設けて天皇の巡幸に備へる。

翁は少し言葉を改めて「如何ですか、この区分なんかについて非難や良いお氣づきがあるかな？ 私はそんなものは決してないと信じてはゐるが……」と云つた。と、甲が「私どもの考へてゐた然うした區分の幼稚だつたことを痛切に感じます。先生の被仰通りだとマツ萬全のものだらうと思ひます。イヤ少くも私だけは……」と言つて他の二人を顧みた。すると、丙が「私としましてもそれには一の難點もありません。しかし先生に是非お伺ひ致したいのは、帝國の根本であり中心である皇都を建てる法はドンナものなんだかといふことでありますが……」と言ふ。と、翁が眼を輝かして

「何？ 皇都が日本の根本だとナ、はなはだ以て怪しからん。抑も我國は萬國の根幹で、世界統一の大使命を有つてゐるのに、チツポケな考を出して皇都が日本の中心だからなど、ケチ臭いことを言つてるから困る。あなた方のやうな若い者がそれだからいけない。しかし餘り始めから大きいことばかり言つてゐても仕方がないが、兎に角、我日本に世界統一の大使命が下つてゐることを忘れ

ないでゐて貰はんとナ——ハ、ハ、ハ、」

「イヤどうも……」

と言つて丙は少しかたくなつて坐つてゐる。翁はそれを眺めてニコ／＼しながら

「イヤ／＼とんだメートルを上げて失敬しましたナ、サテと、その皇都を建てる法はナ、中央に皇城があつて、それから、西に皇廓、東に大學校、北に教化台、南に神事台、またその南に太政台、大學の東に農事府・製造府・物産府・融通府があり、皇城の西北に當つて陸軍府があり、陸軍の三十六營がズーツと皇城の南北方面を圍繞し、東南に水軍府があつて、水軍の三十六營がその方面から皇城を圍繞するのでしてナ、その間には、旅館があるし酒樓があるし、歌舞場、遊廓、各種遊戯場および多數の國設市場を設けるのです。さつきも言つたやうに、我國は萬國の根本で、世界統一の大使命をもつてゐるだからナ……忘れてはなりませんぞ。だから、その使命を實現するには、先づ滿洲を手始めに、ついで朝鮮、支那と手を廻して、さらに進んで世界萬國に對つてやるといふ譯です」

「なる程その大抱負はなくてはなりませんけれども、私を以て見れば、世界を平定するなど、は容易からぬこと、考へますが、先生はドウしてその大抱負を實現しやうとなされるのですか？」と、乙が一膝乗りだして言つた。

翁は苦笑を洩しながら「ハ、ハ、ハ、そのおたすねも尤もだナ、しかし、この目的を達するためには、青森省を先登とし、その節度使には特に教化台第一の中帥を任命して、それを呼ぶに先登大元帥を以てし、仙台、沼垂、金澤の節度使がその管轄に屬すること、して、滿州平定のこととは總て先登大元帥の節制するところとしてナ、その次に、松江省の節度使には、教化台の第二の中帥を任じて朝鮮統平大元帥と言ひ、それを萩、博多の兩省が屬することにして、朝鮮平定のこととはすべてこの大元帥の司ること、します。それから、熊本省の節度使には教化台の第三の中帥を任じて、それに大泊省を屬させるのだが、特にこの熊本省は天皇の御親征の時でなければ動かさないで、外征に際しては大泊省の節度使が先づその兵を卒ゐて所謂前驅をするのです。それからナ、高知省の節度使は、特に海軍を精練して東南の海上を守ると同時に南洋諸島の攻略に従ふべきこと、するので、何しろ、南海にはヒリツピナと呼ぶ大小七八百の諸島があつて、東西千里、南北八百里の海中に散在してゐるのですからナ。マアさつと今申上げたやうな方法でやれば、屹度我國の大使命を果すことが出來ないではゐませんかナ」と言つて今度は話頭を轉じ

「この使命を果すために忘れてはならないことは、國を富まさなければならぬことで、國が貧乏ではドンナニ兵が強くつても本當のことは出來ないからナ、つまり富國強兵で行かんと駄目です。

一體我國民は經濟などいふことには一向無頓着で、却つてそれを名譽だと思つて居る傾向があるが、抑々經濟の大典は、掛まくも畏き産靈の神のみ教なので、實に世界萬國の蒼生を救済する法だものだから、これを拒むのは言ふまでもなく天地の罪人なので、この經濟の天意を奉じて世界萬國の無道を懲しそれを正すのは開闢以來我皇國に降つた使命なのです。それなのに何うですか、我國の現在は……、上は君候から下は士民に至るまで、たゞその日を面白可笑しく送ることを事とし、爲政者は鄉村の疲弊や滅亡を顧ずし苛斂誅求を敢てして、城下の繁華と自己の野望を満すに汲々としてゐるといふ有様だから、實に言語同斷の沙汰です。それと同時に、今日の我國體の衰微はドウです？ お互に紅涙が袖を濡らすではありませんか、私はいつも思ふのだが、ドウしてもこのまゝで置くと我國家は滅亡よりないと言ふより外ありません。私は是非あなた達のやうな將來大いに爲すあるの士に一層の奮勵をして欲しい……それを熱望するものです」

四 宗 教

翁の理想國家に就て一通りの説明を聞いた彼等は、大いにそれに共鳴した。そして今後は層一層

の奮闘をして、獻身的に國家のために盡すべく、ヨリ以上の決心をしたのである。

一旦は辭去しやうとした彼等は、何故となく名殘惜まれてならないし、それに何彼と有益な話を聞かれるだらうといふ氣もあつたので、翁のすゝめに従つて、その夜は翁の家に泊ることにした。夕食後、彼等は翁を中心にいろ／＼な談笑の時を過した。しかしそれが天下國家の問題だつたことと言ふまでもない。翁はその理想國家の組織すなはち垂統の法が生れ出るまでの故事來歴などを物語つた。

それによると、一體この垂統の法といふのは、古今東西の聖人も未だ充分といふ程の最善の法を知らなかつたので、創業と開物との道を鮮明してその國を富強にし隆盛にする英主はあるにしても、それはホンの僅かの間のこと、決して永續した例はない。また、制令や法度を定めて政治や風俗を改善した名君はあつても、その没後は善政も風俗もオチャアンになつてこれまだ永續しなかつた。で、翁の祖父がそれを深く憂へて、國家が永久に繁榮し蒼生が萬代の後まで安定した生活を營まれる法をと苦心した結果やつと垂統法の基礎を築くことが出來た。

そしてその後を受けた翁の父君が更に研究すること四十年、略々その組織がなつて翁に傳はつたのであるが、翁はなほ三十年間その思索に費したのである。その大成された垂統法は、所謂天地の

眞意で、萬物化育の理に則つたものだがために、これによつて國土を經營すれば、それは恰も天に變つて天地の神意を行ふと同じで、當然その國家は天地と共に繁盛すべきものである——といふのである。

翁はさらに天地の神理を神儒物の三道によつて説明した。それは道學の根本たる日本の古典は餘りにも簡潔に過ぎた、め、漢土の典籍や印度の經論を以て補はなければならないのであるが、熟ら今日の學者の有様を見るに、神道者は神明の偉徳を説く以上に動ともすれば祓や祈禱を強いる傾向がある。翁の説く神道は、天地創造の功德を讃嘆して、それに謝するに善を行つて人を救ふことを以てし、萬物化育の神恩を感謝して、それに報ゆるに物を開き世を富ますを以てする。そして皇國の神典を大眼目として垂統法には説いてゐるが決して祈禱素厭などは説かない。

儒者は、仁義五常の道を明かにして人に道徳を教ゆる點に於て敬意を表すべきものではあるが、徒らに言議を事として殊に我國の典籍などを卑下冷笑する癖がある。で、それは萬民を教導して忠孝を勵ます溫籍に乏しい。たゞ儒教に取るところは、専ら天命に従つて善を行ふことである。

佛者は、三世の因縁の道理を説いて極樂淨土の榮華を語り、愚昧の人々をその道に歸せしむるから、永いこと盛にやつていつてゐるが、彼等の主張する所は、佛祖や宗祖の讚仰を第一として、天

地の恩や君國の恩はその次のやうに説く欠點がある。

翁はこの神儒佛の三教の精粹をコンデンスして生れた「神理」によつて理想國家の組織をなしたのだといふ。

翁はまたこんなことも言つた。國家の經濟生活上最も重大な關係のあるものは商業國營である。何故ならば、今日のやうに天下の財貨がその七分通りを富豪に併呑されて、多數の人が饑えに泣くといふ片手落の状態にあるその原因は、富豪の商人が千變萬化の奸計を用ひて内海の富を中間に支ふるからである。私慾を満すに汲々としてゐる富豪も、それを放任する領主も實に怪しからん者である。一體人民を使役して租税を貢がせるのは國君より以外のなすべきことでない。それにもかゝらず富豪等は匹夫下賤の身を以て、公然と國君の業を昌し、おまけに國家の年貢の外に多額の私税を取立て、斃馬のやうな貧人を鞭うつやうにそれらを使役して國力の疲弊を促してゐる。そのために百姓をして其の父母を餓死させその子女を殺して郷里を離れるなどの酸鼻に絶する悲惨事を演ずることを餘儀なくさせてゐる。ことほど天地の神意に乖涙する罪惡は他にまたあるだらうか。富者は實に萬民の敵である。抑々斯る天意に反する大罪惡を恣にする富者は素より許すべからざるものであるが、それと同時にそれに對して何等の制裁を加へやうともしないで、國勢は次第に

衰滅へ傾き、數百千萬の天下の赤子を手をさげずとも慘殺しつゝある領主も實に不具戴天の敵である。で、そこに當然の勢として商業の國營が生れて來るのである。

「つまり私の理想國家はナ、官吏を除く他の國民全體が、官吏の指導の下に、悉く労働者としての生活をして、國家の需要に應じて生産に従事するもので、その本質上からして所謂生活の公共的經營なのです。そしてナ國家の収入は國家全體の収入といふことになつて、その生産に従事した労働者すなはち大多數の國民は、その能力に應じた分配を受けて、その誰しもが生活の保證を受けるものなのです。」

X X X X X

その翌朝彼等は翁の厚意を謝して辭し去つた。その誰もの顔にこれからヨリ以上國家のために盡瘁しやうとする熱誠が燃えてゐた。

眞樂主義經典(三)

天を以て地を賛け地を以て天を賛く。

男を以て女を賛け、女を以て男を賛く。
善を以て不善を賛け不善を以て善を賛く。
有を以て無を賛け無を以て有を賛く。
富を以て貧を賛け貧を以て富を賛く。
親を以て子を賛け子を以て親を賛く。

(一) 宮尊徳

第二編 矢野龍溪の理想社會

一 資本主義の崩壊

「はゝア、あなた方は遙々視察においでなすつたのかな、私はお國にも屢々遊んだことがありますよ。……イヤ／＼そんなに褒めて貰うやうにまではないかも知れません。何しろあなた方の觀られたのは未だ外觀だけに止まつてゐますからナ、でもヨリ以上に感心されることがあるかも知れませんがハ、ハ、」

「失禮ですが是非ともその内容を説明して戴きたいのですが……」

田美野がかういふと、老人はその柔和な顔に笑みをたゞえて

「一言には盡せませんが、その著しい例は無教育な人がなくて誰でも生活に困ることがないことで

すよ。また、病氣をした人で醫藥に困ることなどはなく、犯罪者もなければ訴訟なんかもなく、風俗や人氣は迎てもお話しにならないほど良いものですし、人々が相ともに愛し合ふことが恰で骨肉の兄弟みたいなんです。ともあれ折角の御來遊ですから、お差支がなかつたら何卒私の家において下さい、或は良いお土産があるかも知れませんから——」

田見野と金尾とは、老人の好意に従つて彼の宅を訪ふべく約した。

二人が老人の家を訪ふと、彼は恰で十年の知己をでも迎へるやうにしてもてなした。彼等は晩餐の饗應をまで受けたのである。

老人はなか／＼の旅行好きで、壯年時代はよく世界中を股にしたものだといふ。その二人の子供は各々別に一戸を構へてゐるとかで、家には十五六才の少女と、下女と下男とが一名づゝゐるのみである。器具調度などから見て中流社會の人らしい。

田見野は煙草をふかしながら先づ質問の皮切りをした。

「先刻被仰たこの社會の内容はまつたく黄金世界なんですね、一つそれを詳しくお話下さいますか。」

「然うですね……我社會が今日のやうになりましたその原因からお話しいたしませう、順序としま

してね——。その一つは主権者の英明なこと、その二は學者や識者に先見の明があつたことです。そしてその三は富豪や資産家に遠い慮があつたことで、その四は一般人民に旺盛な自主的精神があつたことです。つまりこの四つが今日の社會を建設する直接の原因だつたのですが、それと同時に、その裏面に伏在する大原因……舊社會の弊害が伴ふ苦痛を各人が餘りにも多く嘗めさせられたため、それが驚くべき勢を以て各人の自覺を促したといふことを見通してはなりませんよ。時に、あなた方の國の人々の社會生活上の主義はどんなものでした？」

「それは隨意競争とでも名づけますかね、つまり凡ゆる事業が、最もよい品を最も安く賣ることを競ふといふので、然うした何人の行爲に對しても何の束縛もなく、自由にその人の思ふがまゝにやれる譯なんです。で、新しい産物やまた新しい方法が出て、凡ゆる事業がみな進歩してゐるやうな譯です」

と、金尾は答へた。老人は頷いて

「然うでせう。我國の過去の社會でもその隨意競争を以て最良の道だと信じきつてゐたのです。ところが、だん／＼と經濟學者などの研究の結果、それが決して良い道行でないことが知れたため、それが直接原因となつて舊社會の崩壊がその端緒を開いた譯です。手近な例をとつて申上れば、御

承知の通り物には始態と中態と終態との三つの別がありましてね、終態は一定不變でなければ、中態は言ふまでもなく不定でせう。そして中態にあるものは必ず終態へと歸着の地まで行くものなんです。そして、隨意競争は、言ふまでもなく中態なんです。ところが一般社會の人は素より、經濟學者だつてそれを終態と見たのですからね。が、實際に於て、また理論上からして、何ごとでも終極を告げないで永久に持續し得るものではありません。あなたの國の歴史を翻いて見ても判るでせう、例へば元龜天正の世に於ける群雄割據の争ひにしても然うながく續くものではなかつたでせう。人知の發達しない、また事物の進歩しなかつた世では、然うした群雄割據などは終態だと見られなかつたか知れませんが、世の進運と共にそれは中態と變つたのです。で、今日でも凡ゆることが矢張その所謂天則を免れ得ないのでですよ。」

「なる程それは然うに違ひありませんね」

「例へば商賣や生産業にしましたところで、資本の大小または有無は實に重大な關係をもつてゐるのですからね。若し二個の工場が互に生存を争はうが爲めに、各々その製品の代價を極度に引下げ、互に顧客を争ふといふ場合に、遂に少資者の敗となることは言ふまでもなく、またそのほか、かろした故意の競争でなくて、世間の事業といふ事業が冥々裡に不知不識間接の競争をしつゝある

ことは餘りにも明白な事業で、その相互間に生じつゝある優勝劣敗はまったくその反證に他ならぬのです。無資者と有資者、大資本家と小資本家との競争は昔から絶ゆることがなくて、甲が起つて乙が倒れ、甲が倒れて丙が起ると言つた風に世を擧げて恰で混戦の状態だつたので、それを見て經濟學者が終態だと誤認したのも無理のないことですよ。しかし人智の發達は遂にそれが中態だつたことを證明づけたのです。すなはち優勝者となるための進んだ方法として、大資本家達が、トラストを設けて他の小資本家を壓倒するといふ状態となり、争の必然の歸着として統一獨占の終態となつたのです。むかし、諸侯又は政府がその好む者にのみ商工上の特權を與へて、他の多くの者を壓迫……少くも妨害した時代には、經濟學者が、隨意競争を以て理財の本義としたのも當然のことであつたに違ひありません。が、それは目的のための手段すなはち特權打破の利器としたまではよいとして、それを以て萬全の常道としたのが言はず時代が陥つた欠點だつたのです。が、その隨意競争が遠からず獨占統一とならうとした所謂舊社會の晩年に、凡ゆる方面の學者仁人は、近き未來を想像してその胸を轟かしたものですよ。そしてね、その當時の社會が採るべき道は三つあつたのです。その一つは、隨意競争を極度まで放擲して置いて、全社會の財産を大資産者の手に集めさせた後、幾千萬の人民は凡てその命を仰いで生活の資を得させるか——と、その二は、社會の富は少數

者をもみ利するために存在するものでなく、社會一般の人に幸福を得させるためのものであるといふ理由の下に、獨占統一の極度に至つたときに、その少數の大資産を奪ひ取つてそれを全社會に分配するか——と、その三は、既往の不自然な富の分布はその儘として、將來は社會の事物を全社會の幸福に用ゆることとし、獨占統一の趨勢を遮斷して、それを中途に豫防するの新組織を行ふかの三つなんです。そしてその何千にもせよ、大至急にその一つを擇ばなければならなくなつたのです」

二 事業の公營 (一)

老主人は、すゝつてゐた茶碗を下へ置くとまた話し出した。老人に似合ない熱情の持ち主である。また人一倍の話好きでもあるらしい。

「つまりね、慧眼な二三の經濟學者が、隨意競争の主義が危険至極なことを發見して、世の識者や學者がこの問題に頭を費したのは、恰度、歐米の諸學者がこの問題に注目し始めた時のやうに、相殺または混亂の競走など、言はれてゐたのです。然うした社會の暗黒面に一道の光明を與ふべく研

究した人々もかなりありましたが、ミル氏やカイルネ氏等が力を入れたコ、オペレーションの仕組だけが聊か見るべき價値をもつてゐるのみでした。一體普通の事業では、資本家と勞役者と分立してゐるので、謂はゞ力資分離の仕組ですが、コ、オペレーションは、これに反して資本家と勞働者と相結合して事業を組成しますので、勞力者でも半資本家といふ譯になつてゐるのです。で、所謂力資結合の仕組とも言ひませうかね、兎に角その主眼としますところは、勞力者の有つ小資本を資本家の大資本に合せて、漸々とその利益を積立つるもので、また、無資本の勞働者と資本家との間には、事業の利益の幾分を勞働者に配當する約束をして、勞力者はその分配を受けた利益を以て事業の資本中に加へて行つて、はじめは單なる勞力者が、次第に資本を作つて行くといふ方法なんです。この組織は非常に結構らしいので、各處にその實現を見ましたが、不幸にも廣く實現さるべきものでないものとなつたのです。と言ふのは、從來の力資分離の仕組では、資本家は極度に勞働者の賃金を値ぎり、利益は自己一人のものとしたのが、コ、オペレーションでは、資本家が金利以上の利益を得た場合は、その幾分を勞働者に配當しなければならぬため、また無慈悲に賃金を値切り得られないため、彼等の謂ふ所の馬鹿氣た眞似は無理な注文となつたのです。で、大部分の資本家は相變らず勞資分離の道行を探り、コ、オペレーションに投資するものは、普通の利益を目的

とする以外に何等かの事情があるか、或は慈善主義の資本家でなければ、他には一人もない有様でしたよ。一體このコ、オペレーションは、相當に行はるべき性質のものであるにもかゝらず、英國に於ても獨逸に於ても、どちらかと言へば失敗に終つたと言へるでせう。獨逸のシウルチエ氏なんか非常に苦心して經營されたものでしたが——。國內に於ける事業家はそれとしても、これを對外的に見る時は非常に貧弱なもので、世界の市場に外國品と雌雄を競ふには、我國の資本家はその資を大にしなければならぬ譯となりますが、惜い哉トテも比較にならないほど我國のそれは貧弱なものなんです。でも、飽くまでそれと對峙して行かうには、我資本家の資本をますます増さなければならぬのですが、その結果として、社會の貧富の差はいよゝ甚だしくなるので、如何にこの問題を解決するかとまた問題となつて來る譯です。一方に極富者を出さうとなれば、その必然の結果として一方に極貧者が出るのでね——。いや人間の智慧くらゐ淺ましいものはありませんよ。はじめに、諸外國との事業の競争上からして國民は國內に大資本家の出來ることを喜んでゐたものです。その裏面には、多數の人民の富を少數者の手に移すの大勢が迫りつゝあることにも氣づきませんでね——。また外國の事業家が入つて來て投資する者があると、外資の輸入だとか事業の繁昌だとか言つて歓迎したものです。その裏面には、我國の富が外國人の手に集まり、我國の中流の資

本家はそのために續々と無産者の群につき落されてゐることも知らないであつたのですからね。それから、外人とトラストを結ぶものがあると、資本の吸収だとして喜んだものです。今まで申上たやうな次第ですからね、國民の大多數を犠牲にしてまで盛に外人と提携して我腹を肥さうとするものが多かつたのです。つまりそれも隨意競走の當然の成行なんです。何しろ外資輸入と言ひましてもね、公債として借入るゝのなら良いのですがね、つまりその方法を選ばなかつたのですからね。然うなつて來ると、矢張どうしても前に申上ました三つの方法によつてこの場合をきりぬけなければならなくなつたのですよ。つまり……」

金尾は、しつきりなしに述べて行く老主人の言葉先を折つて

「あなたのお話を遮つては失禮ですが、一國の富が非常に偏倚しても、晩くもその極度に至つたら如何に貪婪飽くことを知らない資本家でも、多數人民に對して必ずしも衣食住を満させないこともないでせうに、お國の資本家はそんなに無慈悲だつたのですか？」

老主人は微笑しながら

「いや／＼決して然ういふ譯でもなかつたのですよ。然し、理財家や識者や學生たち及び一般國民の見るところでは、それは道理であつて、決して慈善ではないのですからね。全社會の富を或る少

數者の手に占斷することは決して道理ではありませんからね。また、幾千萬の多數者は、少數者に向つて慈悲を仰ぐべき性質のものでもありますまい。あなたが、若し、社會のために法を制定して道理を定めらるゝと假定したら、この問題を如何解決されますか？」

「……さあ……それは……」

「兎に角こんな問題は人々の意見次第ですからね、當時の我國では、さつき申上ました第一の匡救手段である無限放任は社會一般の非難的で、第二の手段である貧富の懸隔を極度に放任してその後に至つて資本家の資産を奪取して分配する位ならば、むしろそれを中途で調和を圖つて社會の組織を一新するに限るといふことになつて、そこにはじめて新社會組織の實行がそのスタートを切つた譯なんです」

田美野は一膝進めて

「で、その社會の新組織とは如何な方法なんでせうか？」

「一口に言へば、つまり舊社會では人民各個の私業だつた諸種の生産事業の九分九厘までを國家の手に移して社會の公業としたことなんです」

金尾を老主人の言葉先をひつたくるやうに

「それがですね、我國では從來官營の事業が多かつたものですが、一つとして好結果が見られなくて民間の事業として拂下げてからヤツト事業らしくなつたものです。これは三十年間の事實に徴したもので、確たるお話をなんです。私は、お國の所謂公業について疑問を抱かすにはおられません、若し幸ひにしてそれが實行されてゐましても、他國の盛大さとは比較になりませんまいね」

「ハ……我國が新社會となつたのは、もう五十餘年も前のことで、その間、社會の生産は非常に激増し、また國勢は頓に發達して、人民は非常に愉快な生活を送つてゐますよ。我國でいふ公業は決して官業でないので、その仕組にも意義にも當然差異がある譯だと私は思ひます。明日でも各事業場をお廻りになれば判りますよ。あゝ餘り夜更しをしましてお疲れだつたでせう、何卒お休み下さいね」

二人はそのすゝめによつて床についた。しかし、田美野は、ドウしても眠れない。その理由は、今まで社會萬事の大本と信じ切つてゐた隨意競争の主義が、さつき老主人の説明を聞いてその腦裡を混亂させたからである。彼の頭は極度に昂奮してゐた。どんなに眠らうと努力しても眠れない――と、金尾が入つて來た。

「どうしたい田美野君、僕は眠れなくつて困りきつてゐるんだよ」

「然うか、僕もお互さまだよ」

「あまり眠れないから、ここにあるブランデーでも失敬しやうと思つてやつて來たんだ」

「いつも寢坊の君にも似合はないぢやないか眠れないなんて……如何したんだい？」

「どうもかうもないよ、さつき老主人の話聞いてから、僕は二百萬圓の資産をドウ處分したものと煩悶してゐるんだ。たしかに勞資協同が道理だからね。道理に於て勝た主義は必ず近く實現されずにはゐないから、僕なんかの心痛は實際並大抵でないよ」

「僕はいま勞資協同の是非について考へてゐるものだ。隨分競争の本義は老主人の説明によつて覆されたけれども、更らに考へて見ると、隨意競争がなければ、良質廉價のものゝ生産が見られなくて、おまけに種々の弊害が必ず伴ふと思ふのだ。この國では、舊社會に於ける事物の跡をつぐとはよくするだらうけれども、我國や歐米諸國のやうに、最近最良で而も便利な事物が續々として現はれ出るやうな利益がないと思ふよ、老人のとくところは隨意競争の弊をのみで、その益を擧げないんだからね。利弊の相伴ふのは世事の常なんだから、よく／＼それを比較しなければならぬよ。だが、僕一個の偏見かしの世に、たしかに、隨意競争が、社會の進運を促進する……採るべき道だと思ふよ」

「さうだ。僕もその疑問を抱いてゐたんだ。この問題の解決されるまでは、ウカとこの新社會に感

服することは出来ないよ……おつと大事な用件を忘れてゐた。そんなことは明日にでも緩り話すと
して、焦眉の急件があるのだ。先づプランデーを傾けて大いに天下を祝福しやうではないか」
「然うだ。僕も頂戴仕るとしようよ」

——二人は遂にプランデーの力によつて熟睡するを得た。

三 事業の公營 (二)

夜明け近くなつてヤツト眠りに就いた二人である。で、勢ひ朝寝せざるを得なかつた。朝食の終
つた後で、老主人は微笑みながら

「如何でした？ 旅のお疲れで昨夜は定めしよく眠りなすつたでせうね。何んですつて……あんな
程、新社會の組織に就ての疑問のため煩悶なすつたのですか、して、それは一體どんなことなん
です？」

田美野は金尾の顔に笑を浴せながら

「金尾君は二百五十萬圓といふ財産家なものですから、或は我國にも新組織が行はれるやうになつ

たら、その財産をドウ處分するかといふ如何にも金満家の狭い考からなんですよハ、ハ、ハ、」

「止して呉れ給へよ人のアラさがしは……君もいろんな取越苦勞してゐた僻にハ、ハ、ハ、」

「ハ、ハ、ハ、なる程ね。我社會でも改造に着手する前までは、識者も學者も恐れを抱いたものです。
しかしその内容はあなたの方とは聊か異なつてはゐましたが……兎に角、それは平生或る一派の
經濟學説にかぶれて、他の新説を全く顧られなかつた過ですよ、社會主義に關する本をセメて一二
冊でも読んでいられたら決してそんな煩悶なんかされなくて済んだでせうにね。一體、新しい眞理
が出現すると、世人は先づその姿の見慣れないのに驚き、また新説は必ず舊社會の何處かと衝突す
るものですから、往々にして外道なんて言葉の下に冷笑と罵詈と迫害とを免れない運命なんです
かね。お國などではドウか知りませんが——」

「つまり食はず嫌ひでせうね、我國でもたしかにそんな傾向はありますよ。してお國の資産家はそ
の財産をドウ處分したのですか？」

「その問題については、當時非常な騒ぎだつたものですよ。何しろ、それは全部沒收すべしなどい
ふ過激論者まで飛び出した程なんですからね。しかし、一般多數の意見は、なるべく個人の所有權
を傷つけぬやうにしなければならぬといふので、それを買上げることになつたのです。そして、

先づ最初に買求めたのは、個人所有の土地や山林など、次に、諸製造所の個定資本、またその次に各商店に仕入てある一切の商品……と申しましても勿論その中には、なほ私業に屬すべき性質のものもあるにはありますが、兎に角今申上たやうな順序で、その方法は、土地にしる、工場にしる、商店にしる、一年の收納高、利益配當、賣上の純益金等を公平に算出して、既往幾年間の平均をとり、將來の盛衰を計り、そして公平な審査を遂げ、一割の利益なるものを六朱の利子に見積り、そして、公債の元金を割出し、内國人だけの所有を据置公債證書として、それを一般の持主に配附されてゐるのです。そして、この公債は、單に利拂のみで元金は一定の支拂をしません。國家の都合次第では永久に据置くことになつてゐます。その當時の我國の耕地は約五百萬丁步で、良田下畑を併せてその買上價格は平均一反步百圓位に當り、總額は五十億圓で、私有山林の價額は十六億圓、諸工場の固定資本が凡そ二十億圓、諸商店の仕入品に對し二十八億圓、家屋宅地等が四十六萬圓、合計百五十億圓をもつて片づけた譯です」

金尾は聊か驚きのさまをして

「なるほど、然うですか、何しろその公債の多大なものには驚かざるを得ませんね」

「ハ、それは日本人にも似合ない小膽なお言葉ですね、現今の英國公債は六億九千萬磅で、そ

れを日本貨幣に換算すれば、七十億圓でせう。我國のは僅かにその二倍強に過ぎないでせう。而も我公債は他國のその不生産的なのに引かえて、生産的方面なんです。ですから、百五十億圓の利子として一ヶ年九億圓の負擔がありますが、それは買あげた土地から生ずる利益から支出することが樂に出來ますからね」

「しかしね、資産家の財産も、彼等の祖先若しくは彼等の手によつて、數代若しくは一代に於ける苦心の結晶ですから、その所有權は動かし難いものでなければなりませんまい。如何に社會のためとは言へ、本人の好まない所を強いて買上げて良い譯はないでせう」

「金尾さん、それは譯のないことですよ。しかし試にあなたにお尋ねしませうが、貴國では、社會のため必要な鐵道を作るに當つて、その線路が資産家の所有地を經過せざるを得ぬ場合、貴國の政府及び人民はそれを如何しますか？」

「結局は土地收用法で買上げます」

「その本人が不同意を唱へて抵抗した時には如何しますか？」

「不同意……そんな……」

「私は、貴國の法律が無理にも買上ることを知つてゐます。しかし、買上げるには勿論相當の代價

を支給するので、資産の形容を土から金に替えたばかりで、一般社会の利益のためには、個人の利益の幾分を犠牲に供することは止むを得ないのでね、そしてそれは現在歐米諸国にも行はれつゝあることで、我國に於ても、理論上に一點の非難もないものとの定論となつたのです」

「時に御主人、若し過激な極端論者の説の如く、個人の所有する土地や工場や商品など一切の財物を國家に没收して、それを全社會の有としたなら、その産出品は一般の社會に分たれるために、その改革は効果づけられませうが、只今被仰たやうに、一切のものを買上るとすれば、例へその事業は國家のそれとしても、それから生ずる利益は公債の利子として、やはり以前の持ち主だつた資産家に與へなければならぬでせう。それでは、たゞ單に、個人から國家へとその所有權を代へたと以外に何等の効果もないではありませんまいか？」

老人はハタと膝をうつて

「田美野さん、良い御質問を聞きますね。しかし、その説明は譯ないことです。何と言つても社會の凡ゆる事象が迅速な發達をなしつゝあつて、社會の生産力も年々増加しつゝあるのです。で、買上以前の貧富の偏倚なのはその儘としても、買上以後に於て、社會に増加して來る生産力を全社會に分配する大利益があります。年々激増して行くべき生産を、全社會に配當することが、どれほど

良い効果を現はしてゐるか……それが今日の社會をなしたと言つても良い位ですよ。なほ、新組織から生ずる利益として、舊組織時代のやうな不合理な分配……食棧飽くことを知らない資本家にうまいところを食べられて、労働者はその食べ屑のホンの少しを受けてゐたやうな不條理なことを全然なくしてしまつて、そこに勞資の協同から來る適當な勞資分配が行はれつゝあることを見遁してはなりませんよ。諸工業にしる農業にしるがみな然うなつたんですから、國民の幸福は期せずして生れる譯なんですよ。また假りに一步を譲つて、舊社會に於ける資本家が適當な利益を食らなかつたものとして、また、改革以來、世の生産力が増加しなかつたものとしても、新組織から生ずる利益は多いものですよ。しかし私ばかりペラ／＼饒舌り立てるより少しお國のことも伺ひませうかね。田美野さん如何です？、貴國で最も成績の良い工場や製造所は一體どんな人の所有ですか？」

「然うですね、どんな人のつて一寸アレですが、大資産家の工場ほど良いやうですよ」

「なる程。してそれはドンナ理由でせう？」

「然うですねえ……つまり、萬事の設備が完全なことは勿論ですが、不景氣の時にその生産をストップにして置いて、景氣の時に賣り出すといふ風に、世間の景氣不景氣に左右さるゝことを免れ得るからでせう」

「然うでせう、では、その資本家が社會國家だつたらドンなものでせう？我國のやうに百五十億圓の大資本とは逆も比較にはなりませんまいね、我が社會の工場や製作所が、よく不景氣に堪えて、好景氣の時に利益を収め得る力や完全な設備、および、不景氣風なんかには目もくれないでドン／＼製造して行ける力とがあるために、他國の諸工場のやうに不景氣だからとて使用人の給料を減したり、または解備などまでして一時の急を免れるなどいふことがないのは、多數人民のため此上もない幸福ですからね。それに、舊社會では、小資者ばかりである我國の事業家は、いつも世界の商業戦に負けてゐたのですが、今日それを國定の公業として以來、世界の市場に堂々と外國と競争し得るのみでなく、却つて他を凌ぐ有様となつてゐますよ。これもつまり新組織の賜なんですね」

「新社會の利益の實に大きいことは敬服の外ありませんが、しかしながら社會の凡ゆる事業は、各人が利益を得やうとする隨意競争に於ける當然の道行として各人が競ふてする新工夫などがあつて、そこに初めて世の進歩があるのだと思ひますが、お國にはこの意味に於ける欠陥は見えないでせうか？」

「尤も至極な御質問ですね。しかし、御覽の通りにまでなつてゐる我社會のことですもの何ぞ良い仕組がなければ叶ひますまい。いまそれをお話しても良いんですが、もうお午ですから、晝飯がすんだら、諸工場や商店などを巡覽していらつしやい。私は止むを得ないことがあるので、私の名刺をもつて——。何れ今晚もまたお話しませうから。」

四 生業の組織(一)

「今日は何、鐵工場や織物場や製靴場や製傘場を巡覽しましたが、各工場の規模の壯大なこと、職工の熟練と勉強とは、恐らく世界中にその比を見られないものです。工場全體の仕組を一體どうしたらア、なるだらうと二人とも舌を巻いてしまひましたよ」

「ハ、ハ、然うでしたか、一口に言へば、歐米諸國に行はれてゐるコ、オペレーションの仕組に對して國家の資本を貸與して、一切の事業を労働者自身のものゝやうに思はせる……つまり、勞力者各自が結果して事業を組たてまたその利益を分配するやうな分で舊株主に支拂ふ利益六朱を引去つた後は、事業者の所得とさるのです。そんな譯だから、従業員各自の勉勵な加減が人を驚かす程なのも當然なことですよ。——おつと然う／＼それからね、是非知つといて貰はねばならないのは、各工場の従業員が、みな一樣な賃金や配當を受けてゐるのではなくて、各人の技倆の巧拙によ

つてそれに十餘種の等級があることです。つまり同一の時間で、他人よりも多く生産し、または他の追隨を許さないまでの技術を有つものには、それに應ずる報酬をし、また、工場利益の分配は、その幾分を等級の割合を以つて配當し、他の幾分を間接または直接に平等に配與するものです。そして、工場内の組織はと言へば、恰度お國で會社の監査役に當る我が工場長は工務省の支廳から勤めますが、他の所謂重役級……幾名かの評議員はみな工場に從事する人民が選舉することになつてゐます。それから副長といふべき人は、その地方自治體の行政廳から選任して、地方との交渉を便利にしてゐます。こんな風に全國の各工場が殆んど同じ組織をしてゐるのです。」

老人は冷めかけた茶をグツと飲みほしてまた話をつゞける。

「舊社會の工場と現在のそれとは事業の上にて於て随分違つたこともお話しなければなりません。その理由は、舊社會の製造會社は、商工二様の事務に苦心してゐたものでね、原料の買入れには時の相場を見計つて能ふ限りの懸引をしなければならぬし、また製品の賣捌にも苦心が要るし、内に於ては良質で而も廉價なるものゝ性質に苦心する有様で、大切な製造よりも、原料の買入と製品の賣捌に殆ど全力を傾注してゐる有様でしたが、今日では買入れだとか賣捌だとかには何等の關係がなく、たゞ良質廉價なものゝ製出に全力を傾注される譯になつてゐるのです。」

「さつきの田美野君とも話たのですが、まったく總てが理想的に出来てゐますね、一時が萬事とも言ひますから、定めし政治官制なんかも理想的に組織づけられてゐませうね。」

「然うですね、でもマアこゝでは生産に關する方面だけをお話させよう。それはね、農務省と工務省と商務省とに分れてゐましてね、各省ともその直轄の支廳を各地に設けて、その区域内の事業を管理させてゐるのです。いま、假りに、或る一年度の事業に取りかゝるとすれば、商務省は、全國各地の商店に、一ヶ月間に賣捌くべき物品の豫算書を提出させるのです。そしてその報告を集めて全國一ヶ年間の諸物品の需要高をそれ〴〵算定して、それを或は農務省に或は工務省にと通知するので、それによつて、工務省は各地の製造場に割當て、農務省は各地の支廳に割當て、歳の豊凶に關係しないものはその價格を上申させるのです。そして、全國の諸物品の需要高と供給總高とその品目や性質の定まつた上に、その通知を受けた工場は、たゞ單にその製品を豫算通りに製出するだけで、その性質に要する原料は最寄の商務省支廳官轄の卸店から受取り、物品の製出された時、それを最寄の商務省の支廳に引渡せばその工場の役目は済んだといふ譯で、まったく簡単に組織されてゐるのですよ。して、あなた方は商店は何處を御覽になつたのです？」

「呉服屋、舶來小間物や、煙草屋、荒物屋などを見ましたが、その規模の大きいのと買人に丁寧な

のと、取扱の敏速さと、物品の受渡や帳簿の記入などが整然として行届くのはまづたく感服しましたよ」

と、田美野が答へると、金尾もいふ

「規模の大きいことは恰で工場と同じで、實際驚き入りましたよ」

「然うですか、あなた方の見られたのは卸店でなくつて賣店の方ばかりですね。卸店の方は全然商務省支廳の直轄なんですが賣店の店長は支廳から命ぜられた監督者で、重役すなはち評議員は、その賣店の購内区域内の人民から選舉する仕組なんです。賣店の内容はと言へば、かねて報告してある豫算に従つて、必要物品をその最寄の商務支廳直轄の卸店から受取つて来て、買人の來るに應じて物品と金と引換へるだけのことで、品物を丁寧に取扱ふのと、手早く埒をあけること、買人に親切を旨とすること以外には何んの技倆も要らないのです。そして賣上代金は、定められた最寄の卸店に納め、品物の入用な時はまた直ちに卸店から受取るだけのことなんです。それから特に申上げねばならないことは、商務省が全國の販賣權を一手に握つてゐることで、従來は、甲乙領地の貨物の不公平のためにそれが價格にも多くの差等が出来るを常としてゐましたが、今では甲地から乙地へ、また乙地から丙地へと自由に貨物を振向けて融通のつくやうになつてゐるのです。それに、

従來の隨意競争の社會では、よく見込違ひ……需要供給の高を審にするの途がなかつたため、各人が銘々に見込を立てゝゐたのが外れて、儲ける人のある代りにまた昨日までは巨萬の富を擁してゐたものが、今日は路頭に迷ふやうなことがよく起つてゐましたが、今日では兎に角前にも申しましたやうな完全に近い仕組なものですからそんな事は少しもなくて、各人が安心して生業につけることになつてゐるのです。今になつて振返るときは、昔は意外の儲けをし、または損をするといふ風に、恰度幾萬の盲人が一場に集まつて互に同士打をしてゐるやうな社會的大損失……世の勞力が無益に費され、また各人には興廢損得の苦樂を一朝あるひは一夕に否分秒に別つやうなことは全然その影も止めなくなつたのですよ」

「然う被仰られると何となく私どもは穴へでも入りたいやうな氣がしますよ……それはさうと農務省はどんな風になつてゐるのでせうか？」

「やはり各地に直轄の支廳を置いて、農務省から一年度中の需要通知を受けてそれを各支廳に割當てその産出を受負はせるのです。と、支廳はそれを管内の農家に通知して置くのです。素より農産物はその歳の豊凶に左右さるゝことが多くて、人力にばかり依頼することは不可能ですけども、農民は兎に角その産出にベストを盡すのです。そして農民から時節々々にその收穫物の納入を受け

た支廳は、それを商務省に引渡すといふ仕組になつてゐるのです」

「なるほどね、して、總ての生産物の價格はどうして定めるのです？」

「それはみな外國の相場を標準としてゐるのです。何しろ海外貿易商が幾億圓といふ高に上つてゐる程ですからね、で、商務省は世界各地に特派員を置いて、工務や農務の特派員と組合せて、世界の全市場に眼を輝かして抜目なくやつてゐるのですよ。それにね、世界中からどんなに多額の註文があつても、ドシ／＼引受けてやつて行けるやうになつてゐると、一國の工業はまた全世界のそれだといふ考も全國民がもつてゐるので、舊時のやうな不正濫造などの弊は全然なくなつたので、世界の到る處の市場に白熱的歓迎を受けつゝある程ですよ」

五 生業の組織(二)

新社會の農業を視察しやうといふので、旅費の都合があるから爲替を組みたいがどんな銀行がよいかと金尾が言へば、我國にはたゞ一つの國立銀行があるだけで、その支店が各地にあると老人は教へる最寄の銀行に爲替を組めば何處でも受取れるとはなるほど便利だ。

また、國內の生業がすべて公業であるために、農工商各省の支廳の間には、互に請取書だけで物品の取引をしてゐる。で、國民各個が預金をしたり旅行或は送金等の外は金錢の必要がない。隨て銀行はたゞ爲替と預金との事務を取扱ふに過ぎない。——といふ。

そして、鐵道も一切公有だし、實に驚くほど發達してゐるといふ。それは甲線の暴大な利益を以て乙線の損失を償ひ、その利益を平均するために、薄利でありながら各地へ敷設することが出來たのだ。と。

彼等はその翌朝旅装を整へて田園の旅へと發つた。乗客の多いこと、従業員たちの敏捷で親切なこと、また設備の完全なことは感ずるに餘りがある。

田地畑地ともに大農法で、大抵の農夫たちは馬耕牛耕などの大農具を使用してゐる。作物の見事な生育といひ、牛馬鶏豚などの家畜が充分にその質を選ばれてゐること、完全な發育を遂げてゐること、は田美野と金尾との感嘆の聲を誘ふ。

農家の疎密の配置も耕地の善悪や廣狹を比例して實によく行はれる、家屋の構造も一樣に堅牢なものである。また山地に入つて見れば、樹木の伐採および搬出などすべて大仕掛で、勞力を省くことにしてゐる。と同時に、植樹の可能な山には何處にも植えつけられ、また伐採のあとには必ず樹

えつがれ伐荒されたまゝなのは、一ヶ所もない。

——彼等はその日の夕方老人の家に歸つた。夕食を終つた席で、田美野は質問を發した。

「農林業はどんな仕組でア、までよく行届いてゐるのでせうね？」

「耕地山林一切を國有として以來、農業は思の外に簡易に生産力を増加することが出来ましたよ。と言ふのはね、舊持主の小區劃を撤廢して、勞力を極度に省略し得らるゝ大農具の使用に適する程の大區劃としたままでんですよ。つまり、従來の、勞力の勞費の多かつた小農法を改めて、勞力を省いて、より多くの利益を得る大農法を採用したまでのことなんです。そして、農夫の家族の多少により三軒乃至五軒を組合として、各々の區劃を受持たせるのです。それは、然うしないと怠惰な者が出ますからね。その組合では、各々が互に監督し合つて、業を休んだ者にはその收穫が分配の時にそれだけを引去ることになつてゐるのです。そしてその勤務時間などは組合内の申合せによつていろ／＼と分れてゐるのです」

老人は茶を一口飲んで更に語り續けたが、それによると、一村の組合で農務省から肥料や必要な農具を借受け、その代金は、年賦または出來秋に返納する制度だといふ。それに舊時の小作料はその收穫高の割合に應じて過ぎた支拂を餘儀なくされてゐたのが、今日では、公債利子に相等するだ

けを農務省に納入すれば、その餘外は自分の収益とするのだといふ。それから今一つ農家の富んだ原因として擧ぐべきことは、農務省が、戸口と耕地との均配に五十年來努力したため、今日ではよくそれが行はれてゐること、編物制網その他の自宅副業をその家族に教へ、それを同省から賣捌いて呉れること、ならびに、牛馬鶏豚等の良種を輸入して各地に繁殖せしめた農務省の努力が與つて力あるものだといふ。

それから、農政の教育については、毎月一二回かならず各村に於て、農務省派出の教師に農學の講話を爲さしむる等のことも見るべき施設だと老人は微笑みながら語る。そして農務省が商務省の豫算によつて割當てた額によつて、農民はその一切の收穫物を最寄の農務省支廳に引渡して金員を受取することを例とするが、止むを得ぬ事情の時は前借を許して農民の便宜を計つてある。なほ、農産中に於ける貯藏困難な野菜または或る果物の類は農家の私賣品であるが、柑橘、苹果、梨、桃などの大産地では、それを公商品として商務省から取扱ふのだと説明した彼は急に言葉を改めて「して、あなた方は何處の海濱で漁業の視察をなされたのです？餘りお歸りが早かつたやうですが

——」
「未だ實は漁業方面の視察は頓と……」

「然うですか。ではついでにお話しませう。御承知の通り、我國は四方に海を環らしてゐる關係上、漁業もまた大切な國産の一つなんです。で、大仕掛の漁業は、他の事業と同じく國家の資本を用ゐて所謂漁民の組合事業としてゐるのです。そしてその取締は漁民中から農務省が選任するか、都合によつては監督官を派遣してゐる所もあります。要するに、漁業は漁民各自の組合業として、その資本は國家から貸與し、その利は組合に分たれて漁民の富の増進を圖られてゐるのですよ。また、小仕掛の漁業……一艘の船で營業するやうなものは、國家からその資本を借受くるだけで、それは私業となつてゐるのですが、魚市場だけは公業となつてゐます。そして一般に漁業に關する知識も進歩しましてね。漁族の繁殖法を講じたり、沿岸到る所に魚付林をつくりなどのこともしてゐますよ」

老人はシガアに火をつけながらさらに言葉を改めて

「あなた方はもう農工商等についての大略は了解されたでせうね、で、私は、嘗て田美野さんの提出された疑問を解釋させよう。あなたは、社會主義には人々各個の働みがないだらうと質問されましたね。しかし、前にも申上りましたやうに、我工場の勞力者にしても、その技倆に應じて賃錢に等級があつて、各人がより多くの給料を得やうと競ふて奮勵してゐますからね、それに、工場の利益

も、その努力に比例して或程度までの差等がつけられてゐますので、層一層奮勵してゐますよ。農民にしましても、公債の六朱の利子以上の産出は各自の収入となりますし、漁民にしても、舊時代に於ては、網主や網旦那に取られてゐた収入までが各自の分配となりますので、農漁工の三業民とも各自が競争してゐますがね」

いや／＼、それはよく判つてゐますが、私がお尋ねしました點は、新しい發明とか工夫とか組織とかを案出するといふ謂は、社會の向上發展の動機となるものは隨意競争の世でなければ望まれないかといふことなんですよ」

「なる程御尤なお尋ねですね、しかし、我國では、農工商の三省に最も大切な一局部……創案局といふのを置いてありましてね、機械、藥劑、發見、組織の四科に分つて、苟くも社會の利益を増進するやうな創案或は工夫をしたものがあるときは、早速それを創案局に具申させて試験し、その實行が果して社會に利便を與ゆるものだといふ時には早速年金を與ふることになつてゐるので、その年金は、舊時代に於ける專賣特許權より得べき程に相等のもので、多いのは年額十萬圓以上を出づるものもあり、少いのは五十圓百圓づつと言ふ有様です。そして、醫藥用、化學用、藥品類等の創業は藥劑科に屬するもので、諸礦物の發見は發見科に、工場や商品その他の總ゆる組織上

の新工夫は組織科に属してゐるのですよ。それからね。創案局の評議員が不用と決議したもので、本人がそれに不服な時にはそれを自ら製造して販賣する自由がありますし、また、或工場での使用をするといふことになると、創案局では更に評議を重ねて賞金を定めることになつてゐます。で、實利のあるものを落第させることは、創案局の非常な不面目となると同時に譴責を受けることになつてゐますから、その審査には極めて慎重な態度をもつてしてゐます。そして、殊に著しいのは發見科の創案でしてね、各地から、金銀鑛や銅鑛や石炭鑛などの發見を申請するものが續出します。良質良層のものを發見した人が多額の年金を受くることは勿論です。また、諸商店の組織なども、適宜の場所だとか仕組の改良だとか、ホンの一寸したことでも年金を受くる望があるもので、皆が競つてやりますよ。それから、織物や染物その他の器具調度類の製作には、各工務支廳で數多の意匠家を備入れて彼等に創案させ、その賣行の良いものには特別の賞を與へて奨勵するといふ仕組なんです。舊會社で或を一つのを創案したら資本家を見出すことに大骨を折り、やつと胸なで下せばその利益を分けなければならぬし、その事業を起した結果は他のそれと衝突して例の隨意競争をして死活を争ふ……なんかとテンデ比較になりませんよ。兎に角ね、我が社會に於ても決して競争がないのではありません。たゞその競争の方法を改善したのみです。その結果とし

否

て、昔のやうに無益な苦痛者を生ぜしめないで新事業の促進を見られるのは勿論なんです。我國で若しこの創案局を設けなかつたら、屹度田美野さんの疑問のやうな弊があつたに違ひありませんが……。私なんかね、數年前に、或土地の地形を考案して工場を設くべき創案を申請してそれが甘くパスしたために五百余圓づゝの年金を受けてゐますが、我國人が創案に熱心な一例を申しますとね、御馴染の下男でさへも、二三年前に或るところに橋を架くことが國民の便利だといふ創案を立て、年金を要求しましたが、頓と落第したので大いに悲觀してゐましたよハ、ハ、ハ。兎に角一般國民がそんな風に熱心なんですよ」

「ハ、ハ、いや、なか／＼奴さん大した元氣をもつてゐますね」

六 住民の生活(一)

老人は二人に向つて、舊時代の隨意競争主義の先入主が除かれないために新社會の組織を充分理解し得られない嫌ひがあるから、赤裸々に隨意競争の醜さを暴露しやうと笑ひながら言つてシガアの煙をプツト噴き出した。彼は微笑しながら二人に

「如何です？、六七歳の幼児と二十五六歳の筋骨逞しき下男とを一場に放つて相争はしたなら……
それでも随意競争と言へますか？」

「それは言へませんね」

と田美野は答へる。老人は眞面目になつて

「元來、知識は各人の生活上必要なものですが、舊社會ではその機會を恵まれたものと餘りにも恵まれないものがありました。教育を受けたものと無教育者とは恰度小男と下男と同じなんですよ。また資本にしても、それが事業界に於ける競争に必要な利器でありながら、生れながらにしてそれを得たものと然らざるものがあります、これも恰度前の例と同然ですよ。幼児と屈強な壯者——これを争はして随意競争とは言はれますまい。眞の随意競争とは、兩者の教育を一樣にし、資本を同じにし、資本を得べき有様を同様にしその上でなければ言へますまい。この意味に於て舊時代の所謂フリー、コンペチションは落第ですぞ。ところが、今日の社會のやうに人々の有様を一樣にして、そこに各人の天賦の技倆を競ひ相勵むことゝすれば、それが本とうのフリー、コンペチションなんですよ。若し強いてその言葉を使ひたいならばね」

二人は頭を掻きながらまるで謝罪するやうに

「まつたく……屑く兜を脱ぎますよハ……」

「ハ……とう／＼老将軍が勝ちましたね。それは然うと、今一つ舊社會は偉い主義をもつてゐましたね、随意契約といふのを——。即ち競争上強者が勝ち弱者が敗れて貧富の偏倚を生ずるのは人々の随意契約の結果だといふのをね。しかし、そんな馬鹿な話はありませんよ。何故つてあなた、例へばね、不意に深葬に陥つて助けを呼ぶ人があるとしましてね、一寸の勞力で引出せるのに、然うした不幸に乗じて「私のために二度の食事をやつと満すだけの賃金で働くことを約束すれば——」などゝ無理な條件をつけてその契約の下に穿から引き上げられたとしても、果してそれは随意競争と言へるでせうか？それは表面は然うでも内容に於ては強迫契約ですからね、舊社會に於けるものはマアこんな類を出ぬものでしたが、新社會では、その生活状態が殆んど同様な地歩にあるので、その間に行はるゝ随意契約こそ眞の意味に於けるそれですよ」

「まつたくですね、私どもは我國のことを顧みて慚愧に堪えません」

「何もそんなにまで慚愧されなくつても良いでせう。謂はゞ何の社會でも經て來なければならぬ一つのプロセスですもの——。さてと、ついでに新社會の一般の仕組についてお話しませうね、第一に勞力の集配所についてお話しませう。それには一つの事務所がありましたね、全國に氣脈を通

六四

じてあるのです。で、甲地に職工や農民その他の傭人が不足するといふ場合には乙地から直ちに派遣されるといふ有様です。つまり全国的に勞力の平均が圖られてゐるのですよ。それから第二に擧ぐべきことは、疾病に對して國家保險の制度があることなんです。それは、勞力者の賃金中から毎月若干づゝ掛金をし、雇方の工場からも同額の掛金をし、國家からも同額の補助掛金をして、それが全國を通じて一大組織とされてゐるのです。で、三日以上病氣の者には幾分の食費または藥價や診察料を給することになつてゐるのです。それにまた負傷保險といふのがありましてね、全國の各工場を通じて、雇人一人について、工場費の中から積立金をし、工場に於て不慮の負傷をした者には手當を、また不具となつたものには養育料を支給することになつてゐるのです。それから、特に申すべきことは、養老の仕組を設けてね、七十歳以上の老齡者には國家から扶助料を支給してゐることです。それから餘り話がながくなりますけれども、國民一般の生活状態をお話いたしませうね。先づそれを三つに分類することができると思ひますが、その一は、國家から受くる公債の利子と貯金のそれとで餘裕のある生活を營んでゐるもので、その二は、その半分位を、公債の利子や貯金により、その他の半分位を自己の給料によつて生活するものです。そしてその三は、自己の勞賃を以て生活するものですが、モウその大部分は相等の貯金利子によつてそのたすけとする程度にな

つてゐるやうになりました。そして、今日では大抵家屋なども公有で、僅かの家賃で住めることになつてゐます。それからね、第三類の人々の住む公宅の最寄に多くの共同賄所がありまして、その小規模なものは三四十軒の家族を引受け、大規模のものは百家族以上も引受けてゐますがみな公業なんです。そしてそこには第三類の人の殆んど全部と第二類の人の三四割とが行つて食べてゐるのです。その方が便利でもあり經濟でもありますからね。それから、料理屋も大抵は公業です。と言へば、新社會では是が非でも公業でなければ——といふやうに思はれるか知れませんが、それは當然の勢として、私業のものは經營者が相應に利益を見なければならぬのが、公業に於てはその要がないために自然と私業の經營が困難となるからなんです。既に御承知かとも思ひますが、斬髪屋や骨陶屋や新聞屋などが私業である位でして、印刷工場なんかも公業となつてゐるのですからね。なほその外に、公私何れにも雇はれて良いやうな業態のものには小説家や畫家や彫刻家などいた藝術家や、醫者などがあります。あゝ老人の長談議にはモウ飽き／＼されたでせうね、それは然うと、あなた方も御歸國になる前に是非とも一度は大賄所に行つて御覽なさいな、まつたくあんなに愉快なところはありませぬよ。何しろ近所近邊の家族が一堂に集まつて互に談笑しつゝ食事するのですからね、そして、食後には、子供は子供同士、大人は大人同士で、世間話や時事問題など

六六

について議論したり談笑したりするのです。舊社會のやうに、職を求めて得ない者や、病で醫藥を得ない者はなく、老齡に至れば養老給を受け、不慮の災害には保険料があり、娯樂は求めて得られないことがない世の中ですから、何等の不平もない筈ですものね、たゞ、職業を勵み、技術を磨いて、より良い安樂の種子を蒔かうとの欲求しかない人ばかりの集りですから、そこには眞に一大家族の親しい楽しい氣分が溢れてゐるのですよ。一體、我國の人は、總てを公共的方面に觸れしめたいと思つてゐるのですが、娯樂にしても然うで、殆んど無代價に近い料金で社會を樂しましむる仕組が發達してゐましてね、御承知の通り處々に公園や公館をつくり、その中には古今の大家の畫や彫刻を陳列し、市内の寄席なんかも大抵は公業で、俳優や樂人や諸藝人などもみな相等の給料を國家から受けてゐますよ。それから、自治制に巧な各地の都市では、懸賞で脚本を募集したり、諸藝人を仕立つるなどのこともしてゐます。これを一口に言ひますとね、彫刻、畫、音楽や劇や輕業や手品の類に至るまで、何れもその技に達したもので社會の公費を支給されてゐないものはありませんよ、人々はまた無料に近い料金でそれらを見ることが出来るのです。で、我國都の建物や彫刻や畫などは恐らく世界に冠たるものでせうよ、アゼンスの盛時はいざ知らず、今日の世界で、都市の壯麗なことや社會一般の和樂、さては諸事の發達してゐること、人氣の醇朴溫和なことなどは逆も

他にその比を見られませんかよ……オット餘り手前味噌ばかり並べて御意屈させて濟みませんでしたね、油揚げを餘計に食べ過ぎたのでツイ、ハ……まあ一服しませうかね」

田美野と金尾とは熱心に聞いてゐたが、二人は差支がなければもつと話で呉れといふ。老人は得意な顔に笑みをたゞえて、

「舊社會を顧みますとね、まつたく隔世の感がありますよ。同業者の競争……俗にいふ商賣敵なんか随分ひどかつたものでね、人の繁昌を見ると頭が痛くなる——甲が「倉庫を立て、乙は腹を立てる」といふ有様でしてねハ、ハ、それから人々がみな表面はお體裁の良いことを言つて置いて蔭では舌を出すといふ風で、各人が競つて利を貪らうとするなど、まあ一口に言へば社會の到る所に陥し穴が設けられてゐる有様で、逆もオツカナクして仕様がありませんでしたよ。それらはつまりみんな隨意競争の弊なんですよ。ところが今日のやうに土地や資本が社會の公業に歸してからは、然うした罪惡の行はれるやうな原因が消滅したのです。それからね、新社會となつて殊に幸福なのは、第一類に屬する富豪たちです、同社會の末期には、その邸内や門前には爆彈などの見舞はるゝ恐れがありました、今日では自分の事業の損得や盛衰などを氣遣ふ必要もなく、和氣藪々の社會に極樂の生活を送つてゐるのですからね」

「それでは定めし慈善事業などには大金を寄附されるでせうね」

と田美野は質問を發した。老人はます／＼得意氣にその雪白の鬚を抜きながら、

「いや／＼、新社會にはそんな不自然な個人からの救助などの必要がないのです。で、今日の富豪などの喜捨金は、衆人を楽しましむるために、美術館や圖書館或は遊園地などをつくるなどに使はれてゐるのです。社會の組織を不完全の儘にして置いて、不自然な慈善を行ふのは決して採るべき道ではありませんからね」

七 住民の生活(二)

新社會の初年に私どもの驚いたことは、訴訟沙汰の皆無となつたことです。何しろ人民の資産としては、公債證書と貯金と家具類があるだけで、事業が擧つて公業に歸したので、訴訟とか犯罪だとかの種子がなくなつたのですからね。で、裁判所はあつても閑散極まるものですし、舊時代の法律や條例なども不用となつてゐるのです。殊に可笑しいのは、むかし「商賣」と言つた言葉が不要となつて、今ではたゞ受渡しといふやうになつたことです。それから不幸な犯罪者なども、初

犯放免後は直に收容して生活の保證を與ふることになつてゐるのです。眞の悪人は再犯以後だといふことを今日の社會では認めてゐるのですよ。また強竊盜をしたものも、その贓品を賣捌くべき餘地がないので、自然と然うした犯罪も尠くなつてゐるのです。何しろ犯人の矯正なんか、その精神的にするのも必要なことながら、罪惡を行ふの餘地をなくするやうに周圍を取締ることが必要です。すからね、兎に角舊時代からの法律が今日でその九分九厘まで不用になつてゐるのです」

「然うでせうね、…時に教育について少しお話下さいませまいか？」

と、金尾が非常の興味をもつて質問する。

「教育ですか、教育には我國民が最も力を入れてゐるところで、大小各學校ともに悉く無料で、尋常小學校から高等小學へ進むと中學校と職業學校の何れかへ誰もが入らなければならぬのです。しかし中學へは、將來大學へ進んで充分その技能を發揮し得ることの見込のある所謂俊才を優等生中から選抜することになつてゐて、その他の者は職業學校に入つてそれ／＼の職業教育を授けることになつてゐます。そしてその年齢は、七歳をもつて就學年齢とし、尋常小學に三年、高等小學に三年、職業學校に三年を費すのを通例としてゐます。そして中學に入れられた者は、誰もがそれぞれ大學を卒業することになつてゐるのです。それから、高等小學卒業後即ち十六歳からは、職業に

就いても差支ないとされてゐるのです。それは止むを得ない事情のある人に限つて——。なほ、工藝に關する高等學校がありますが、それは技師や技手を養成する目的なんです。そして傾向として實用的な教育を主とし、それに遠ざかるやうな學問を従としてゐます。道徳や倫理などは、單純にその本義を教へ、歴史などは餘り引用しないことにしてゐます。たゞ大學に温古科として然うしたことを研究するのが置かれてゐるだけと言つて良い位です。それから普通教育程度の生徒には學校で二食を給し、高等のそれには一切の衣食を給與することゝして専心その業を研究するに便宜を與へてあります。そんな風ですから、教育費は軍事費の三倍以上になつてゐます。それ位までに我國民の教育に對する理解は進んでゐるのですよ」

「まつたく驚嘆しますよ。僅か五十年の間によくも然うまでなつたものですね」と金尾は言つた。田美野は更に新らしい質問を發する。

「商賣方面に於ける變化を何卒少しお聞かせ下さい」

「それはね、舊社會で商業上に人手の濫費をしてゐたことを發見したことが第一です。舊社會では、四十萬近くの戸數の所に、その半分即ち二十萬戸は大小の商店で相當の物貨を賣買してゐたのですが、物品の授受が商務省の一手に歸して、二三ヶ町に一ヶ所の割で賣店を置かれてゐるので、

八百八町と言はれてゐるから五百ヶ所もあればすこしの差支もなく全市民の需要を充せるのです。そしてその使用人なども、一賣店に平均五十人位ですから、どんなに多く見積つても三萬人あれば充分ですからね。然うすると九十七萬人といふ大剩員が出た譯ですが、それにはそれ〴〵適當な業務を與へて世の生産を増しつゝあるのです。まあこれらが最も著しい例ですよ」

「して、自働車や大馬車で肉類や野菜類を賣り廻つてゐるのはやはり私業なんですか？」

「いや〴〵あれは公業です。彼等は商務省支廳の雇人で、公食堂で食事しない人々の住む市街を朝夕賣り歩かしてその便宜を圖つてゐるのです。また、貨物運搬車なども公業でやつてゐるのです。

「然うですか、お蔭で良い参考を承りましたが、なほ其の他に意外に思はれたことはないでしょうか？」

「ありますよ、澤山。その著しいものは、新社會の初年に鐵道收入の激減したことです。工務省でも非常に不審に思つてゐましたが、舊社會での乗客の三分の一若しくは四分の二は商用のためだったので。勿論今日では、遊覽又は交際の旅行あるひは勞力者の分配送還、貨物の輸送等で舊時代を遙かに凌いでゐますが……」

八 政治組織

「新社會の政治組織について話せと被仰るのですか……然うですね、まあ人民の家事の即ち政治であり、一國の政治がすなはち人民の家事だとも申しませうか、それほどまでに理想的に行はれてゐるのですよ。まったくこれが政治の極数なんですからね、さてと……餘り勿體ばかりつけないでお話しませうねハ……、つまり我國の政治組織はね、中央政府と自治體の市町村があるだけで、縣廳や郡役所は勿論ないのです。そして中央政府には、宮内、外務、陸軍、海軍、司法、文部、農務、工務、商務、逓信、大藏、内務の十二省があつて、各省直轄の支廳を各地に設けて、他の官廳に關係なくその事務を行はれてゐるのです。それから、徵稅なども、舊社會のやうに國稅だとか地方稅だとかの區別がなく、一切政府から取立ることになつてゐるのです。例へば、奢侈品稅を徵收するには、商務省がその商店で賣捌くものに稅金をかけ、その賣上高から引去つて大藏省に引渡し、所得稅は國立銀行から支拂ふ公債利子の中から引き去り、私有貯金に對してはその預金利子を拂渡すときに引き去ることになつてゐますので、舊社會で最も困難とされてゐた徵收には何等の手續も面

倒もありませんよ。つまり一國一稅の方法でやつてゐるのです。しかし、勿論市町村は自治體ですから、其地限りの事務のために僅少の徵稅はしますが、むかしのやうに人民の私業がないので譯はない話ですよ。そして、土木や治水などにしましても、大部分を政府からしますので、市町村での僅かにその自治區内の下水道や小道路だけやれば良いのです。それから、何んだか話が前後しましたが、稅源は二種しかありません。その一は所得稅で、公債利子の所得や年金や給金その他の收益に課するもので、その二は酒や煙草や絹織物その他の奢侈品に關する間接稅なんです。そして大藏省の事務としては、政費一體の振割りや公債の元利拂ひ、國內資本の平均を圖つて、より各事業の圓滑なり發展を期するなどのことをやつてゐるのです」

金尾が少し頓狂じみた聲をあげて

「それは末の問題ですよ、そんな行政事務なんかより立法行政兩部の權衡とその組織を御説明願ひます」

「金尾さんはだいぶ政治に興味をもつてゐられるやうですねハ……まあそんなにおせきなさるなよ。

第一、我國は立憲帝政なんです。帝王は常によく民意を容れられて、民の心は君の心、君の心は民の心として、開闢以來君民の間は恰度一家の如く、帝室は宗家で人民はその分家といふ特殊の關係

ではあり、それに、歴代の帝王がみな聖明なので國民は慈父のやうに仰いでゐます。そんな風です
から立憲帝政がうまく行はれてゐるのです。そして我國の立法組織は直議制とを兼ねたもので……」
金尾がいよ／＼頓狂な聲で

「直議制なんて一體どんなんですか？」

「なか／＼御質問が急ですな、それはつまり代人を選んで議せしむるのでなくて、國民が直かにその決議をやることなんです。一體我が議員は國內七十餘州から一名づつを選出してその任期を五年とします。そして議員は常設なんです。そして一國の重要事については議員は單にそれを討議するに止めて、その決議は、議題を全國の町村に交附し、町村民はそれによつて熟考して各自に可否の投票をします。そして各町村ともそれを纏めたものを議員に送るので、その結果多數決となる譯なんです。それにまた、然うしてためしの便宜上各町村に顧問員三四名づつを置いて、電信や電話で政府と人民間の交渉の便を圖つてゐますので、重要事件は國民の直議直決とし、その他のことは議員の決を用ふるといふ制度なんです。議決を帝王に上奏して後、或は再議を附せしめらるゝことも勿論あるのです。それから、議員は必ずしもその州在籍のものに限られてゐるではありませんが、州民の利害を代表する徳義上の責任がなければならぬのです。でそのために所謂土地代表の必要も生ずる譯なんですよ」

「では一院制度なんですか？」

「然うです。しかし、行政部に顧問府がおりましね、社會的經歷のある者や大資産家或は貴族などの中からその議員を勅任することになつてゐるので、つまり、昔の貴族院を立法部から行政部へと移したものです」

「やはり貴族もあるのですか？」

「社會に功勞のある者の表彰法として、國民は金員か記念章などを送つてそれを優遇してゐますが、貴族といふ名稱は皇室の待遇のことで、普通人民の權利を侵害する特權はないのです」

「それでは、各生業を掌る農工商の各省の長官が非常な威權を揮ふやうな弊を如何です？」

「今のやうな社有ではそんなことはあらう筈はないのです。何故ならね、昔のやうな權勢の利用は贈收賄沙汰なんかは、つまり萬般の事業が人民の私有だつたので、それに利益を得やうとして行れてゐたのですからね、第一そんなコンミッションなんかを使ふ人が有ませんからね。それからね、省内の役員を採用するにしましても、みな嚴正な試験が行はれてゐますので、その間に情實なんか挟まれる譯はありませんよ。そして役員の大多數は下級の事務から腕で叩き上げた實力の人を使つ

てゐますし、議員には偉大な弾劾の権力がありますので、不評判なものがあれば、輿論の攻撃に先つて帝室は直ちにその任命更迭の権を行はれますから、そんなに金尾さんの心配されるやうなほどのことはありませんよ。省長官自身もまた僅かな收賄なんかで自己の體面を顧みないやうなものはありませんから——」

金尾は一寸頭を掻いて

「なる程、私もそれで九分九厘まで新社會に敬服しました。餘りお氣に觸るやうな質問ばかりして恐縮でしたけれども——」

「しゃくどうも御熱心なこと——」

「時に、さすがの金尾君の質問洩れを一つおたづねしたいのですが、國會の選舉被選舉の資格はどうなつてゐるのでせうか？」

「アデュールト、ソフレーヂ……廿一歳以上の所謂丁年に達した男子には選舉被選舉の權能があるのです」

「では資産や納税などの多少には一切關係がないのですか？」

「然うですとも、一體、納税なんかで選舉權の資格などを定めるなんて、そんなものは立憲制の論

が専制獨裁の時代を破つた當時の遺物ですよ。我社會では一個人を以て一個數……ユニットと見做して、何事でもそれから割出すことを例としてゐるのです。苟しくも社會に生存する男子はその社會の一員であるからには、何事にも發言權を有たなければならぬ筈です。昔は、社會の凡ゆる事を行ふには入費を要すから、入費を多く納むるものは多くの發言權を有つべき筈だと言はれてゐたのですが、資産の多いものほど多くの保護を國家から受けてゐるのですから、多く保護を受くるためにそれだけ多くの税金を支拂ふべきは寧ろ當然過ぎる當然で、つまり資産の多いものは受ける保護も多いので、それに應ずるだけの納税は至當のことなんですから、各人が一個の發言權を有つべきは明かなことですからね」

話は次から次へといろく續けられた。その中で特に興味のあるのは、國の掟として、男子は二十六歳、女子は十九歳以下の結婚を許されないことで、それは、それ以下の年齢では育児費が働き出せないからなので、普通の男女は十七歳から給料の三分の一を、結婚の年齢まで積それく積立てなければならぬのである。しかし、充分育児費などの見込のあるものは勿論自由に何時でも結婚して良いのであるが——。

九 社會組織

「なるほど新社會の組織は萬事が簡易であると同時に整頓してゐて感歎の外ありません。しかし、農工商業などがみな國家の手に歸してゐる以上、貨幣などの必要はなく、たと國家の引換手形だけで済む譯でせうにね」

と田美野は言つた。

「いや、たとへ凡ゆる事業が國家の手に在るとしても、理財なんかは自然の天則があるものでし、その切手を偽造されたり、また諸物交換の標準を定むるためにはやはり圓とか錢とか一定の名稱をつけなければなりませんから、紙幣をつくつて、それを手形のもりで通用してゐるのですよ。でないと、勞力の交換や物の價の目安がなくて不便ですからね」

と老人は答へながら新しいシガアに火をつけ、そしてなほ話し續けるのである。田美野はそれをうす／＼耳にしてゐた。といふのは、新社會と自國との比較を試みてゐたから……、否、寧ろ自國を批判しつゝあつたから——。その主なことだけを記さう。

新社會に於ては、殆んど通貨を用ふるの必要がないといふ。しかし、海外貿易をするので正貨は充分にあるといふことである。そして、紙幣と正金との相場の均衡には良くその法を講じられつゝある。即ちそれは、均衡を破つて多くの正金が國外に流出すれば紙幣の引換をそれだけ下落させ、従つて正金の價は高まるのである。そして商務省の店で舶來品はそれだけ價を高め内地品はまたそれだけ相場を下落する。外國の商人は輸出品の買入に着手してその本國からの注文も亦直ちに來る。然うして輸出が増して輸入が減じたときに紙幣と正金との相場は平均するのである。また正金の減じただけ通貨の高を減するなどの方法も講ぜられる。つまり國家の手形を正貨として、正金を副貨とするといふ特異な社會となつてゐるのである。

それから、海外貿易の變動のために蒙る新社會の生産界の打撃を免れるためには特別公債十萬圓をもつて、それを調和することにしてある。と同時にそれは需要供給の伸縮を圓滑にする効がある。そして、その十億圓のうち五億圓は正金で貯へ、他の五億圓は輸出品のストックとしてある。

國內の金利は何を標準とするかと言へば、諸生産品が然うであるやうに外國市場のを目安としてゐるのである。

また、一個人が一ケ年に多額の利子を受取る大富豪には、その過半を公債證書で交附する制度と

して、不規則に國內の資本の海外に流出することを制限する一方法とされつゝある。

田美野と金尾とは、老人の青壯年時代を知りたくて堪らなかつた。で、彼等は庭の掃除をしてゐる下男を捉へて二言三言の世間話の末にとろ／＼質問を發した。下男は一寸頭を傾けて

「さあ……私も人から聞いたわけですけども、何でも今の世の中になる前は未だ血氣盛な頃で、随分活躍されたものださうでしてね、社會を新組織にするといふので演説や議論で世間をあばれ廻られたといふことです。ですから我國でもなか／＼有名な方でして、議員にも推されたことがあつたさうですが、何故かそれを受けられなかつたといふことです。しかし、政府の顧問府には随分久しくゐられて、この五六年前に辭職して樂隠居となられたのです」

「然うですか、それにしては一向御來客がないやうですが——」

「それはね、何しろもう御老體なものですから、のべつに來客があつては困るといふところから一切自宅での面會は謝絶されて、毎日時間を定めて懇意な方と組合の俱樂部で二三時間位面會されるのです」

「然うですか、して、このお國には創業局とかいふものがあるさうですね、如何です、近頃妙案がありますか？」

「駄目です。しかし四五年前に千圓以上の年金は保險づきといふ程のを提案したのですが惜しいことをしました……」

彼はさも口惜しさうにして語り続ける。それは、何でも市内電車の乗客が切符を用ゐてゐるのが無駄なやうに思つたので、市内民一般から軽い税金を取立てゝその一切の經費を拂ひ、市民は無料乗車とすることだつた。だが、それは既に創業局に申出た者があつて、目下その實行工夫中だと主人から聞いて落膽したといふ。なほ橋のことについても彼が話さうとしてゐる矢先、主人の歸宅が知れたので別れた。

彼はまもなく主人の居室へ行つた。そして新社會の新計畫などに就ての説明を求めた。市内電車の薩摩守が近き未來に實現さるのだからことを下男から聞いたといふことを皮切りとして。

老人は微笑しながら

「市街電車の方はもう既に實行に近づきつゝあるのですが、そればかりではなく、全國の鐵道および大汽船なども薩摩守の出来るやうにして、用事のある者は勝手に何處までゝも行けるやうにするやうにしきりと研究されつゝあるのです。と言へば、用もない乗客が激増して仕方がないだらうと思はれるか知れませんが、名所舊跡の遊覽などに出かける者として然う澤山あり得べき筈がありません」

んよ。第一、各人がみなそれ〴〵の業務をもつてゐるのですからね。たゞ日曜や祭日などだけ相當の料金を取ることすれば乗客過多の弊を押へることができ、また平日でも、先乗料を納めたものは他人に先だつて乗せることにすれば良いでせうからね。また、電信、電話、郵便なども無料とする日もさまで遠い未來ではないでせう。且つまた、各人の衣食住も、限度を定めて支給することも目下考案中です。勿論それには、勞金のうちから差引くこととして、富豪などの義損などをこれに當てなどすれば、たしかに各人の幸福を増進することが出来ますからね。それから、丁年以上の婦人にも發言權を與へることゝなるのでせう。現にそれが實行されてゐる國もありますからね。兎に角日一日とその必要を感じられつゝありますから、何れ近く實現されるでせう」

「なる程、より進歩した良い組織や施設が生れる譯ですな。してその他には？」

「そんなに矢つぎ早に質問ばかり浴せかけられたのでは流汗瀧をなす有様ですよハハハハ。まあその位にして置きませうよ。この位實現されるれば先づ結構でせうから……いや、餘り一時に多くの問題を持込んだのでは不消化を起したら大變ですからねハハハ」

金尾は腕を拱いて瞑目してゐる。田美野はかなり興奮した面もちでさらに質問する。

「私どもは、實はお恥かしながら社會主義を研究するどころか、赤禪々に申上れば不具戴天の敵と

見てゐたのです。たゞ、人の話を聞いて、一しよに働き一しよに同じ家に生活することだとばかり思ひ込んでゐましたが、決して然うではないのですな」

「それは充分社會主義を研究しない罪なんですよ。今貴殿の被仰るのは、社會主義の別派で、本とウのそれとは聊か趣を異にしてゐるのです。我が社會主義は、人々が一家づゝ別居するとも一大家屋に同居するともその人の好みや場合によつてどうもなるので、勿論私有財産を認めるのですから、自ら前者とは違つてゐる譯ですよ」

「では、本とウの社會主義の大眼目ともいふべきものはどんなものですか？」

「今の歐米諸國の社會主義各派の間にも種々の小さな差異はありますが、その所謂大眼目とする所は、人類社會はある少數者のために造られたのではなく、民衆全體の利益といふことを目的づけられてゐることゝ、隨意競争……極端な個人主義から生ずる弊害は、國家社會の手を以て禁遏すべきものだといふ二つの簡單なものなのです。で、我社會のやうに土地や資産を公有とするのは目的のための一の手段に過ぎないのです。つまり、そんなものを私有として置いても、その本義さへ行ひ得らるれば立派な社會主義なんです。」

「理論としてはなか／＼立派なもので、人生の幸福は實に多大なものです。たゞ懸念する所は、各

人が勞力を厭つて安逸を貪り、世を擧げて次第に遊食懶惰なものを生ずる傾向となり、その結果、社會の生産力を減じて却つて不幸となりはしないかといふことですがどんなものでせうね？」

「それは至極く御尤もな懸念ですね、しかし、はじめは充分その制裁を嚴重にしましてね、怠惰な横着者をば嚴罰するのです。また、甚しい惰け者は、收監して就役させ、或は農具、種穀、家屋などを給して邊鄙な未開墾地に送り、自ら怠れば自ら饑ゆるの罰を與へたものなんです。またその一面には、教育上に於て自ら勞し自ら食することが人類の正義だことを教へたのです。その結果として、今日では制裁なんかの用はなくなつてゐますよ」

老人は茶を一口飲んでなほ語り續けた。その大略はかうである。

問題の八時間勞働制は、體力や技倆等の差異によつて、充分その實行を見得られないため用ゐられてゐない。しかし世界の文明諸國を通じて何等かの標準を見出して共通の規定としたら實行されやうといふ。その理由は、然うでないといふ他國の生産のために國際の市場に於て負けを取るからだ。

そして社會主義は、世界平和の保證者である。何故なら、各國の社會に大多數を占むる勞力者が相聯合すればその賃勞を一定してその生活を向上せしむることを得るから。更に言へば多數

の民衆の意見はその國の和戰の決に大影響をもつから——。そして、將來、世界の平和を來らすための道行に二つある。それは萬國平和協會で、その目的は慈善に源を發し、人類の相争ふことをやめやうといふので、他の一は、列國々勢の均衡を保つことなのである。しかし、この二つは實際に應用され得るか否か頗る疑問である。が、勞力の限度を一定する國際條約こそ、はじめて世界平和の保證者とすることが能きる。

とは言へ、不加入國がないとは限れない。しかし、それには重税を課して……即ち不同盟國からの輸入品に對して、勞金の一定限度までの重税を徵收するのだといふ。

老人がさらに言葉を續けやうとするのを遮つて田美野はいふ。

「今までいろいろお話を承はつたので、大いに得るところがありました。私は今一つの大きな疑問をもつてゐるのです。それは弱肉強食は動かすべからざる天則なることを禽獸蟲魚に到るまでが明かに裏書してゐるのに、あなた方は人間社會に於てのみその天則に反かうとされるやうなものはありませんか？」

「被仰通りだとすれば、人類は先づ天賦の腕力の強弱を以て……つまり暴力を以て他人の物を奪ふことから始めなければなりません。而し各國とも法律や警察權を嚴にして弱肉強食を防止

してゐるではありませんか。又假に一步を譲つて、優勝劣敗が天地の大法則としても、全社會の力をもつて小數の暴權者を制し、法律をもつてその暴行を禁止し得るとすれば、言ふまでもなく腕力者は劣敗者であり、社會全衆は優勝者です。で、少しも天則に悖らないのみならず、それこそ本と云ふ所謂優勝なんです。また、禽獸等は、單獨の生活をして、差支のないやうに進化して居り、人類は合同の生活をするやうに出来てゐるのですもの、禽獸等をもつて人間の天賦を推斷するなどは亂暴なことですよ。一體文明は人類の力が天地の力に反抗することによつて益々進むもので、それを判り易く言へば「初期の天然」から「次期の天然」に進めば進むだけそれだけ文明に赴くもので、つまり天然が人類に附與した知力を利用して「初期の天然」を「次期の天然」に改むることなのです。そして、人類對物の上に於ける天然の變更の如く、人類相對の天然も變更するものです。暴力横行は「初期の天然」で法及び數を以て世の暴權を制するとは「次期の天然」であるとは言へ、決してそれで打止めの筈はないのです。つまり極度の隨意競争から生ずる害惡を防遏し、また一方に於て新教を布いて全人類の心を改善し、社會全員の幸福を増進するといふことは「次期の天然」の大目的……人類の大願望でなければなりません。人類對物の上に於ける「次期の天然」に入つた今日に於ては、人類相對の上に於ても然うなさなければならぬ理由ではありませんか、ね、田美野さん、然うでせう」

一〇 社會改造の方法

金尾と田美野とは、新社會の組織に熱烈な贊美の聲を發するやうになつた。と、同時に彼等はそれをその故國に行はうといふ勃然たる勇氣と強烈な抱負とを以て、善は急げといふので急に旅装を整へて老人に暇を告げた。それには今少し視察旅行をしたいとの希望もあつたので――。

「お別れしなければならぬとお名残惜しいですね。しかし、これから新社會を組織して同胞の幸福を増進されやうといふ大抱負……寧ろ天から下つた使命と言つて良い大責任をもつてゐられるのですから、今少し御参考となるやうなことを申上て屑くお別れませうね、何だか淋しくなりませんが――」

と老人はその笑顔さへも何となく淋しげにして語り出した。それはかなりながい時間を費したが、その要點はかうであつた。

――新社會の組織を實行するに都合の良いのは、餘りに貧富の差の甚だしくない、恰度彼等の國

の今日の状態位のところが良い時機であるといふ。新社會の組織は、つまり、全人類……凡ゆる邦國が必然的に到達すべき命數をもつもので、たゞ時間の問題なのである。人間社會は全社會の幸福を以て基礎とするといふ本義および土地や資本は遂に社會の公有に歸すべきものだとその手段は、如何にこれを拒否するとも結局は實現されずにはゐない筈のものである。換言すれば、社會主義は世界の大勢で、今や到る所の文明國で着々採用しつつあるものである。で、社會主義の利導を巧にすればその利益は老大で、それに反する時は大なる不幸を見るべきことが餘りにも明白で、熱心な個人主義の信奉者であつた。

英國の經濟學の泰斗ジョン・スチュアート・ミル氏ですら、その晩年には社會主義によつてはじめて自分は安住することが出来たと言つた程である。

兎に角、新組織の實行は焦眉の急に迫つてゐる。が、オイそれと實行はされ難い。とは言へ、貴國は先年立憲政體を採用した。時も他國のやうに革命や争亂などが見られなかつた程だから、その實行が案外容易だらうことを信ずると彼は特に力を入れていつた。

そして直ぐ言葉をついで——先づそれを行ふには、その社會が完全な本體を具備しなければならぬ。すなはち社會の全員が學つて社會の凡ゆることに關して發言權をもたなければならぬ。そし

て、新組織は社會の全員が自らそれを監督し自らそれを爲すことを本義とする。

新社會に入るにも勿論階梯を踏まなければならぬ。でないといふ紛亂を生ずる恐れがある。貴國で今差向き實行し得らるゝだらうと思ふのは、多數人民の生活状態を改善して極貧者の増加を豫防すること、工場法を定め、負傷保險法を設け、各人とも疾病の時には食料や醫藥を得ること、地主と小作人との合議の場合、土地を國家に買上げしめて國有となすこと、農民には肥料や農具や種穀などを、漁民には漁具や船具を、勞力者には器具機械など、兎に角各人の生産に従事するための必需品を國家から貸つけ、また取立つる制を設けること、勞力者の集配取扱所を設けて全國各地を通じてその需要供給を平均し、彼等をして職を求むるに窮せしめぬこと、簡易教育の法を設けてその知識を開發することなどである。

なほ、誤らざる社會主義を行ふには、第一に能ふ限り個人の所有權を重んずること。第二に大資産家個人を嫉妬しないことを心がけねばならない。といふのは、大資産家の生じたのは言はず社會の不完全な組織のために富籤にあつたやうなものであるから——。そして第三には、大資産家自身は、然うした原因によつて自分に富を興へたことを思ひ、全社會を利する凡ゆることに對して、相應の推讓を心掛くるやうにしなければならぬ——と。

* * * * *

二人は名残を惜しみつゝ、老主人や小間使、下女や下男に送られて玄關まで來ると、そこで改めて挨拶を交した。互に再會を約して、いよく辭し去らうとして履物を穿きつゝある時、

「ぢや御機嫌よく……」

と老主人は温い言葉をかけた。田美野は挨拶しやうとて少し振返り氣味にした。と、そのはづみに彼の足は玄關の石段を踏み外した。

「アツ」

と叫ぶと、これはしたり彼は書室の中に寝てゐたのである。曉の廓公は鳴いて過ぎたが、四邊はまだ眠りから覺め離れてゐない。枕頭の置時計がチツクタクと歩みを刻んでゐるのが妙に頭にひびく。

眞樂主義經典(四)

眞樂とは兩全の眞をいふなり。夫大化流行し、陰陽相和し萬物發生するは是天地の樂なり。根葉相通じ

花實繁茂するは草木の樂なり。男女相和し子孫榮ゆるは人倫の樂なり。農夫稻麥の爲に糞培し、稻麥をして快樂を得しめ、然る後秋實る得て以て樂しむは大本の樂なり。君大仁を施し、下民歡喜して徳を報ずるは聖人の樂なり。貸す者は無息の財を以てし、貧人の苦を除き、共に樂しむは是貧富兩全の樂なり。凡そ兩樂にして片ならざるもの、豈仁人濟世の眞樂にあらずや。今行ふ者なしと雖も、數百歳の後、眞樂菩薩の興るあらは、則ち片樂を除き眞樂を以て衆生を濟度し、三千世界をして悉く極樂に歸せしめん。

(二宮尊徳)

第三編 トマス、モアアの理想郷

一 奇遇

私が、カスバート・ダンストール氏と共に辨理大臣としてフランダースのブルージュに行つて彼國の委員と屢々協商を重ねてゐた頃のことである。

私は閑暇を利用してはよくアントワープに行つて遊んだものだ。そしてその地の名士たちの來訪を受けて談笑するのを常としてゐたが、その多くの人の中で、ピータ・ギルスと呼ぶ一紳士——博學で、多才で、品性が高潔で、快活で、なか／＼談話に巧妙さをもつた——の來訪を殊の外喜んだものである。

モウ何しろ國を離れてから四ヶ月の日時を閑してゐるのだから、何彼につけて國に残した妻子の

ことを思ひ悩む私である。さうした折にもギルス氏の訪問を受けると急に晴々しい氣分になるを常としてゐた。

或日曜日のこと、私が「貴婦人の教會」と銘うつた、建築の古雅なそして多くの會衆をもつ教會の禮拜式に列しての歸るさ、圖らずも新らしい友のギルス氏に會つた。彼はその時一人の男を伴つてゐた。その人はモウ相等の年配らしく、その顔は黒く日に焦けてゐて、長い鬚を蓄へてゐる。そしてその肩の上に無造作に上衣をひつ懸けてゐる。その態度と言ひ風彩といひドウしても航海に従事してゐる人らしい……と私は思つた。

ギルス氏はロク／＼挨拶もしないで「實はいまこの紳士をお宅へお連れ申す所なんでしたよ」と言つて例によつてニコ／＼してゐる。「ア、さうですかヨウこそ……」と私も笑顔で答へた。

「實はこのお方はね、久しい間世界の總ゆる國々の隅の隅まで遍歴され、各國の社會の表裏に透徹した視察を遂げて、多くの珍聞奇話を齎らしてツイこの程歸國されたものですから、そんな話のお好きなあなたの新しいお友達としてお伴した譯なんですよ」と、ギルス氏はそのモチマエの快活なそして朗かな聲で言つた。

「ぢやないかと實はさう言つたやうな直感をしてゐましたが、さうですか、ドウモ御親切さまに……

「……」と私が言ふと、ギルス氏は軽く私の肩に手をかけながら、

「デモね、この方を普通の人と思はれたら間違ですよ、この方はね、その學識と經驗とに富まれる點に於て、古のウリセス王さながらです。イヤ、古代の代表的哲學者プラトーンに比するのが一層適切でせう。何故つて、この方はね、ラフハエル・ハイスロデーと被仰つて、もとホルトガルの名門に生れられたのですが、富だとか門閥だとか言つたものを棄て、只管世界の知識を求められたのです。そしてその最も精通されるのは羅甸や希臘の語學や文學や哲學などです。そして莫大の財産をその兄弟に分ち與へて、アメリゴ・ヴェスプッチの一行に加はつて、航海者となられたのですが、四度目の大航海の時に、他の二十四人と共にギョーリキ國に滞在することゝされたのださうです。それは勿論一行の統領ヴェスプッチの諒解を得て……。その後この方は五人のギョーリキ人と共に新しい旅に發たれ、幾千里の海を航して、幾多の國々島々を視察された末、遂にタプロバ市に達せられて、それからカリキットに行つて、そこから歐洲行の船を見出して歸國されたのです。勿論、他の廿四人の者は「墳墓を有たぬ者は蒼空を以てその屍を覆ふ」とか「天國に達する行程は何れの場所からも同じだ」とかいふ諺をいつもくちづさんで、思ひ／＼に航海や旅行を續けてゐることだせうよ。何處の空にかね……」と老紳士を紹介して呉れた。

私はギルス氏に改めてその珍客を伴つて來て呉れた好意を謝した。

私とラフハエル氏とは互に初對面の挨拶を交すと、モウ舊友のやうな親しさがその間に流れてゐた。

私たち三人の新らしいそして親しい友達は、いろ／＼と楽しく打語らひながら私の家へと足を運んだ。

私の宿の後庭は、青く美しい芝生を以て敷きつめ、そしてさまざまの木や草花などが植えられてゐて、何となく氣が清々するところである。私たち三人はそのベンチに腰を下した。

二 意外の社會

間もなくして、ラフハエル氏はその長い鬚に掩られた口を開いた。それによると、ヴェスプッチが出立してから、ラフハエル氏と他の廿四人とはギョーリキ國に滞在してその市民と懇親を結んだ勿論、他に多くの例があるやうな危害などは少しも受けなかつた。否、却つて大いに歡待された。殊に國內に於ける偉大な地位と名望とを有つ某貴族（私はその名を忘れた）の庇護を受けた。そ

の貴族は、彼にその一行の探險に要する一切の費用を支出し、他國の君主に彼を紹介するなど幾多の便宜を與へて呉れた。

彼等は數十日間の旅行を試みた。そしてその間には、善政の布かれた幾多の都市を見、また赤道直下およびその附近の地方にある大砂漠を越した。その炎熱の甚だしさつたら殆んど形容の言葉を絶する程であつた。そしてその地方には猛獸や毒蛇が住んでゐた。またその住民の野蠻さつたら、それこそ猛獸などにも劣る程であつた。

が、熱帶國を離れるに随つて、氣候は溫和だし、草木はよく繁茂してゐるし、砂漠や不毛の曠野なども少く、禽獸にしたところで猛惡なものは少なかつた。

なほ進むと、再び多數の人口を有つ大都會と、その附近の豊饒な土地とそして富んだ人々の住む村落を見た。そして、各都市村落間など盛に商業貿易を營みつゝあつた。

彼等はしばらくこの地方に滞在して、人情や、風俗や、制度や、文物などの視察をすることゝした。

彼等はそこで殊の外歓迎された。といふのは、その地の船長や水夫などが何れも牙えた腕をもつてはゐて、潮流や氣候などに關する知識は豊富であつたが、未だ磁石を用ゆることを知らなかつたので、その航海は海上の平穩な夏に限られてゐたのを、彼等に磁石の用法を教へて四時外洋に出ずるを得させたがためである。

——こんな話を、ラフハエル氏は巧な身振や表情を以つて詳細に話して呉れた。そしてさながらそれを眼前に彷彿させた。私とギルス氏とはそれを熱心に傾聴してゐた。が、よく世間で言ふ四ツ目小僧だとか、一ツ目小僧だとか、大人國や小人國、さては女護ヶ島だの食人鬼などのやうな怪談はしなかつた。私たちもそれを敢て質問しやうとはしなかつた。彼が喜んで語り、私達が熱心に質問したことは、主として世界各國の異つた人情、風俗、制度、習慣、法律、政治、或は宗教、教育などに關すること、實に詳細を極めたものであつた。そしてそれは悉くと言へやうまで新しくそして珍らしいものであつた。

三 自由の人

私は、ラフハエル氏の博學さ多聞さ識見の卓越さに感嘆せずにはゐられなかつた。ギルス氏もさうらしい面もちしてゐたが、しばらくして彼はトキにラフハエルさん、あなたは國家の宰相となつ

て國民の幸福を圖つておやりになつては如何です？ 何處の國王だつて、あなたのやうな博學多才なぞして卓越非凡な見識をもつて而も世界各國の政治、法律、經濟、その他諸般のことに精通された方を得て國政を諮ることを願はないものはないでせうし、あなた御自身もまたさうすることによつてその抱負を實行することを得らるゝし、多數國民にとつても最も大きな幸福となることと思はれますから：。」と言つた。するとラフハエル氏は苦笑を洩しながら

「國家のために盡せと被仰るのですか、しかし私はモウそのために相當のことをしたつもりです。ソリヤ誰だつて權勢を希はないものではありませんさ、世の總ての人は、老朽してか或は他より餘儀なくされてその腕を揮い得ぬやうになつて始めてそれを棄つるのを例としますが、私は自ら後進のために途を譲つたのです。しかも私がやつたのは血氣盛の頃でした。今となつて私は身を國王の側に獻じてその羈絆に服することを好ましく思はないのですからナ」と言つて微笑してゐる。

「デモ、宰相になつたとて必ずしもあなたの自由を束縛さるゝことの要はありませんまい、たゞ貴方の信ぜらるゝ儘に、その蘊蓄を傾けて國王を指導されるればそれで良いぢやありませんか、貴方がさうされることによつて、國王をはじめ一般國民も多大な幸福を得られるし、貴下御自身はそれによつて富貴とされるから：。」とギルス氏が言つた。するとラフハエル氏は手を横に振つて

「富貴なんかといふことを私は耳にしたくないのです。私は一個の自由人として、心の儘に考へ、言ひたいことを言ひ、また自分の欲する所に向つて進むだけのことです。こんな大きな自由をもつ人は國中の貴族中にも極めて尠いでせう。私は私自身のことについてはこの自由人であるといふこと以外に何も希望はありません。國政に與らうと日夜腐心してゐる人はザラにありますから、ナニも私や私に類する二三の人が國王の左右に侍らすとも、國王も國民も敢て不幸だとは言へませんよと言ふ。そこで私が

「貴方が、權勢や富貴を念頭に置かれたいといふ高潔の心事は充分に分りますが、世を擧げて名利を獲るに汲々たる當世に於て貴方のやうな見上げた人物を見出すのは、それこそ砂漠の中に薔薇の花を見出すよりもヨリ以上の珍らしさです。私はこの意味に於て、世の帝王や貴族に優る尊敬の意を貴方のために表します。私の考に誤りがないとすれば、人は各々その天賦に隨つて人生に貢獻しなければなりません。この意味に於て、貴方のやうな博學で多識な、そして非凡の見識と多くの經驗をもたれる方は、社會的に實に重大な責任を負つてゐられるのです。で、獨り世間離れして風月を友としやうなどゝされることは、貴方の天職に背かれることではありませんまいか？」と、一本お面とやつて見た。するとラフハエル氏は軽く笑ひながら

「それはね、あなたの性質が純粹で無垢だから起つた二重の誤解のためです。一體あなたは私を買ひかぶつて被在るのです。如何に卓越した見識を有つ人でも、それを實現するのは別問題で、それには非凡の技倆が要るのですが、生憎私にはその持合せがないのです。で、私が國王の顧問や宰相などになつたとて、そのために私の自由を失つて私の心を苦むるだけに値する益を社會に與へることが出来ないのです。それから、世の帝王などの常に念とするのは殆んど全部が軍事上のことで、ドウしたらよく平和を保たれるか、またその國の品位や徳性を進歩させて國民の幸福を増進し得るかといふことなどは考へないで、ドウしたら他國を征服し侵略して領土を擴張し得るかを考へてゐるのです。そればかりではなく、帝王の左右に侍る者はすべて、賢明過ぎる人か、でなければ自ら賢明だと信じきつてゐる人ばかりなので、容易に新參者の意見に耳を傾けやうなどはしませんが。一體、鳥はその子を以て最も美しいものと信じ、猿はその子を以て最良のものと同じ、人は自己の意見を以て最善のものと同じと信ずるものです。また、一度權勢富貴の地位にありついたものは自然に保守的の傾向を有つてゐて、現在の制度や組織を改革することを非常に厭ふのです。ツマリこの弊は、祖先の遺法であると同時に古來の習慣なのです。そして、若し新しい意見などを立つるものがあると、彼等は擧つて一も二もなくそれを冷評して「ドウして吾々が祖先に勝ることが能きるものか」との一語を以て葬り去るのです。論より證據ですよ、貴方の本國の英國に於ても、常識上から直きに判斷し得らるゝ幾多の弊害……迷信や誤謬や過失、或は愚政や悪政などがザラにあるにも拘らず、それが改革などはそれこそ百年河清を待つと同じで、殆んど不可能事として抛擲されてゐる有様ではありませんか？イヤはなはだ失禮な言草だけれども……」

私は、アベコベにお面と參つてしまつた。殊に我が英國の欠點を例に擧げられたものだから、グウと參らざるを得なかつたのである。それと同時に、ラフハイル氏が英國のことをよく知ることに頗る意外の感を起した。

四 罪惡の絶滅法(一)

私はラフハイル氏に向つて、英國を訪はれたことがあるかを問ふてみた。すると彼は一寸その笑顔を見せて語り出した。それによると

——西部地方の人民が國王に對して謀反を起して、互に殺戮と慘酷の限りを盡してゐたのがヤツト平定して間もない頃、五六ヶ月間滞在したさうである。

そして、カンタベリーの大僧正で大法官を兼ねたジョン・モルトン氏から大いに歡待されたといふ。(ジョン・モルトン氏は、その權勢ある地位よりも、その思慮と徳性との大なるために世間から一層尊敬されてゐる人で、その身體はあまり屈強ではないが、それでゐて相當の老年ながら腰は少しも曲つてゐないし、その顔は柔和なそして威嚴を以て輝き、その談話などは親切で熱心で教訓に満ちたものである。そして、法學に關する造詣の深さといつたら測定の範圍を越してゐるし、その機智頓才なども他にその比を見られない程である。ツマリ彼はその天性に於て優れてゐる上に、幾多の學識と經驗とを以て修養した結果として、今日では國王の厚い信任と國民の多大な信頼とを贏ち得てゐるのである……と、ラフハエル氏はギルス氏のためにモルトン大僧正の人となりを話した) 彼は或るときその大法官に招かれてその宴席に列したことがある。そこには二三の法律家があつて、近いうちに二十人の重罪犯人が一時に死刑に處せらるゝが、それは主として窃盜犯だと言つてゐた。そして大僧正の判決に口を極めて讚辭を呈してゐた。大法官はそれに對して「コウまで窃盜犯人を嚴罪に處するのにも拘らず、この社會から跡を斷つことの出来ないのは誠に以て残念の至りだ……」と嘆息を洩したので彼は大法官に向つてその意見を述べた。

それによると、社會に盜賊の跡絶えないのは、寧ろ當然以上の當然で、少しも怪しむに足りない。一體、窃盜を罰するに死刑を以てするとは餘りにも酷に失するものである。そして例へ如何に酷刑を行へばとて、それでその犯罪を滅しやうなどとは餘りにも思ひなしのことである。何故なら、萬民に生活の possible の途を與へなければ、將に餓死を餘儀なくされた者にとつては死刑だとして決して恐るゝに足りない。盜みしても殺され、盜みしないで死を免かれない。しかも、盜みしてその罪跡を發見されるのは極めて稀であるのに、盜まなければ餓死に迫ることが必然である。人民をしてかうした悲惨な境遇に沈ませて置いて、窃盜犯人の跡を絶たうなど、は注文する方が無理を強いる……といふよりは寧ろ馬鹿な沙汰である。

それなのに、世界の政治家といふ政治家達は、人の子弟に善を教ふるよりも寧ろ惡を獎勵する最も愚な教育者に似てゐる。何故ならば、窃盜の跡を社會から絶たうとするには、それに嚴刑を課するよりは、寧ろ國民全部に生活の途を與へ、彼等をしてさうした犯罪を餘儀なくする境遇に陥らしめぬことを以て、その絶滅策の第一義的のものとする……。

——マア、さつとこんなことを言つたださうである。すると大法官は言葉を挿んで

「國民に生活の方便を與ふることは素より必要です。私等も決してそれを等閑に附してゐるのではなく、既にそれ／＼適當と認むる方法を講じつゝ、あるのです。例へばね、國民の取るべき業務とし

ては、農・商・工業その他諸種の作業があるのです。で、彼等自身が、怠惰な日を送つて自ら好んで貧困に陥らない限りは、決して生活に窮するやうなことはない筈ですよ」と言つた。ラクハエルは直ぐに言葉尻をひきついで

「とは被仰ても、爲政者の責任はそんな馬鹿な、不徹底な、子供だましのやうなものではない筈です。現社會には、國民の大部分をして赤貧に陥らしむべき幾多の事情があるではありませんか、論より證據ですよ、御覽なさい、ブラツクヒースの戦争やその以前に起つた佛蘭西戦争のために、その明を失つたものや手足を断たれて不具者となつた者が頗る多いが、彼等に對して國家から與ふる恩給は、彼等の現在……殊に晩年を養ふに餘りに不充分です。これもたしかに貧困の一原因ですけれども、その額は何程にしたところで、兎に角保護を與へてゐる以上、私はそれに對して敢て言ふ所はありませんが、私が言はうとするのは、貴族や富豪と稱する遊食の輩のことです。御覽なさい、彼等は恰も蜜蜂の雄みために自分は何もしないで、たゞ人に土地を貸して、それから滅法に高い地代を徴収するので、借地人たちは彼等の奢侈をなさせるために常に貧苦のドン底にゐるを餘儀なくされてゐるのです。而も彼等はその周圍に多數の従者を蓄へて、それらを何等の生産的事業に従はせないで、つまり、これ等の遊食階級者は、多數の労働者たちの生産の結果を以て奢侈の

限りを盡しつゝ、あるのですから、國に貧民をなくしやうにも出來得られないのです。それに又是等多數の従者なども、何時解雇されるか知れないのですが、平生主人の髻の塵を拂ふことしか知らなかつた彼等は忽ち饑餓に瀕しなければならぬ運命なのです。私が申上るのはかうした、めに幾多の窃盜の卵がつくられつゝ、あるといふことです」

五 罪惡の絶滅法(二)

大法官はその言葉は遮つて、

「我國の貴族等が多數の不生産的な人物を養つてゐることは非難されますが、彼等の多くは一旦緩急ある場合に干戈を執つて奮闘する所謂國家の干城なのです。農工商人等は、平生から武藝の修養もないばかりでなく、肝腎な勇氣といふものを欠くために兵士として何の用もなさないので、平常から不生産的な人物を養つて置くことは、國家の存立上止むを得ないことなんです」といふ。ラクハエル氏はまたさらに

「なる程、或は被仰通りだか知れません。しかし、さうすれば、窃盜は軍事上の必要から來る當然

の結果と言はねばなりません。國家が無数の不生産的人物を有する結果は、二重の方法に於て國家に貧民の増加を圖るのです。で、貧窮の極、彼等が心ならずも窃盜を犯すに至つたものとすれば、同情に堪えないことではありませんか。佛蘭西などはモット憐はれむべき状態にあるのに見れば、貴國の制度は各國共通のもので、敢て貴國のみを非難すべきものではありませんが、私はそれ以上に、貴國特有の原因も認め……」といふ彼の言葉をひつたくつた大法官は、眼を輝かせて、その何ごとであるかを問ふた。

彼は話題を一變して語り出した。それはかうである。

——緬羊は、凡ての動物中最も柔順であると同時に小食なものと聞いてゐたが、近來英國に於てはそれが猛獸の如くに暴れ狂ひ、而も驚くべき暴食となり、田畑、原野、都市村落を食ひ荒し、遂には人間をまで食ふだらうと聞いた。が、實際に觀て聞きしに優る有様に驚いた。(當時牧羊熱が、旺盛で、貴族、富豪、僧侶等が凡ゆる土地を賣收して牧羊をなしつゝある様の比喩である)實に言語に絶する農民の悲惨さである。妻子眷族相携へて路頭に迷ふ農民等……あゝ彼等は如何になるであらう。それは敢て言を俟つまい。なほ數へ上れば幾らもの原因があるが、兎に角爲政者が窃盜を嚴刑に處すのは、川の源を塞がずして河口に於て堰き止むべくする不條理と徒勞とをなしつゝある

のである。

ラフハエルは急に言葉を改めて

「で、彼等を嚴刑に處するに先ち、まづその禍根となるもの絶滅を圖つて、世に一人も飢餓に泣く者をなくしなければなりません。即ち貧民にしる貴族にしる、或る何かの業務に従事させ、殊に貴族や諸侯に不生産的人間を養はせないことにし、教育を普及させて職業を與へ、富豪や貴族に土地の賣收を禁ずると同時に、また、彼等の市場を壟斷して物價を騰貴せしめることを禁じて、能ふ限り租税を輕減し、その他幾多の取るべき而も緊急なものが非常に多いのです。それらをすこしも顧みないで窃盜を嚴罰に處すのは、陷穽を設けて可憐な人民を殺すのと同然です」と言つた。

大法官は小首をかしげたまゝで

「なる程、しかし、窃盜犯人を死刑に處すことを失當とすれば、その犯人を如何かに處分したら良いのです？ まさかそれを不問に附するやうなことはないでせう？」

と反問した。彼はその答へとして

「一體、人命といふものは全世界に換え難いものですから、僅かの金錢や財産のためにそれを奪ふのは實にその當を得ないものです。その處分法としては、それらの犯人を、ある一定の期間、公共

の家屋内に拘禁して、嚴重にその髪を刈り、一定の制服をつけて、毎日或る何かの勞役に、服せしむることゝすれば良いと思ひます。」と強く言つた。

彼はなほ幾多の弊害を指摘してその救済改革などについて説いた。大法官は或る部分には賛成しまた或る部分には反對した。そして遂に一つとして實行されなかつた。

ラフハエル氏は言葉を改めて

「兎に角ね、比較的になほ自由なそして進歩主義を有つ英國に於てすら、そんな風で外來者の意見は容易に採用されません、ですから、專制で、侵略を事とする佛蘭西その他の諸國などでは到底社會改造の意見などを省みないだらうと信じます。それこそテンで見向いても呉れませんよ。一體あなた方は考がお坊ちゃんだから困りますよハ、ハ、ハ、」

私たちは苦笑を洩すよりなかつた。

ラフハエル氏は更に言葉をついで、その理想的國家とは如何なるものなるかを述ぶることゝなつた。

六 財産の公有(一)

ラフハエルは面を輝かして私が英國の大法官に述べた改造に關する意見は、ツマリ現社會の制度を基礎として、その甚しい弊害をもつものだけを除去しやうとするので、所謂姑息論です。私の熱望する所は社會の根本的改革なんです、かうした綱縫策すら採用されない世の中ですから、私の理想を述べたとて、徒らに世の嘲笑を招くに過ぎないでせう。しかし、あなた方は相當見識を有たれる方だから簡單にお話しませう」と言つて語り出した。それはザツト次のやうなものであつた。

—私が見る所にすれば、各個人が財産を私有する所謂黄金萬能の組織では、完全な政治は到底行はれ得べきものでない。と同時に、社會の平和も繁榮も望まれない。富の分配が不公平だことは、何よりも甚だしい弊害をもつものである。私はこの點に思ひ到る毎にユートピアの善制度を相起するが、ユートピアでは、法律はたゞその大綱を規定するに止まり、繁縷な法文はないが、國內は實に靜謐によく治まり、未だ會て貧民なるものはない。又、窃盜などの犯罪は勿論、財政に關する爭論などはない。その主要な原因は、財産が全國民の公有で、各々その必要に従つて分配される

といふ、實によく富の分配が行はれてゐる國である。

私が巡歴した諸國中、未だその財産公有の制度を確立せずして個人の私有に放任する所とは爲政者が最も苦心するのは、財産と生活とに關すること、詳細嚴密な法律を制定してゐるが、その効は殆どない。正當以外の凡ゆる手段……奸策を用ひて富を得べくする傾向を生じ、詐僞、横領、その他多くの弊害はその社會の到る所に充満してゐる。

抑々財産私有の制度より生ずる弊害は實に甚だしい。その最も大なるものは、一國の富の大部分を少數の貴族や富豪の間に分配されて、大多數の社會に大いに貢獻しつゝある國民は餓に泣きつゝあるのである。すなはち、貪慾にして卑劣なる者は大いに富み、高潔の士は赤貧洗ふが如き状態にある。

詐僞、窃盜、強盜、殺人等の罪惡の絶えぬのはそのためである。

これらの弊害を矯正すべく、世の立法者はしきりにその腦漿を搾り、古今の法律を研究して無數の法律を作りつゝある。が、それらは悉く姑息の手段たるを免かれない。

その根本的療法は、ユートピヤに於けるが如く、財産公有の制度を定めてその私有を禁じ、國家に於て各人に必要な土地その他の財産を給與して、何人もそれ以上の財産の所有を禁ずれば、如上

の弊害は根本的に除かれるものである。

ラフハエル氏は右のやうなことを熱心に説いた。

私はそれに反對するを餘儀なくされた。

「しかし、人が勞働に従事し或は事業を計畫して努力して行くのは、その所産を私有し、それと同時に無際限にそれを貯蓄し得られる目的があること、若し怠惰な日を送れば忽ち貧窮に陥るる根拠がある爲です。だから、國民がみなその財産を公有して大いに努力し勤勉しても、他に優る所有が不可能でありまた努力せずとも饑餓に陥らなるとすれば、自然と各人がその業に怠り勝となつて、その結果、社會の生産は非常に減少して、國家は必然的に貧困に陥るでせう。で、國富を増進して社會を向上せしむることは出来ないでせう」

と私が一太刀きりこんでみるとラフハエル氏は微笑しながらいふ。

「その御意見は尤もなことです。しかしそれは私の話が單純過ぎたがためです。若し御都合だつたら私と一しよにユートピヤにおいでなさい。そして四五年間をそこで費して、法律や制度やその他諸般のことを研究し視察したら、貴方も屹度私と感を等しくされるでせう。今こゝでお話しても容易にお判りにならないでせうから……」

すると、ギルス氏が

「さうだ、私等は未だユートピアの實際を知らないために、そんなことが果して人間社会に行はれ得るか否かを疑つてゐるのです。歐洲各國はユートピアに比してその建國が古いだらうと同時に、古い傳習をその儘繼承して社會制度の改善向上などに意を注がないために、舊來の因襲に囚はれる……」

といふのをラフハエル氏は遮つて

「イヤ、その國の歴史によつて見ると、歐洲に未だ人跡の印されない以前、既に大都會のあつたことが記されてゐるのです。で、古來の因襲と經驗とを重んずる點に於て、ユートピア人は歐洲國民に勝るとも乏らない筈です。私が、ユートピア人と歐洲諸國民との相違點に就て著しく感ずることは、機智と敏捷との點に於て後者が前者よりも勝れてゐますが、研究的精神に於て遙かに後者が凌駕してゐるのです。その一例を擧ぐれば、今から千二百年程前に、羅馬人と埃及人とが數名漂着したことがあるさうですが、その當時、羅馬や埃及の文明はユートピアに比すれば物の數でもなかつたし、またその漂流人等は何等の學識もなかつたのですが、それにも拘はらずユートピアの學者等は彼等に就てその言語や人種や風俗、習慣、制度、文物等を研究して、彼等の國に關する組織的の知識を得て、學術は素より政治上にも多大の貢獻をしたと言はれてゐますが、その位までに彼等は何事に對しても徹底的に研究的態度をもつてゐて、そして研究の結果舊制度等に弊害を認めれば、直ちにそれを改め、利益のある新法はドシ／＼採用して實施するのです。これが彼國の駭々として進歩した譯なんです」と説明した。

七 財産の公有(二)

私はユートピアの詳細な説明を聞きたくてならなかつた。親しく視察することは私の境遇が許さない所だから、私はそれをラフハエル氏に話してその物語を請ふた。

氏はニコ／＼しながら「それはお安いことです。しかしながら、それには多少の時間を要しますから晝食でも済してからにしませう」と言ふ。フトみればモウ正午に間もない。

私たちは相携へて食堂に行つた。食事を終つて再びもとのベンチに歸ると、暫らく記憶を呼びさますものゝやうに沈思してゐたラフハエル氏は諄々として語り出した。

ラフハエル氏の物語つたユートビヤの話——それはマアこんなものであつた。

ユートビヤ——それは新月形の島で、その中央部の最も幅廣い所が約二百哩で、長さは五百餘哩ある。そしてその両端が相してそれが一つの大きな灣を抱容してゐる。

兩端の距離が僅かに九哩餘で、それが内海と外洋との間に一つの關門を形成してゐる。で、灣内は恰度四方に障壁を繞らしてゐるやうで、いつも浪が靜かで、恰で水面は鏡のやうである。そして、海底は悉く堅い岩で、水深が極めて大きく、まつたく世界中稀に見る良好で、大船巨船の出入が頻繁を極めるのもまた宜なるかなである。

恰度港口の中央にあつて一大巖石の屹出してゐるのには、堅固な望樓を築いて砲兵をして守備させてゐる。そしてその附近には幾多の暗礁があつて、出入の船舶の危険が頗る多く、そのために外國船はユートビヤ人の水先案内を得なければ到底その中に入ることを得られない。勿論ユートビヤの船舶にとつてもその危険さは同一であるが、陸上にある目標によつて安全を期されつゝある。その位だから敵艦が港口に迫つたにした所で、目標を變更するか或は撤回すれば勞せずして敵艦を粉碎することが出来る。

外洋に面する部分にも幾多の港灣あるけれども、何れも自然の地勢が嚴重に防禦してゐる。そして然うした自然の恵のない所には人工を以て完全な防禦工事を施してある。だからイザといふ場合にも僅かの兵を備ふれば大敵を撃ち攘ふことも容易である。それ位だから、外敵がこの國に上陸するなどは絶対に不可能事である。

一體この國は、現王の祖先のユートボス（征服者の義、國名はそれに因むもので、その以前はアブラクサと言つてゐた）がこの國を征服して、凡ゆる方面に向つて國民を善導しての遂に世界一の文明國とした。

この絶代の偉人……ユートボスがこの國に侵入した當時は、その土地の一端が隣國と境を接してゐて一つの地峽をなしてゐたのを、彼は早速掘鑿して海峽とした。そのためにこの國は四海環海の地となつて外敵の近よることを不可能としたのである。

王この一大事業を完成せしめやうため、土人と自己の引卒して來た軍隊とを併用して分業的にその作業に従事させた。で、流石の大工事も數年ならずして竣工したが、人種や言語風俗などを異にするものを同一事業に使用して、よく戮力協心してその能率を擧げたことは後世史家の驚嘆する所である。

王がこの大土工を起すべくしたとき、その隣國の王等は擧つて彼を狂か、愚かと盛に嘲笑した。

しかし意外でも迅速に而も完全無欠な竣工を見て大いに驚愕した。と同時にすくなくならず彼に對して恐れを抱くに至つた。素より宜なるかなである。

八 田園都市

その國內には、五十四の相當に大きい、そして莊麗な都市がある。その言語、風俗、人情、制度、法律などは大同小異で、その位置所在は、何れも最初からの計畫に隨つて定められたもので、距離の最も近いものも二十四哩を下らない。またその遠い道でも一日歩けば足りる。

首府はその中央にあつて、アモローテといふのである。

各都市は毎年、學識と經驗とに富む三人の長老を選出して首府の議事堂に送つて國事を議せしむる。

そして一都市を中心としてその地方に展開する幾多の一地方があるが、その何れの方面も二十哩より少くはない。各地方ともその區劃に満足してゐて、他の地方を蠶食しやうなどの野心はもたない。それは、その住民の殆んど總てが善良な農夫であるが、一人として自ら土地の所有者だなど、

信するものがないからである。

また、便宜に隨つて、納屋、物置、農具、馬匹、その他一切の附屬品が備へつけられてゐて、各市民は代るくこゝに來て住める定めである。この家族すなはち農民は、總て四十人以上の男女と二人の奴隸から成り立つて、高德なそして賢明な家長夫妻によつて支配され、三十家族を以て一村とし、そしてそこに一人の村長を置いてあるのである。

是等の中に於ける既に二十ヶ年以上の田園生活を爲したものの二十人を毎年都に歸還させ、その補充として、都市からは新に二十人の男女を送つて、經驗を有する先住者とその指導に當らせることになつてゐて、この新來者も翌年になればその年の新來者を教育するといふ譯である。

かうしたことは、凡ゆる人に、長い都市生活……繁激な事務から避けた閑靜な田園生活を營ませて自然に接せしむると同時に、市民に必要な農産物を生産せしめるため、或は耕し、或は家畜を飼ひ、或は薪炭をとりなどして、水陸の運輸機關によつてそれを都市に積み送るのである。また彼等は養鶏に従事してよく産卵せしむるが、その孵化法などにしても、母鶏孵化などではなく、みな精巧な孵卵器を用ゐてゐる。

そして、耕耘や運送のためには、馬匹を用ひないで牡牛を使ふ。一體この國では馬匹は主として

青年達の軍隊的操練のために使用さるゝので、その性の馴良なよりは寧ろ雄俊快速なことを求めてゐる。また穀物はパンの製造に供する以外、醸造用に供するなどのことはなく、酒類はすべて葡萄や林檎や梨などの果實から製造されるのであるが、彼等の多くは酒類よりもヨリ清水を飲むことを好んでゐる。

ユートピヤでは、毎年國內に於て消費さるゝ農産物の額を正確に調べてゐて、その必要に倍額の生産を得るだけの耕作をして、その剰除は外國に輸出する。

そして、田園生活の必需品の都市に於て得らるゝものは、敢てそこに賣買などの手数を要しない。何故なら、官吏にそれを申告すれば直ちに供給されるから。で、彼等は、休業の日になると相携へて都市に行くを常とするのである。また、農産物の收穫等言つた田園の繁忙時期には、その前日に都市の官吏に對して必要の人員を請求して置けば翌日は直ちに派遣されるのである。

九 壯麗な首都

ユートピヤに於ける各都市は、自然の地勢によりて多少の差こそあれ、何れも同一の規模設計に

基いたものであるから、その一を述べれば自ら他も何ひ知られやう。で、私は私が五ヶ年間滞在したその國の首府モアローテの光景を話さう。

アモローテは、一丘陵の緩かに尾をひいたところにあつて、ほど正方形をなしてゐる。その一方の端は丘陵の下方から起つてアナイダ河邊に達し、その距離は約二哩である。そして他の方面は、これと直角に河邊に沿ふて二哩以上に迫んでゐる。

アナイダ河は市を距ること二十四哩の地にある一湖水に源を發して、市の附近では既にその幅が半哩以上となつてゐるが、なほ四十哩流れて外洋に注いでゐる。河口から市の附近に至るまで潮の満干があるほどの緩かな流れである。市の一端、河の上流の方に一つの大きな橋がある。鐵と石とのみを以て造られたもので、大きなアーチ形をしてゐて船舶の往來に便にしてゐるが、橋の表面は市街の道路と同じく平坦で車馬の交通なども便である。その結構の壯大さと遠くこれを望めば宛ら虹の空にかゝつて市民に天の祝福を示すやうな美しい雄姿とは他にその比を見られない。

そのほかに今一つの河流がある。それは市外の溪谷中に源を發して市の中央を横斷してアナイダ河に入るもので、アナイダとは到底比較にならない程の細流に過ぎない。しかしその水の飽くまで澄んでゐることゝ、魚などの潑刺として泳いでゐる様や、その兩岸にある常盤木の並木があつて、

鏡のやうなその流れに影を寫してゐるさまは得も言はれない。

そしてその水源が市に近接してゐるので、市ではその周囲は素より市まで堅固な障壁を設けてゐる。それは、萬一敵兵のために水源を断たれ或は毒を投ぜられなどしてはならないとの懸念からで、勿論、市民の飲料水はこゝから煉瓦造の大水道によつて市の隅々まで配達されてゐるのである。

市の三方には石造の堅固な城壁がある。そしてその外側には荊棘または枳殻を植えて人を近づけぬことゝされてゐる。市街は秩序整然としてゐて、ドンナ小道路を見ても坦々として、それこそ渚のやうで、豪雨が降り續いても歩行に不便はない程である。

家は凡て三階建の壯大なそして堅固なものである。で、その壯麗さつたらない。それこそ全く想像以上のもので、家屋の後ろには大きな庭園があり、それが市街の一端から他の一端へと續いてゐる。そこには、四季折々の花卉が植えられてゐるのは勿論、葡萄やその他の果樹園或は野菜畑などがある。そしてそれが春と夏との間には百花燎亂として互にその美を競ひ、夏の終りから秋のなかばにかけては、いろ／＼な果實が累々として實つてゐる。その有様つたらまつたく得も言はれない程であるら。

家屋には、適當の距離を隔てゝ表と裏とに窓と門とのあることは勿論であるが、出入はもとより自由で、錠や鍵などの必要が絶対にない。何故なら、家中に何等の秘密もなければ私有財産もないから。そして住民は十年毎に抽籤を以てその住家を變更する規定で、家屋の位置によつて多少の不便のあることは免れないけれども、徹頭徹尾公平な抽籤には誰とて不平を訴ふるものがない。

アマローテ市がこんな外觀や體裁となつたのは、言ふまでもなく經驗と研究との蓄積に外ならない。勿論、市街の大體の計劃……殊にその裏通りに庭園を設けたなどは、創業の英主たるユートポスの考案に出づるものだけでも、かうした壯麗な都會は、一朝一夕に出來得べきものでない。すなはち王は先づその基礎を据えて、その完成のことは後世に遺したのである。

ユートピヤの文献に徴して見れば、帝都以來最早一七六〇年の日月を閲したのである。その當時の家屋は甚だ低く、凡て木造で、内外共に土を塗つて壁とし、それに屋根は麥藁や茅などをもつて葺かれてゐたので、今日のやうに建築材料に不燃焼物を用ゐた大廈高樓を構ふるに至つたのは、その後幾多の過程……火災だとか、悪疫だとか、或は暴風や洪水と言つたやうな幾多の慘害を嘗めてからのものだとは勿論である。

現在のモアローテに對して、我々歐洲人の目を以てすれば、殆んどそれは完全無欠の、恰で超人

間的の社會とも見られるが、そして恐らく全人類が等しく讚嘆の聲を發するだらうが、彼等は決して現在の状態に満足していない。彼等は將來ともなほ大いに進歩改良の餘地があるとして頻りに研究努力しつゝある。

三三

一〇 行政組織

ユートピヤに於ける行政組織は、フライイクと言つて、三十家族を合して一團とし、毎年その中から一人の團長を公選し（以前はシツホグランドと呼んでゐた）そして十人の團長毎にフライイクと言つて更に一人の統轄者（以前はツラニポーレと呼んでゐた）がある。そして彼等は全市の支配をプリンスと呼んでゐる。

その選挙法は、先づ全市に散在する二百のフライイクを招集して、彼等に公平嚴正に自己の良心の命ずる人を選挙すべく契はせ、かねて人民中から選出してゐる四人の候補者に就て無記名投票を以てその一人を選挙するのであるが、市は東西南北の四區に分たれてゐるので、一區から一人宛の候補者を選出するのである。そして、一たびプリンスに選挙された者は、全市民から專制獨裁など

の弾劾を受けない限りは終身その地位を保つべきもので、他の役員の任期は一ケ年であるが再選を妨げない。

ツラニポーレ……大フライイクは三日目毎に政廳に出てプリンスと共に政務に關する協議會を開く。極めて稀ではあるが、若し市民の間に爭論を生ずる場合には、彼等は直ちに出張してそのことを審かに研究し、調停仲裁を試みた末到底和解を得られなくなつて始めて判決を與ふる。この場合、必ず二人の戸長……卅戸長を同席させて協議に與らせるが、その都度彼等は新な二人と交代させられる。

總て公共に關することは、その確定發表に先つて議院の會議に附せられ、三日間の審議を経なければならぬ。若し、議場以外に於て政務を協議するやうなことがあれば、それは叛逆罪を以て目されて死刑に處せらるゝのである。

一體かうした嚴重な規定を設けたのは、プリンス、ツランポーレ等の所謂大官等が、政權をその手中に握つて獨裁政治を行ふべく陰謀を廻らしたくないかとの懸念からである。そして公共に關することは、先づフライイクの協議を経て議院に提出され、その事の全國に關するものは素より國會に附議さるべきものである。

そして、總ての議事は、その提出された日に附議さるゝものではなく、各議員に充分その内容を研究させ、それに對する見解乃至意見を纏めさせるために多少の時日を與ふるものである。何故なら、公共の利害に關する大事を、慎重に考究せず、附和雷同的に議決するのは最も恐るべきことである。

一一 職業法

ラフハエル氏はますます熱心に語り續けて行つた。彼はユートピアの職業に就て語つた。それによると

男にしろ女にしろ市民たる以上必ず従事しなければならないのは農業である。彼等は小兒時代から、學校や田園に於て農業の學理と實際とを教授されるので、祖先以來誰もが強制的に一定の時間を農業のために費さなければならぬので、従つて農業の進歩は他にその比を見られないほど進歩してゐる。で、天然に支配されてその收穫に豫想外の増減がない程である。それでゐて彼等は一層それを科學的に研究することに孜々として勉めつゝある。

一體この農業は、國民一般が等しく従事すべきものなので、職業と言ふには或は不當であるか知れない。が、何れにしても、國民は誰もが農業以外に特殊の職業を教へらるゝのである。そしてそれらの所謂特殊の職業に於ても先人の遺した經驗に加ふるに科學的研究を以てしてゐる。で、彼等の間に於ては學問と職業との區別がない。職業は如何にその卑賤なものにしろ一個の學問で、學問として修業したことは直ちに日常生活に應用されるほどそれほど實用的なものである。

例へばその職業すなはち學問の最も普通なものを學ぐれば、毛織物や麻布の紡織、乃至建築や鍛冶や造壁術等で、このほかに少數の人士の従事する職業はあるが一々それを述ぶるの煩に絶えない。そして衣服の裁縫の如きは一個の職業として認め得られない。何故なら、衣服の體様などは極めて簡素で、その間に上下貴賤の差別がない。たゞ單に男女共に既婚と未婚とによつて多少趣を異にするだけのものである。で、各々自家に於て裁縫し得られるのである。

そして職業上に於ける男女の自らなる分野は矢張別れてゐる。即ち婦人は紡績などの比較的輕易の作業に従事するといふ風に――。

そしてまた、普通は父祖の業を繼承することを以て原則とされてゐるが、若し特に他の職業に就くことを欲する者には試験の上その轉職を許される。また、自己の本職以外にあることを修得すべ

くする者には、本人の希望に任せ、卒業後何れの職業に従事するかも本人の希望によつて定むることを原則とされるが、若しそれに過剰を生じ他に不足の職業に従事させられるのである。

そして、フィラーク……國長の主な職分は各人に努力を奨励し怠慢を取締ることであると同時に、過度の勞役に服して心身の健康を害することのないやうに細心の注意を拂はなければならぬ。一體、朝早くから夜晩くまで機械さながらに勞働に従事するなどと言つた野蠻極まることはユートピア人の夢想だにし得ない所である。

彼等の勞働時間は一日六時間である。午前中に三時間働いて晝食をし、二時間休憩して更に三時間の勞働に服して晩食を攝るのである。そして彼等は毎夜八時頃に睡眠するを例とし、睡眠のために八時間を費した彼等は早朝起き出るのであるが、勞働と食事と睡眠との他に有する時間に於て、讀書、談話など各自の好む方面に向つて自由行動をとる。しかし不健全な快樂に耽るなどのことは決してない。

毎朝、文學や科學或は衛生や職業等に關する講話が開かれる。勿論それに出席することを強要されるのではないが、彼等は新知識を得る喜びのために萬障を差繰つて出席するを常とする。

彼等はまた夕食後から睡眠までの間を、戯曲や音樂などの高尚な遊戯に耽ることを常とする。

勞役の時間のすくなく、それでゐて生産の過剰を來りて外國に輸出しつゝあるのは、凡ゆる階級の人が總て愉快に職業に従事しつゝあるからである。そしてまた他の原因として、國民の總てが遊食しないからである。即ちユートピアに於ては、小兒、老人、廢疾、不具などで實際に勞役に従事するを得ぬ者を除く外、全國民悉く有益の事業に従事するため、如上の驚くべき事實を示してゐるのである。

そして如何なる人々が勞役を免除さるゝかは固より法の定むる所であるが、劇務に携はる者の外は自ら進んで何かの作業に従事するを常とする。何故ならそれは自身の運動、心氣轉換、興味といふ點からして――。

特に秀でた頭腦の所有者には、官吏の推薦または公選によつてその學術或は精神的事業に従事することを許される。が、勞役に従事する普通人が、著述、翻譯、發明などをするともよくある。何故なら一日六時間の勞働は精神的業務に従ふ妨をなさないから――。

そして特に擧ぐべきことは、ユートピアが富を極めた國だことである。その理由としては、その經濟組織が完全で、國民に、勞力と財産とを無益に費させることがないからである。その一例を擧ぐれば、他の國家に於ては見得を張るために目の飛び出す程の家賃を支拂ふべく餘儀なくされてゐ

るが、ユートピヤに於ては家屋などを悉く國家社會の有だから、他の國に於けるやうな無用な動作を繰返すことはない。また衣服はたゞ單に寒暑を防ぐに止められ、清潔なそして實用的なものを以て標準とされ、冬衣は毛織物或は毛皮を以て造られ、夏服は麻布を以て仕立て外出の時に限つてその上にひろい上衣を被る。すべてが全然實用的なものだから、誰も二三枚の着換を持つてゐればそれで良い。

——以上は單にその一例に過ぎない。總てのことに、科學と經濟との原則を應用して最も有効的に組織され、無用な、人の精力と、時間と財物とを徒費することのないために斯く進歩發展しつゝあるのである。

一一一 大家族的生活

ユートピヤ人の家族は、原則として、血族から成立させつゝある。相等の年齢に達して結婚すれば、女は男の家に行つて住み、男は絶対に自己の家に留まつてゐて、その家庭中に於ける最年長の男子によつて支配される。そして市の人口の激増或は減少を調節するため、一市内に包容する入口

の數を略六千戸と定められてゐる。そして若し人口過剰の場合は適當な地に別に市を建設することとして、抽籤その他の方法を以て各市からその住民を選定し、それに絶対服従を餘儀なくされつゝある。

——ラフハエル氏の話はいつか他に外れかけてゐた。で、私が「今少し家庭生活の内部に觸れたことをお聞かせ下さい」と言ふと、氏は急に思ひ出したやうに

「ア、さう／＼、一體この國での家庭の状態は、長上に對する秩序が整然としてゐて、而も父兄はその子弟に只管慈愛を盡してゐる。つまり、相愛すると同時に相敬してゐるので、家内は至極圓滿な所謂和樂の郷をなしてゐる。

各區の中央部には市場があつて、各人はその生産品をその倉庫に納入すると同時に、入用の品はドシ／＼自由に持ち歸ることが出来る。勿論、金錢、物品、手形などによつてその交換物を定むるの要がない。何しろ、凡ゆる物品が多く貯へられてゐるので、毎日それを新に受取得るため、誰とて必要以上のものを持ち歸るものではない。

元來他の國民が金錢や物品等を貪る理由は、その虚榮心を満すべくまた不時の出來事に供ふべくするためであるが、ユートピヤの社會組織に於ては全然その必要が決して起らない。

そして市場には凡ゆる必需品が極めて豊富に置かれてゐることは勿論、總ての點に清潔を旨とされてゐるので、決して悪臭を放つやうなことはない。そして殊に擧ぐべきことは、屠殺は勿論、漁獵者などは奴隸の職分と見られてゐることである。何故なら、斯る仕事に携はるものは自然に殘忍性を帯びるから——。

そして、市内に生じた塵埃などの不潔物は毎朝未明に市外に搬出され、その他のことにも厚く意を注がれて衛生物設備を完成させてゐるので、悪疫など僅かに歴史にその記録を存するに止まる。と同時に誰しも健康で、死亡などもはなはだすくない。

しかし病人が全然ないとは言はれない。ために、市の周圍に四ヶ所の病院がある。建築は宏壯で庭園は廣く、諸器械や藥品等は悉く具備し、病人に供する食物は、慈養とその嗜好とを參酌して料理されるし、醫師は皆大家揃ひで、看護婦は至つて親切だから大概病人は直ぐに癒つてしまふ。但し二三日以上の療養を要するものゝみがかゝには入るのである。

なほ市民の生活状態を一層詳しく言へば、各所内に一定の距離の地に數個の大きな會館がある。それは即ち三十家族の會食場である。各家族は鐘の合圖によつてそこに集まつて食事するのである。勿論、各家庭に於てすることは自由であるが、會館に於て多くの隣人達と共に無代價を以て上等の

食事の出来るのに、好んでそんな馬鹿なことをする者はないのである。そして料理に關する下等な労働は奴隸のする所であるが、獻立、器物の整頓などは各家族の主婦が順次にそれに當ることゝなつてゐる。

食堂に於ける男子のテーブルは壁の傍にあり婦人のその反對の側にあつて出入の便を圖られてゐる。何故なら婦人は嬰兒などのために屢々席を立つから——。

食堂を出て長い廊下を隔てた反對の側に育児室がある。そこには搖籃、安樂椅子、火、水などの備へがあつて、嬰兒をもつ婦人および五歳以下の小兒の保育所である。孤兒などは他の子を失つた婦人などが育てゝゐるほど、そして我子と人のそれとの間に愛憎の別などなさい位彼等は博愛の念に富んでゐるのである。

更に食堂に於ける有様を詳しく言へば、中央の小高い所に團長夫妻の席（團員中の牧師があればその夫妻がつく）があり、それを相對して最年長者の席である。それらに續いて一列の青少年席、その次に老年席、次はまた青年席となつてゐる。何故なら、青少年の一團を一所に置くと自然と無作法に流れるから——。

皿は席次によらずして年齢順に配布し、年長者がその左者の年少者に食物を頒ち與ふるのであ

る。

平等の社會に於ても、年長者、學識者、徳行者等に敬意を拂ふことを忘れないのがユートピアの一つの美しい制である。それと同時に、食事の前後に於て互に談笑して交際の術を習得したり、晩餐後には必ず音楽があつたり、卓上には四季折々の花を活け、或は室の一隅に於て香を焼き、室内に香水を散布するなどに至るまで細心の注意を拂つて心良を樂しまむべくしてある。

——これらは所謂彼等の主義である。人類は他人の幸福を妨げ或は自己の將來に災禍を残さない範圍内に於て、快樂を享受する権利のあることを確信してゐるのである。

そして以上のことは市民の生活状態なのであるが、田舎に於ては言ふまでもなく各自の家庭に於て食事をなすつゝある。そして彼等が有する衣食住一切のことに不自由を感じないのは前者と少しも變りがない。

一三 金力軍備

彼等が他の地に旅行しやうとならば、先づ團長の許可を受けなければならない。止むを得ぬ事情

がない限りは勿論拒絶されない。遠隔の地には二人以上の同伴者を要し、且つプリンスからの旅行免狀を携帶しなければならない。

そこで彼等は一輪の馬車と一人の奴隸とを附與される。そして彼等は旅行するに方つて何等特別の準備もなさないが、人家のある限りは決して不便を感じない。何故なら、到る所に於いて家族同様に歓迎さるゝからである。若し許可を得ずして自由に遠隔の地に行つた者は、脱走者と見做されて相當の罰を受ける。そして再犯の場合には奴隸として下賤の役に服しなければならない。

同一管内の旅行の場合は、兩親のある者は兩親の、ない者はその配偶者の承諾を得れば自由に何處へでも行ける。しかし相當の勞役に服しなければ食事を供されない。

ユートピアの社會組織に於ては、一切の必需品を充分に貯藏する必要なことは言ふまでもない。そしてそれは皆市民の公有だから、一方に極貧者がないと同時に極富者もない。また各都市間に有無相通する上に於ては、素より相互に物品の貿易とか交換とかはなく、たゞ餘れる地から不足の地に無代價で送附するので、所謂全國が大家族をなしてゐるのである。

そして、何品にしろ、二ヶ年以上の重要に應じてなほ餘りあると同時に、他の地は於ても欠乏を感じる場合のない時、初めて外國に輸出するのである。そしてその七分の一を外國の貧民に施與

し、他の七分の六を相當の代價を以て交易するのである。が、今日では輸入品は山と積つてゐるし、金銭は勿論、物品も受取る必要がないので、一定の期限後に至つて受取るべくして、先方の國家若しくは都市を保證者とするのである。

彼等は或程度までは富の力によつて他國を制し得ることを確信してゐる。先づ債務國は債權國に向つて容易に開戦を宣言し得ない。が、若し一朝干戈を交ゆるに至れば、彼等は驚くべき高級を以て各國から兵士を募る。それは、戦争など言つた野蠻なことののために自國民を殺すことを欲しないからである。と同時に、それはその募集に應じた兵士の國民が當然ユートピヤに對して同情乃至好感を有つからである。なほまた敵國の兵士を募集して敵國の力を弱め、その秘密を賣收して自然的に勝利を占める……かうした事實も彼國の歴史には多い。

而うして、彼等に於て特に奇異の感に襲はれるのは、實用的價值意外のものに所謂その貴重さを見出さないことである。單に光澤の美麗のためにそしてその産出が極めて尠いために……といふ點に於て、人間の虚榮心から高價に代價づけられた所謂貴金屬類などは、國民が虚榮心に憶懐する幼稚な域を脱したユートピヤに於てはそれらのものに對して實用以外に價值をつけない。歐洲諸國の王貴族等は金銀を以て造つた什器酒盆等を以て得々としてゐるが、彼國に於ては、それらは陶磁

器または玻璃器を以てして、金銀等は便器か或は努隸を絆ぐ鎖として用ひられ、罪人には、不名譽の表徴として其の頸に金鎖を、そしてその指に金環を箝めさせる。

元來このユートピヤには、眞珠貝やダイヤモンドその他の珠玉が多く發見される。しかしそれは勿論苦辛の結果に發見する物ではなく、偶然に發見されるもので彼等はそれらを以て五六歳までの幼兒に裝飾してゐる。

——滔々としてくまで述べて來たラフハエル氏は微笑しながら言葉を改めて

「こゝに一つの面白い挿話がありますよ、それは私が恰度あちらに滞在してゐる頃アネモリヤ國大使の一行が來た時のことなんです、三人の大使が百餘人の従者を引率して、何れも貴族である三人の大使は、燦爛たる光彩を放つ絹服を着けて、その首には金鎖を垂れ指には金の指輪を箝め、頭から足先に至るまで、ダイヤモンドや眞珠其の他のあらゆる寶玉を以て華やかに襲ひ、恰度孔雀が羽を擴げたやうに鷹揚に歩きながら、ユートピヤ人が驚きの目を睜つてゐるのを見て、ます／＼得意になつてゐた、まつたく可笑しいぢやありませんか、それは大使等が思つてゐるのと餘りにも甚しい反對の事實だつたのです。そしてユートピヤ人は大使を奴隸と思ひ、また一行中の最も賤しい従者を大使と思つて敬禮したといふのです。子供たちは子供たちで「大人が赤坊の眞似してダイ

「ヤモンドなどをつけて喜んでゐて可笑しいな」など言へば母親などはそれを誡めて「そんな失禮なことを言ふものでありませんよ。アノ人等は、途中の慰めにと大使さんたちが連れて來られた道化役者ですから……」と言ふものもあれば「アンナ小さな金鎖で奴隸の逃亡を防ぐるか知ら」などいふものもあつた位でした。しかし、一週間もたつたかたゝないうちに大使たちもユートピヤの事情を知り大いに恥ぢ入つてその裝飾を取り去つたといふことですが、大使等はユートピヤ人の風俗を見たその意見を聞いて大いに悟り、自國の不條理な制度や習慣などを改めて、ユートピヤに於けるやうに新組織を實行すべく決心したといふことですよ」

と言つて笑つた。私たちが噴き出して笑はずにはゐられなかつた。

一四 文藝學術の發達

少時してラフハエル氏はまた語り續けた。

「今までお話したやうないろ／＼な事實、即ちユートピヤのユートピヤたる所以は、一體何處から生れたかを研究することを忘れてはなりません。私は、それは法律習慣以上に重大な關係をもつ文

藝や學術の進歩發達した賜だと言はざるを得ません。一體、彼の國では誰もが勞働に従事することを以て原則としますが、文藝や學術の天稟の才のある者には勞働を免除して只管その研究に没頭させるのです。勿論ユートピヤの言語は純粹で高雅なので敢て他國語を習ふの要もなかつたのでそれらの人にとつては非常に便利だつたのです。で、學問藝術の上に多くの鏘々たる人士を出しました。哲學にしても、天文、地文にしろ實に驚異に値する程まで進んだものなりました。それ位ですから、ユートピヤの學者などの研究心の強さつたら大したもの、例へば、人間の道德や快樂の問題について、人間の眞の幸福は如何にして得らるか？など、随分眞剣に考察してゐるのですが、私の考へる所では、餘りにも彼等は快樂を重視し過ぎてゐるのです。しかし、彼等が説く所は極めて巧妙なもので、私はその全部を正當だとは言へませんが、少くもそれが大きな直理を含んでゐることとは否めません。その要點をお話すれば、その論據は先づ靈魂の不滅、上帝の恩愛の無限なこと、善因善果、惡因惡果といふ信仰に生きてゐるといふことです。何しろ彼等はさうした信仰に活きなければ一日も社會的存在が出来ないと信じてゐる程なんですから——」

ラフハエル氏は一寸言葉をきつたが直ぐまた語り續けた。それによると

——彼等は諸種の快樂の中に於て、その眞實なものか否かを正當に判斷識別してゐる。で、彼等

の身體は飽くまで健全で病魔に襲はるゝなどは極めて稀である。そして彼等の頭腦の健全さと記憶力の強さと推理力に富むことゝは到底歐洲人の及ぶところではない。

彼等の學術文藝などは當時既に非常の進歩の發達をしてゐたが、未だ希臘の文學や哲學のあるとを知らなかつた。私は特志者たちの希臘語とその文藝や哲學を教へた。彼等の頭腦の良さつたらなかつた。それは議會がその志願者中から俊才のそして相當の年輩者を選んだためではあらうが、たちまちアルファベーターを記憶し文法を暗誦し正確な發音をなすに至り、六ヶ月で自由に希臘語を以て文章を作り、三年後にはその凡ゆる典籍に通じて、その文學や哲學の蘊奥を極めた。

私はまだ彼等に印刷術と紙の製法とを教へた。それまでは、羊皮または樹皮或は葦編などに文字を記し、或は木または金屬等に印刷してゐたのであるが、彼等は忽ち研究を進めて、極めて精巧な紙を製出し、また鮮明高尙に印刷するに至つた。

兎に角、ユートピヤの文明がなほも駿々乎として進歩しつゝある所以のものは、彼の國民が固陋な偏見をもたずして、凡ゆる方面から新知識を吸収しつゝあるからである。

例へば、外國から旅行家または商人などが來れば、その人の身分の高下や學識の有無に拘らずその人歓迎し好遇する。そしてその人から何かしら新知識や好參考を求める。私が彼國で意外の歡待

を受けたのもそのためである。

——ラフハエル氏はこゝで一吋言葉をきつた。が、また直ぐ

「餘り續けざまアレですが、ついでだから今少しお話しませうね、サテと、今度は病人や奴隸や結婚などに就て概略を申すことにしませう」と言つて私たちの顔を見た。で、私が「是非、何卒……」と言ふと、ギルス氏も同じやうな挨拶をした。

一五 結婚法及法律

ユートピヤに於ける奴隸は、諸外國に於けるやうに戰爭によつて得た者を以てすること殆んど無い。あつてもそれは戰爭に於て捕へたものゝみで、敵の非戦闘員や婦女子乃至小兒などを以てすることはない。で、奴隸の多くは、國內に於て重罪を犯した者、若しくは諸外國に於て死刑に處せらるべくした者を贖つて來たものである。また、外國に於ける最下等民がその生活費を充しえずして自ら身を賣つたものである。として、奴隸の子奴隸としては遇されないのである。

奴隸は總て金鎖を以て絆がれ、屠殺、塵埃汚物等の掃除その他、自由市民の好まぬことに従事さ

せられる。そして彼等は常に監視されつゝある。それは刑罰の意を含むと同時に若し逃走した曉に於ける社會の被害を恐れるからである。しかし生活上の困難さから自ら身を賣つてなつた奴隸には極めて寛大の態度を採り、その希望によりては何時でも自由の身ともなり得る。殊に數年間の役務を果したものは相當の受産金を附與される。

次に一言すべきことは、病人の取扱に關するユートピヤ獨特の制度である。

病人のある時、それに對して醫藥食料等に最善の注意を拂ひ、熟練した看護婦の手厚い看護をうけることは勿論、親戚知己などはその枕頭にあつて病人を慰むると同時にその快癒を祈る。

若し醫師の診断により、その到底快腹の望がなくそしてその苦痛が甚だしい場合には、僧侶、醫師、官吏、近親者などの立會の上、その旨を本人に告げてその希望によつては更に近親者の承諾を得て醫師はその生命を絶つ。言ふまでもなく病者の無益の苦痛を免かれしめやうためである。

ユートピヤ人はこれを以て名譽の死としてゐるが、勿論本人の請求がなければ斷じてそれは行はない。と同時に、病者が勝手に自殺することは甚だしい不名譽として非難され、正當の葬式を營むことを許されない。

ユートピヤの結婚は、女は十八歳男は二十二歳を以て成婚期とする。その前に私通するものは嚴

罰に處せられ、特にプリンスの赦免を得ない限りは彼等の結婚は許されない。そして、然うした者を出した家庭もまた監督不行届のためにその責を負はされる。何故かく規定さるゝかと言へば、ユートピヤのやうな社會組織の國に於ては、この點に充分の注意を拂はなければ社會の綱紀が弛緩して遂にはその組織を亂す恐れがあるから――。

彼國に青年男女がその配偶者を選択するには極めて細心の注意を拂ふ。その一例を挙げれば、普通の條件乃至資格等に於て互に異議のない場合には、最後の試験として、女にはその結婚の關係者中の最高年の女、男にはその近親中の高德で老齡な人が立會ひ、新郎新婦となるべき二人を裸體となし、互に相手の身體全部を隈なく検査させる。

一見それは奇異に似てゐるが、彼等の主張する所によると「僅か十何圓の金で買へる小馬でも、その覆ひものを除いて十分に検査するのに、一旦結婚した以上は、善かれ悪かれ容易に離婚することの出来ない配偶者の選擇に、その氣質や教育の程度に多少の心を費したのみで、最も重要な關係のある身體各部のに着物を掩ふて僅かに残された五寸四方にも満たぬ顔だけを見て満足してゐる歐州人たちの氣がしれない」と言ふのである。

そして彼國に於ては嚴然として一天一婦の制が行はれ、一旦結婚した以上は離婚すべからざるこ

とを以て原則とする。但し、夫妻の何れかに姦通した場合、または殘酷若しくは忍ぶべからざる亂暴等の場合は、一方の講求により充分それを審査した上で政府は離婚を許す。そして離婚の許可を得た者は自由に再婚することを得るが、その離婚の相手たるものは改心の證跡が充分で政府の赦免と特許とを得なければ再婚を許されない。また、夫婦合意の上での場合は、政府はその果して合意の上か否かを審査した上にその許可をする。

次に擧ぐべきことは、官吏と一般國民との關係が極めて圓滿で、國民は官吏を呼ぶに「父」を以てしてゐる程である。そして官吏は萬事に公平と懇切とを旨とし且つ謙遜である。また國王と國民との間も然うである。國王は頗る平民的で、その服装など一般國民と變らない、たゞ外出する場合に一般人に國王なることを知らせるために、穀物の小束を捧持した一人の先導者を置くばかりである。國民は心中の敬愛の念を表現するに相當する自然なそして慇懃な態度をとつて國王に禮する以外、その前に跪座するなどの卑屈なことはしない。

ユートピアの法律——それはたゞ大綱を示すに過ぎない。そしてそれは國民の誰もが知つてゐる所で、辯護士や、検事、公證人、や執達吏等の必要はない。何故なら、國民相互間の論争は大抵の場合、官吏或は僧侶の仲裁によつて和解し、萬止むを得ぬ場合は議會に提出してその裁判を仰ぐのであるから。

ユートピア附近の諸國からは、常に、視察員若しくは留學生などが入り込む。そしてその社會組織はボツ／＼それらの國に行はれつゝある。また附近の小獨立國に於てはユートピアの官吏の出張を請ふてそれに國政を委ねる。ユートピア人の政治に携はる所は極めて嚴正で、能ふ限り政費を節減する。勿論賄賂などは貧らない。一二年も経てば治績は實に驚くべく良くなるを常とする。そして、ユートピアに併合を望む國もあるが、ユートピアでは飽くまで友邦として指導し誘掖しつゝある。

また、彼等は、人類はみな同胞であるからには、各國民が互に正道を歩いて他を犯さない以上、世界は平和であるべき筈で、敢て一二の國と同盟を締結するの必要がないとしてゐる。

一六 戦 争

一見天國のやうなユートピアにも、世の最も野蠻な行爲である戦争がないではない。しかしそれは外敵を防ぐためか、敵の侵入を受けた友邦を助けるか、暴君の悪政の下に虐げられつゝある他の

國民を救済するかの場合である。勿論彼の國には内亂等はない。

とは言へそれもユートピアの歴史上極めて稀なものである。彼等は人命を以て世の如何なる財寶よりも貴重なものとしてゐる。で、彼等が干戈を執つて起つのは、正義のため多數の人命を救うべく少數を犠牲に供する意味に於てのみ戦争の是認してゐるのである。

若し事端の發生した場合には、先づ自ら能ふ限りの讓歩をし、誠意を披瀝して相手の熟考を求め、圓滿の解決を求める。如何に談判が永ひいても先方から戦を仕向られるまでは諄々として正義を説く。そして彼等の國の所謂殊勳者は、斯うした場合に於て到底常人の能はぬ程の難局を巧に解決して事なきを得せしめたものである。多數の人類と莫大なる財貨とを失つて、有利な條件の下に媾和條約を結ぶ事は、恰も火災後の掃除人足の勞と同一で、これを以て功勞と視ることは甚だしい滑稽とされてゐる。また攻城野戰の勇などは敢て問題とする程のものでない。

外交上凡ゆる手段方策を盡しても遂に交戦状態に入つた場合にも彼等は敵國を屈伏せしむべき方法を講ずる。即ち彼等は一旦戰端の開かるれば、自國民は勿論、敵國民および第三者たる諸國民の間にも、驚くべき莫大の賞を懸けて、或は敵國王を説き、或は敵國內に内訌を起させ、また或は敵國王若しくはその將帥を捕虜にしましたは暗殺する等、凡ゆる手段を以て敵國をして戦争を中止す

るの止むなきに至らしめる。その賞は、數百千萬金か、或は一州若しくは一地方などを以てし、未だ曾てユートピア政府はこの約を違へたことがない。

若しまた愈々干戈を交ゆる場合にも、ユートピア人は主として智的方面の事務に携はり、直接の戦闘には全世界からの募兵を以てする。元來が人は自家本位に働く動物であるから、若し戦死しても、その功績を録されるほかにその遺族には特別の優遇を與へられるので、所謂烏合の衆である募兵等はよく働らく。

その傭兵は全世界からするとは言へ、それはその方面に於ける列國で、特に多くのそれを出すのは、ユートピアの東方五百哩の海上にあるザポレット國である。矇昧で、慥悍である彼等は、平生、主として遊獵と劫掠とを事とし、寒暑や飢餓に堪えまた如何なる勞苦も意としない所謂天晴の軍人である。そして好んで戦争する彼等はまた給金の多さを趁ひて傭兵に出るのである。で、財力な豊かなユートピアに續々として行くのは當然である。ユートピア人が、斯る猛惡な蠻民を驅つて戦争に従はせることは、所謂毒を以て毒を制するもので、人道上喜ぶべきことなるを失はない。

またザポレット土人に次で募集するものは敵國民である。それをザポレット土人の間に混ぜ、ユートピア人が指揮すれば彼等の背叛を防ぐと共にそれに賞を重く施せば意外の効を奏する。若しな

兵員に不足を生じ、附近の列國から募集してもなほ不足の場合に限り自國の義勇兵を募るのである。そして義勇兵は女も許され、殊に夫婦同行して出陣するを常とするが、婦人の従軍は全軍の士氣を鼓舞するに大なる効があると言はれてゐる。

全軍の統率者としては、全國民中に於て、勇氣と、徳望と、知謀との拔群者を以てしてそれら一切の權能を附與する。それを將帥と呼んでその下に二名の副將を置いて參謀とし、若し將帥の身に異變の生じた場合に、代つて指揮の權を執らせる。副將以下百人長に至る間に十數の階級がある。士官の任務は絶對的にユートピアの市民に限られるが、傭兵中的人格技倆の優れた者は下士に任ずることもある。

そしてユートピア人は戰爭を以て野蠻の極だとして、それに従事することを賤しむが、彼等は幼時から愛國心を涵養させられ、國家は自己の一身一家と異らないとの信念をもつため、國民の誰もがその身を犠牲に供することを意としない。彼等はまた敵國に於てもその地の凡ゆるものに無益の亂暴などを決してしない。

戰爭の結果として勝を制した場合は、その戰費を償はしむるか、若しくはその土地の一部を占領して永久にその歳入を徵收するが、幾度かの戰によつて諸々に此種の屬地を有ちその歳入七億デユ

カットを算すると言はれてゐる。そしてその土地の管理には本國から吏員を派遣して、その土地の習慣を尊重すると同時に本國の制度を參酌して着々改善を圖るので、二三年でその面目を一新するを例とする。そして、屬領の人民がユートピア政府に反旗を翻したことは未だ曾てない。

ユートピアの城廓、甲冑、武器に就いて一言すれば、城廓は巨大な石を以て堅固に築かれ、その周圍には堀を繞らしてある。城を出て戰爭する場合には全軍を督して忽ち規模の壯大なるそして堅固な塹壕をつくる。

軍隊は、騎、步、輜重の三隊に分れて、接戰には手斧、投槍などを用ゐ、遠戰には弓矢を用ふる。その武器の操縱といひ射術に妙を得てゐること、言ひ全く驚くの他はない。

その武器の製造は素より絶對的の秘密とされてゐるが、輕便で銳利さの點に於て優れてゐる。とても甲冑及び馬具の類も堅くそして輕いことを主觀として造られてゐるが、甲冑をつけ武器を携帯しての水泳はこの國に於ける凡ゆる武藝中の重要なものとされてゐる。

一七 宗 教

「ユートピアの宗教について少しお話しませう。物騒な戦争のことはもう止して……」と言つて、ラフハエル氏は微笑しながら語りつづけた。それによると

——ユートピアには一定の國教がなく、太陽を、月を、或は或種の星を、または歴史上の偉人、國家の犠牲者などを神として尊敬しそれに歸依しつゝある。勿論それは普通の社會に於てのもので、知識階級に於ては、永遠無窮の、そして無上の徳性と大能力をもつて宇宙に遍在する、そして人智を以て測定し得られない絶對的存在者のあるべきことを信じて、それを呼ぶに總てのものゝ父と言つてゐる。即ち宇宙の創造者であると同時に主宰者たる上帝を信じてゐるのである。勿論各學者の間に末葉に亘る異論は免れないが……。彼等の國では宇宙の創造者即ち上帝をミスタと呼んでゐる。

彼等が然うした信仰をもつに至つたのは、文化の發達が齎した自然の結果である。で、勿論吾人の信ずる天來の啓示ではない。私は基督の誕生、崇高偉大の人格とその教訓、十字架上の死、使徒及び門弟等の殉教的精神などを彼等に語つた。彼等は遂に續々としてこの新教義を奉ずるに至つた。

その理由は素より多々あらう。併し、少くともその一半は、教義が神を父として總ての人類を同

胞とし、なほ初代の基督教徒がした共同的生活が彼等の心靈にクツシリと相觸れたからである。

が、勿論基督教を信ずるに至つたのは彼等の中の極めて少數者である。しかし、改宗者を非難する者は一人もなかつた。たゞ改宗者の一人の氣が狂れたものが罰せられた。しかしそれは理性よりも感情に走り、その所信を着々として傳導することを忘れて他の一切の宗教を異端邪説として極端な攻撃をたゞめである。で、無神論以外の信仰が自由である彼國の法律がそれを罰したのは當然である。

概して彼等の國に於ける宗教の特異な點を擧ぐれば、勞働を以て人生最大の義務だとすること、彼等の教義に従へば、現世に於て懶惰若くば遊食の生活をした者は來世に於て奴隸となり、現世に於て人類社會のために努力したものは未來に於て必ずそれを酬はれる。で、彼等はその生活に困難を感じないの故を以て無爲に日を送ることはない。そしてまた彼等は人の厭ふ仕事をなすことを名譽とし、それと同時に難事業を完成することを誇りとしてゐる。また絶對に人の非難を爲さぬことを以て道としてゐる。

そしてその諸宗教の體系……類別を擧ぐれば、禁慾主義のもの即ち獨身生活をして妻帯肉食を避けるなどのものと、樂天主義のもの即ち結婚生活を以て、人性の自然に出づると同時に社會存續

上、特殊の理由を除く他は誰もが結婚すべき義務をもち、また、勞役の妨害若しくは身體の健康を害さぬ範圍内に於て誰もが相等の快樂を享受する權利を有つと信じてゐるのである。で、彼等は好んで肉食を攝り以て元氣と精力とを保持し増進せしむべくする。彼國に於てはこの教義をヨリ理智に合ふものとするが、前者の主張にも敬意を拂つてゐる。

彼國に於てはこの派の人を指してプスレスカス即ち敬虔の人と呼んでゐる。そしてその數は全國に十三ヶ寺を算するのみで、それに一人宛の主任と各々補助者二三を置くのみである。それには多年の修養と鍛練とを経た者が試験を経て任命されるのである。この種の人は社會風教上に偉大な勢力をもつてゐる。

この派の僧侶に限らず凡そこの國の僧侶は社會上頗る重要な地位にある。國民の道德、社會の風紀、冠婚葬祭などの一切が彼等の掌る所である。勿論その人格に於ても社會の儀表たるに充分であるが、若し彼等の中に犯罪者のある場合は、普通人のやうに裁判所に渡さず彼等自身が制裁することゝなつてゐる。

總ての宗派が、毎年と毎月との最初と最終との日を聖日として教會に行つて禮拜する。教會は國中に於ける彫刻家、建築家等の丹精を凝した所で、實に壯麗を極めてゐる。その中は數千人を容る

ると註されてゐる。それは會堂の數を少くしてあるがためである。各人はその中で思ひ／＼の神を念するので、勿論偶像や畫像はない。

毎月及び毎年の終りは特に感謝日と定められて、各人が禮拜堂に於て、神の聖恩を感謝するのである。また同時に犯した罪の懺悔もする。その翌朝彼等はまた禮拜堂に集まつて來るべき一ヶ月若しくは一ヶ年間の清い生活を送らしめらるべく上帝の加護と祝福とを祈る。

また彼等は動物を殺して神に捧ぐることを好まない。神への供物は神を敬し人を愛し汝々として勞役に従事すること以外にはないと信じてゐるのである。たゞ物質的のそれとして、乳香その他の香を焚き蠟燭を點するだけである。

そして聖所に於ける音樂のよく人心の琴線にピツタリと觸るゝ力をもつことは、到底歐洲に於ては見られない。

* * * * *

ラフハエル氏は以上の長物語りを終ると、「私がお話したことは、ユートピヤに於ける政治、法律、經濟、人情、風俗などについて見たものゝ片鱗に過ぎません。もつと詳しくお話することを得

ないのを遺憾に思ひますが追てまた……」と言つて私たちを笑顔で顧みた。

私は然うした新組織を我が英國に布くべくそして他の國にもその實行を見るべく努力することを誓つた。

私はその第一着手として斯うしてラフハエル氏の談話を記述したのである。」

眞樂主義經典(五)

釋迦も孔子も六十年一挺の蠟燭なり。釋迦孔子は生涯學びて教を遺しゝのみなり。固より辛き蕃椒が猶辛を學びたるにてもく斯の如し。況んや迂愚の凡人をや。教を開きて直ちに行はずんば時は去らん。一挺の蠟燭に火を點ずれば時に刻々に減るなり。六十年の一生は六寸の蠟燭に火を點じたるなり。須臾も躊躇することは得んや。(二宮尊徳)

第四編 ウキリアム、モリスの理想社會

一 驚 異

私は倫敦のハマスマイスの私の家で、馬鹿に熱苦しい思いで目をさました。それはその筈、朝日がさしこんでゐるんだもの。

何だか顔が變でならないので、飛び起きて頬を洗つて着物を着るなど、大急ぎでやつて見たが、まだどうもほんとうに目がさめない。そして何だか随分永い間眠つてゐたやうな氣もして、ならな

5。

私はそこを逃げるやうにして外へ出た。心地よい朝風が吹いて來るので少しは顔もはれぐしくなつた。

フト氣がついて見ると、これはしたり大變だ。昨夜寝た時はたしかに冬の初だつたのだが、川端の木々が緑滴たる装を凝してゐるのだから、今は確かに夏の初であらう。それなのに私は昨夜月の光に神秘をも語つてゐたテームス川が、今日は輝く朝日に歡喜してゐるのを見て、どうしても一日の晝と夜との差以上のことを認め得ないやうな氣がしてならない。私はこの驚異な現象のために顔が一層變になつて行くことをどうすることも能きなかつた。

テームス河の中流には多くの人が小舟を漕ぎ出して泳いでゐた。で、私も然うしやうと思つて恰度幸ひ直ぐ前に船付場の石段があるので降りて行くと、幾つもの小舟の中から客待ち顔の船頭が私に一寸目禮して岸に船を寄せたので私は直ぐにそれにとび乗つた。

舟が中流に來たころ、既に私は着物を脱いでゐたので、早速ザンブとばかり頭から水中に飛びこんだ。私は少時して水面に浮び上つてブルンと顔の水氣をはらつて、下流の鐵橋を見やつた。と、何たる變化の激しさであらう。私はまつたく吃驚した。私は、物の怪にでも襲はれたやうな氣がして大急ぎで舟に這ひ上つた。何だか目はハッキリと覺めたやうである。船頭は少し不審さうに眼を輝かして

「オヤ、もうお上りですか。何しろ今朝は少し冷いでせうね。如何です、直ぐに岸へ着ますか、そ

れとも未だ朝飯には間があるから川上の方へでも行つて見ますかね？」

「マア、少しこの邊から景色でも眺めるとしやうよ」

私は答へたが、彼の言葉つきといひ態度といひ、どうも船頭らしくない。よくよく見れば、實に立派な若者で、骨格の逞ましさに似ず、少しも荒くれた所はなく、而も一種の愉快げな人懐こい目なざしの所有者で、その服装は、古代の、それに改良を加へたやうな、極めて單純なそして潔白なものである。で、然るべき紳士が慰みに舟を漕ぐかのやう。

私は橋から東の方を見渡した。すると、あの高い石鑪製造所の煙筒も見えない。あの大きい機械工場もなくなつてゐる。

私は重ねてよくよく橋を見やつた。一夜のうちにマア何といふ變化であらう？昨日までの鐵橋が總て石造で、壯麗堅固を極めてゐるらしく、而も、欄干の上には、陳列店とも言ひさうな恰好の美しい建物が並んで見える。私はそれを見入りながら

「あの橋はいつ出來たのです？」

「なアにあまり古くもありませんよ、二千三年に開通式があつたのですから」

と答へた彼の言葉は、一層深い疑問の淵に私をつき陥した。これはウツカリ口を利くんでないぞ

……私は然う思ふと、さりげない顔をして兩岸を見渡したのである。

兩岸には、河岸から少し離れて、餘り高大ではないが、さもく住心地の良さうな、大概是赤煉瓦で屋根は瓦葺といふ、きれいな家が一行に並んでゐる。そして、家の前には川岸までズット花園があつて、さまざまの花が互に美を競つてゐる。それに、家の後には大きな木が林をなしてゐるので、それは恰でテームス河のこの部分を森の中の湖水のやうに見せてゐる。で、それこそ仙郷とでも言ひたい程である。

私の驚きは並大抵ではなかつたが、さあらぬ態で舟を岸に着けさせた。岸に上ると直ぐ私はズボンのポケットを探りながら、その船頭である紳士に對して失禮のやうな氣もしながら「お幾ら？」と聞いた。彼は何だか當惑さうな顔をして、その言葉が分らないといふ。私は少し赤面せざるを得なかつた。でも、重ねて「お尋ねして失禮だが、私は旅のものなので幾ら上げて良いか分らない。はなはだ失禮だが……」と言ひながら、彼の前に一握りの銀貨を差出した。その銀貨はみな錆てゐた。

船頭は少しも怒つたやうな色もなく、當惑な面もちして頻りにそれを眺めて、暫らく小首を傾けてゐたが

「ああ、やつと貴君の被仰ことが判りましたよ。あなたは私があなたのために働いたといふので何か私にやらうと言はれるのでせう。そんなことが昔はあつたさうですからね、しかし貴君の前では失禮ですが、そんなことは随分面倒臭い習慣ですね、私が舟を漕ぐのは私の當然しなければならぬ仕事なので、そのために誰も彼もから紀念の品を貰つたのでは、第一紀念品の置所に困つてしまひますからね」

オヤ／＼變なことを言ふ男だぞ氣違に違いないと私は思った。何だか居心地が悪いやうにさへ覺へた。が、どうして／＼、彼は氣違どころぢやない、私の貨幣を、何處か材料の不足した博物館にやつたら良いだらうとか、この博物館には總ゆる時代のがタンとあるからとか、貴君は遠方からの旅人と見受けるからこの土地のことをいろ／＼お話して上げやうけれども、一度には判らないだらから、少しづつ呑込むが良い。何も縁だから新世界の案内をしてやらうなど、實にタイシタことを言ひ出した。で、私は安心すると同時に彼の相等の敬意を拂はない譯に行かなくなつた。そして一種の懐かしみさへ覺えた。

「御親切は感謝に堪えません、それでは貴君の御仕事の妨げになつて恐縮しますから」と私がいふと、彼はさも譯なささうに

「イヤ、恰度良いあんばいに、私の友人で機織をしてゐるのが、しばらく變つた仕事をしたと言つてゐるからそれに任せることゝしませう。彼はあなたと同じくあの客館に住んでゐますから」と言つて彼は私を客館の前に伴ふた。(そこは私の舊宅なのである)彼は腰のポケットから銀の笛を取出して吹きならした。

と、一人の若者が客館の中から出て來た。彼は「おい、ロバート君」となれ／＼しく聲をかけて、自分で私を案内するからと言つて舟のことを彼に托した。彼は喜んで

「然うか有難うヂツク君……それにしても一しよに朝飯を食べやうよ(私に向つて)あなたはたしか昨夜私が寝たあとでこの客館にいらしたのですね」

といふ。私は、この場合いろ／＼いふのは面倒の種子と思つたので、一寸笑顔で頷いておいたが、どう見ても二人とも氣違ひではないらしい。今度は反對に私自身が怪しくなり出した。

二 四十二歳の娘

私は、二人について、客館——赤煉瓦に亞鉛の屋根を葺いた——の中の食堂にはいつた。さまざま

廣くもないが、何となく感じの良い、そして愉快な部屋である。

單純なそして輕快な服装をサモ涼し氣に着こなし、その顔には、如何にも親切さうなそして如何にも愉快氣な、活々としたサモ健康らしい三人の美人——その一名は頗るづきの——があちらちちと歩いてゐた。

私等がそこに入るのを見ると、彼女等はさゞめきながら、それは恰度長の旅から歸つた兄弟をでも迎へるやうに如何にも親しげに私の手を握つた。三人が三人とも——。(彼女等は私の服装の奇妙さにすこし驚いたやうではあつたが——)

ロバートが何か二言三言いふと、彼女等は笑顔で頷いて私たちの手をとつて、いそ／＼と彼方のテーブルに導いた。

一人の女は花園の方に走つて行つて間もなく美しい薔薇の花を一抱え取つて來て、それを美しいガラスの鉢へ活けた。また一人は美事に熟れた苺を大きなキャベツの葉に盛つて持つて來た。

私とヂツクとは間もなく食事に取かゝつたが、ロバートは女の肩を叩きなどして頻りにからかつてゐた。

食品は簡單ではあるが、料理は極めてよく、殊にパンは飛びきり良く出來てゐる。私はそれらを

賞味しながら、フト顔を上げて何気なく向ふの壁を見た。と、私は激しい驚きに震えた。何故ならその壁に金文字で

171

來客よ、隣人よ、この客館は曾てハマスミス社會黨の講堂の在つた舊跡です。記念のため一杯の祝酒を酌み給へ！一九六二年五月

と題されてゐるのだもの——（ハマスミス社會黨の講堂とは、著者モリスがその邸内に建築してゐたものである）

私の顔は驚きに色を失つてゐたにちがひない。殊に一九六二年といふのを見て私は極度に驚いた。と、いふよりは呆然としてゐただらう。

私の驚きを見て彼等は今までの騒ぎをビタリと止めてしまつた。暫らくした後、ロバートは私に向つて

「あなたのお名前は何と被仰？名前を知らなくつちや、いつまでもお客さんでは可笑しいやうですから……」

「それで結構、たゞ、お客さんと呼んで下さいよ、名乗る程のものではないから」

と私が言つたのには餘り耳もかさないうやうにして、彼はさらに私に何處から來たのかと問ふた。

この時、チックはたしかにテーブルの下でロバートの足を蹴つてそんな質問を止させやうとしてゐたやうだが、ロバートは知らぬ顔して私の答を待つてゐる。私は「ハマスミスから」だとうつかり言はうとしたが、やつと際どい所でそれを呑み込んで

「實はね、私も生れは倫敦なんです、何しろ永い間外國に行つたので、今ではもう勝手の判らないことばかりですよ」

と、私はうまく調子を合はせてお茶を濁さうとしたが、ロバートの奴なか／＼遠慮のない男で、いろ／＼倫敦の昔話をすべて餘儀なくさせた。一同は興味をもつて聞いた。殊に、女の中の飛びきり良いのなんかは、何だか香の高い草花を持つた手を私の肩になげかけて媚びるやうな情態をしながら熱心に耳を傾けてゐた。

私が良い氣になつて話してゐると、彼のロバートが又候私に「お幾つなんですか一體あなたは？」といふ質問だ。と、女達は互に顔見合せて笑つてゐる。チックは「そんな無稽なことを聞くものではない、失禮な……」など、ロバートをたしなめる。私は苦笑しながら

「イヤ、何も私が女ではなし構ふものですか私はこれでも未だ五十六ですよ」

と答へると、チックは私の顔に眼を据えて「ヘエ」と言つて驚いた。他の人々は笑ひこけてゐ

る。私もそれにつりこまれて笑ひ出したが、何が何やらサツパリその譯が判らない。私が餘り不思議でならないので尋ねると例の美しい女が微笑ながら

「それはね、あなたが年齢よりもふけていらつしやるからなんですのよ。ですけれどそれもその筈ですわ、あなたは永いなが旅をお続けなされたのですものね。それも未だよく開けない國々にだと被仰たでせう、そんな不幸な社會にゐる人達の中に入つてゐると誰でも非常に早くふけるさうですものね……（少し顔を赤らめて）アノ……それでは、あなた私を幾つ位と思召て？」

「然うですね、サア、廿歳位でせうよ」

「オホ、まああなたは随分お世辭がお上手ですこと。私もう四十二になりますのよ」

私は實際驚いてしまつた。私の瞠つてる眼の中に彼女の美しい顔がクス／＼笑ふ。その麗々しい顔には苦勞の皺の一筋もなく、またその豊かな、それでゐて何處となく引しまつた肉づきといひ、どうしても廿歳前後としか思はれない程の若々しさである。殊に、袖を甲斐々々しくまくり上げた兩腕の美しいことつたら、ゾツとふるひつきたい程である。

私は餘りの驚きに呆れ返つて彼女を見つめてゐた。で、彼女はまた少し顔を赤らめたが、フト思ひついたやうに

「オヤ、私また今朝は御用があつたのにツイうっかりしてゐたわ、では皆さん左様なら」と、美しい聲を残して活潑に歩み去つた。

その後で、ヂツクが私からロバートに質問しては如何といふ。で、それをキツカケに私はロバートにその職業を問ふと

「なアに私はつまらない機械なんですよ。そのほかにすこし印刷もやりますが、この頃ではいくらもやりませんし、舊式の印刷術も追々廢止の傾きなものですから、今度は少し數學をやつてみる考へでゐます。それから、すこしばかり十九世紀末の歴史を調べてゐますから近くそれを……つまりこの大變化の起つた以前の社會のことを明かに書くつもりでゐます。いつかヂツクのゐない時にゆつくりお話しして下さいね。一體この男は私が充分に手足の働きをしないと云つてひやかしてばかりゐるのですが、何しろやつてゐる仕事の仕事なものですからね。私が見た本によると、昔は手足の働きをする者を賤んだやうですが、しかし今では全然反對になつてゐるのですよ」

ロバートが得意になつて、これから話に油が乗らうとしてゐる矢先、馬車の用意が出来たとの知らせが來た。

私とヂツクとは、ロバートや女達に送られて玄關へ出た。馬車は、極めて手輕なそれでゐて丈夫